

そう遠くない未来に 小杉 匠



オフィスの窓ガラス越しに柔らかな夕陽の光が差し込み、辺りが黄昏色に染まる。金曜17時までの定例会議を終え、会議室からデスクに戻る途中、胸ポケットに入れていた社用の携帯電話が鳴った。

「西山さん、今日の会社説明会に学生が来てるんですが、その中の真木さんという学生が、西山さんにもしお時間があればお会いしたいと言っておられます。いかがしましょう？」

人事部の岡田次長から仕事中に突然の電話だ。確かに新卒採用のパンフレットに自分が顔写真入りで紹介されているが、わざわざ対面で会いたいとはどういう魂胆なんだろう。

「なぜ私に？」

「大学の後輩にあたるそうです。研究室も同じで、無理を承知でと。礼儀正しい感じの好青年ですよ」

会社説明会に来たという青二才の青年。岡田によると、どうやら京華大学工学部環境工学科の後輩にあたるらしい。岡田の口調は「是が非でも会ってくれ」と懇願している感じだ。人事部的には長年確保できていない京華大学からの学生ということで、できる限りの対応をしたいといったところなのだろう。

「うちの大学から当社へ、って珍しいですね。久々じゃないのかな？ ちょっとロビーに待たせておいてください。すぐ行きますよ」

西山はファイルと手帳をデスクに置くと、手洗いで髪の毛を整え、都市ゴミ焼却炉や水処理施設の模型や各種パネルを展示してあるロビーに向かった。ロビーの中にあるいくつかの円卓は社員の利用が禁じられている。業者との商談をしている感じの後輩社員が数名いたが、明らかに学生と分かる青年は一人しかおらず、西山にはすぐにそれが真木だと分かった。真木は慣れないネクタイをしきりに気にしながら、大先輩との出会いを前にうっすらと額に汗を浮かべていた。西山は笑みを浮かべてその青年に歩み寄った。

「真木くんだね。西山です。当社へようこそ。よろしく」

西山が満面の笑顔で手を差し出すと、少し恐縮した面持ちで真木が握り返してきた。

「まあ、そう緊張しないで。おかけください。飲み物はホッとコーヒーでいいかな？」

西山が務めるのは「東洋テクノロジー」という業界大手の環境エンジニアリング会社だ。廃棄物処理設備や上下水処理設備の設計・施工、土壌汚染浄化サービスなど幅広い環境事業を手掛けている。西山が部長を務める商品開発部はこれら全般の技術開発から実証、商品開発を担う。と言葉で言うと聞こえがいいが、泥臭い商売だ。廃棄物処理であればゴミにまみれ、下水処理であれば下水汚泥にまみれる。世間一般の衛生的な生活は昔風の言葉でいえば彼らの”3K”的な仕事ぶりに上に成り立っているといっても過言ではないだろう。西山も今でこそ内勤続きで現場を離れたが、若い頃は下水処理場で泥と格闘した口だ。社内での実験はともかく、現地試験での昼休みなどは汚れた作業着で定食屋に入っては好奇の目や憐みの目で見られることも多くあった。それが理由という訳でもないのだろうが、西山の後輩にあたる京華大学の学生はここ20年間入社していない。まあ同業他社には入社しているのだから他に理由があるのだろう。

西山はそんな本音トークを交えながら、大学生時代の思い出から現職にかける情熱まで熱く語った。

「まあ、私からの説明はざっと以上です。決して、楽な仕事ではないし、綺麗事では片付かない真剣勝負が君達を待っています。ただ、これだけは言える。遣り甲斐は抜群にある仕事だよ。単なるモノづくりに留まらない、地域課題、社会課題の解決に繋がる仕事をしているという自負は私だけでなく、おそらく全社員が共有していると思います」

西山の説明を一通り聞き終えた真木は目を輝かせていた。

「なんか言葉を失っちゃいました。あまりに臨場感に溢れていて、西山部長のお顔も自信に満ち溢れていらして、こんなことを申しては失礼なのかもしれませんが、他社ではこんな感情の高ぶりは一切なかったです」

「まあウチは規模の割に地味な会社だし、期待していなかった分、予想外の新たな気付きや発見が多いのかもね。でも、業界最大手と比べて遥かに資本や人員規模の見劣りする会社が生き延びようとしたら、それなりの工夫をするものだよ。その魅力に気付く人が割と少ないというか、企業のブランドネームに引きずられる人が多い、というのが現実だと思うけどね。要は自分の価値観をどこに置くかだよ。名を取るか、実を取るか」

コーヒーカップに手を伸ばしながら、西山はゆったりした口調でそう語りかけた。あくまで西山の持論でしかなかったが、この学生には本音を伝えたいと人事部の岡田次長さながら肩入れしたくなる自分に気付いていた。決してやる気に満ち溢れているようには見えないが、独特の空気感というか透明感が彼にはあった。そして『何か』をやりそうな秘めた闘志が彼の心の内奥にあるような気がしてならなかった。

「よかったらウチに来なよ。人事部には私から話しておくから」

別れ際に西山は真木にそう告げると、「そうそう、これをあげようと思ってさっきデスクの引き出しから持ってきたんだ」

そう言って西山はプラスチックケースに入ったネクタイピンを真木に渡した。

「記念に持って帰りなさい」

「いえ、そんな。大学の先輩に甘えに来た訳じゃないですから」

真木がそう答えると西山はにやっと笑って、「これ何からできていると思う？」と真木に尋ねた。

「え、そうですね、御影石ですか？」

「ブブー。不正解。正解は『遊び心』だよ」

「遊び心？」

「そう、それはウチの部員が研究所の電気炉で下水汚泥を1450℃で溶融して生成したスラグを削ったものなんだ。とても人間の糞便からできているとは思えないだろう」

呆気にとられている真木をよそに西山はしたり顔だ。

「あー、もちろん臭いはないよ、有機物は完全に揮発して無機物が溶融固化している状態だから。成分を調整することでガラス質ではなく石材にすることも技術的には可能なんだ。そういう意味では、君の『御影石』という回答は誤りではないね」

西山はさも愉快といった表情で、困惑している真木にまくし立てた。

「こういうところから新しい技術やサービスが生まれてくるんだよ。君もウチに入ればその感覚を掴むことができると思うよ」

帰りの新幹線で真木は不思議な感覚に捕らわれていた。今回の上京で都合4社を廻ったが、東洋テクノロジー以外で聞いた通り一遍の説明会の内容は頭から完全に抜け落ちていた。

「段違いだな……」

真木は各社からもらった資料を一通り読み通すと、東洋テクノロジー以外の書類を駅のホームでゴミ箱に捨てた。この時点で真木の就職活動は既に終了していた。

真木は翌年の春、卒業式を終え、ボストンバッグ一個持って京都から一路東京に向かった。真木が採用試験を受けたのは結局東洋テクノロジー一社だけだった。万が一の不安がないといえど嘘になるが、西山の言葉を聞いて以来、他社のことは眼中になかった。もし就職浪人したらそのときだ、とまで腹を括っていた。郷里広島に住む両親には「東洋テクノロジーという環境エンジニアリング会社に入る。人事部とも密に連絡取ってるし、大丈夫だよ」と、他社も視野に入れて、という声を制止し続けた。果たして8月に内定通知が手元に届いたときには安堵の念以外の何も浮かばなかった。すぐさま、人事部に御礼の電話をし、その電話を西山にも転送してもらった。

「ようこそ、我が社へ」と西山は電話越しに笑顔が伝わってくるような優しい声色で真木を迎え入れた。二人が実際に会ってから4箇月の月日が流れていた。就職に対する不安はまるでなかった。むしろ残り半年が早く経過することを願ってやまない自分があった。

そして今日3月25日、喜び勇んで上京した。日本経済の中心、人種のるつぼに飛び込む覚悟で颯爽と登場するはずだった。しかし、独身寮の最寄駅はJR京葉線、千葉県の市川塩浜駅。近所にAmazonの物流センターや様々な業種の工場があるとはいえ、隣駅の新浦安や東京ディズニーリゾートがある舞浜駅と比べると随分見劣りする。駅のロータリーにはタクシーも2、3台しか停まっておらず、一緒に降車した人数もごく少数だった。その数名もすぐに駅前から姿を消し、真木は駅のロータリーの前に一人取り残された。

「東京の会社に就職って、いきなり千葉か。それも寂れまくり……」

そこへ、一台の白いセダンがロータリーに入ってきたかと思うとクラクションをピツ、ピツと2度鳴らし、窓越しに「待たせたね！」と坊主頭の^{いか}厳ついおじさんが声を掛けて、急停車した。

「あ、あの寮長さんですか？」

「真木くんだろ、見りゃ分かるよ。色黒のガリガリ君って聞いてたけど、そのまんまだな。早く乗りな！」と言って、助手席に乗り込むよう促した。

「車だとほんの5分足らずなんだけど、歩くと結構かかるんでね。しかし軽装だな。もっと荷物が多いのかと思ってたよ」

まるで人見知りという言葉を知らないような寮長に威圧されつつも、真木は「はい、大抵のものは処分するか、実家に送っておきましたので……」と当たり障りのない返事をしておいた。「まあ、あれこれたくさん持ってくるっていうのも何か女々しいよな。ほら、着いたぞ、ここ、

ここ！」

寮長は門扉の間に車を滑り込ませると、慣れた手付きで白線で囲ったセンターに車を一発で停めた。

「おし、一仕事終わりっと！」

そう言って車外に出て立ち上がった寮長は身長190cmはあるだろう大男だった。「まるで海坊主って感じだな……」と思いながら、送迎の礼を告げると、「着いてきな、案内するから」と真木を後ろに従わせた。随分と手厚い待遇だな、などと感じつつ、食堂、風呂、トイレ、洗濯室、調理場など生活に必要な場所を順次説明してもらった。一通りの説明が終わった後、「で、部屋は201号室。送ってきた荷物は全部入れてあるはずだから確認しておいてくれ。じゃ」と言って、鍵を渡された。ようやく一人になれた真木は2階の部屋を順番に眺めて行った。既にどの部屋も入居者の名前が書かれているが、これから入居する人の部屋なのか、先輩が既に入居しているのか分からない。果たして201号室は2階の一番端の非常階段に一番近い角部屋だった。「ほほう、ここか！」と胸躍らせながら、鍵を鍵穴に刺し、カチャッと開ける。恐る恐るドアノブを回すと思いの外ドアが重い。

「あれ？ あれあれあれ！？」

慌ててドアを閉めようとしたが時既に遅し、ドアの圧力に負け、真木は廊下に尻餅をついてしまった。布団袋がなだれて部屋の外の廊下まで転がってきている。

「あーあーあー」

大きな物音に驚いて、寮長が1階から駆け上がってきた。

「やっぱり雪崩れたか。怪我はないか？ 手伝おう。押し込むぞ」

寮長に促されて布団袋の移動をしようと部屋の中を覗き込むと「せ、狭い……」。どうやらキャパオーバーで溢れ出したようだ。

「とりあえず今日の寝床をつくらなとな」

寮長は豪快に笑い飛ばしたが、真木は笑っていられる状況ではなかった。学生時代のワンルームマンションよりも一回りも二回りも狭い。これは由々しき問題だ。何か捨てるべきか。寮長と一緒に布団袋を担いで、とりあえず部屋の中に入れることには成功した。しかし、大量の段ボールと狭い部屋はあまりに不釣り合いだった。

「こりゃ、二人は入れないな。何しろ狭いからよ、とりあえずすぐ使うものだけ出して、後どうするかよく考えるんだな。困ったら呼んでくれ、1階の管理人室にいるから」

そう言うと寮長はぶいっと元来たほうに戻って行った。

「親切なのか、不親切なのか分かったもんじゃないな……」

真木は苦笑しながら、狭い部屋の中で堆く積まれた段ボール箱やテレビ等を見渡し、途方に暮れた。一見順調に見えた上京生活だったが、一転して波乱の幕開けとなった。

新入社員の入寮生は真木が初めてだったが、同日に他3名を迎え、続々と入寮する者が翌日以降も続いた。真木は最初に案内されたからという理由で、寮長から皆へのオリエンテーション係を頼まれた。

「要は自分が楽しんでんじゃねーか」とも思いながら、同期の名前や顔もすぐ覚えることができ、真木はその役回りを楽しむようになっていた。3日間そんな日が続いて都合20名の新入寮生が出揃ったところで、先輩寮生に寮周辺の情報を教えてもらい、一齐に家電製品や食料等の調達に出向くなど、和気藹々とした寮生活が始まった。その週の土曜日夜には先輩が企画した歓迎会ということで、新入寮生の自己紹介から一発芸、飲み比べなど、朝まで浴びるほど酒を飲まされ、社会人生活の洗礼を受けた。

真木は元々そんなに皆の中心ではしゃぐ性格ではないが、そういう明るいノリは嫌いではなかった。周囲のはしゃぎように合わせながら、学生時代の延長のような日々を楽しんでいた。

そうこうしている間に時は過ぎ、あっという間に4月に突入した。

寮生活の新人20名で申し合わせて、4月4日の入社式に向かった。新入社員として初めて訪れる東洋テクノロジー社内は、男女合わせて総勢50名の新入社員を迎え、人事部、総務部を中心に殺気立っている。真木ら新入社員は、人事部の採用・育成担当の森田に今日の会場である80名程度収容可能な大会議室まで案内された。真木は一列目中央の席に通された。

「緊張するな」

真木は後ろの席の近藤に話しかけた。近藤は「俺はお前の後ろで寝てるよ。いびきかかないようにしなきゃな」と言って笑った。準備で騒がしかった会場も開会5分前となり、皆所定の位置に

付き静寂が訪れた。そして、中央の椅子と椅子の間の通路を社長と思しき黒縁眼鏡の男性、眼光鋭いヘアクリームを撫で付けオールバックに決めた長身の男性、柔和な顔つきが印象的で小柄な男性の三人が前方のステージに上がり、椅子に着座した。それぞれ黒田社長、宮津専務、辻内専務の社内TOP3だった。

「あれが噂の宮津さんか。一目見ただけで『切れ者』って分かるな」

隣席の桜井が小声で真木に話しかけてきた。

「宮津さんってあの人？ お前知ってるのか？」

「知らないのか？ 業界じゃ有名人だぞ。よく新聞や雑誌にも顔写真入りで出てるだろ。当社の技術系トップだよ」

「じゃあ、俺達の大ボスという訳だ」

「では皆さん、これより平成20年東洋テクノロジー株式会社入社式を執り行います。はじめに黒田社長から一言いただきます」

人事部長の小林が緊張した面持ちで第一声を放ったマイクから退き、黒田に場所を譲った。

「皆さん、入社おめでとうございます。社長の黒田です。この度は全国から選りすぐりの50名を迎え、当社の将来を担う人材がここに集結した瞬間を大変喜ばしく思っています。……」

続いて、宮津、辻内からの挨拶が手短かに終わり、新入社員を代表して真木が壇上に立った。

「黒田社長、宮津専務、辻内専務はじめご列席の皆様、本日は我々50名を皆様と共に社会という戦場で戦う一員として受け入れていただき、大変感謝しております。勉学やスポーツに打ち込んだ大学生活も終わり、我々も遂に社会人として自らの叡智を社会に還元していく段階になりました。しかし、我々にはまだまだその力は備わっておりません。この東洋テクノロジーで先輩社員の皆様のご指導、ご鞭撻を賜り、社会有為な人材になることをここに誓います。平成二十年四月四日 新入社員代表 真木洋介」

入社式の翌日からオリエンテーションが始まり、社内各部署の見学から工場・研究所見学、また自社製品納入先の工場見学など、社会科見学のような日々が一週間ほど続いた。その後は、座学を中心としたビジネスマナー研修やコミュニケーション基礎など様々なカリキュラムが本社の

会議室を占有する形で行われた。真木が一番興味を持ったのは製図演習だった。この演習では、理系の新入社員向けに、品物の映像を平行光線で画面に投影する正投影法を機器設計部の先輩社員数名が指導する。真木らはJIS B 0001で規定された、第三角に品物を置いて投影する第三角法について三日間に亘って指導を受けた。

そうこうする間に初めての給料日を迎えた。

「皆さん、今日が給料日になりますが、これは皆さんへの投資と考えてください。今回の研修では一人当たり約10万円を投じています。これは従業員数1,000名以上の企業の平均値である約5万円と比較して遥かに高い投資額です。その上に、まだ配属も決まっていないうわば見習いの段階で給料をいただけることに感謝して大切に使ってください。と、私も新入社員当時に人事部の研修担当の方から言われました」

「ちなみに森田さんは初めての給料、何に使ったんですか？」

にやけた表情で加藤が尋ねた。森田は笑いながら「親に仕送りを、と言いたいところですが、同期と飲みに行きましたよ。随分派手にね」と返した。

「皆さんがこうして一堂に会する機会も研修が終わればグッと減りますからね。その辺も頭に入れてこの研修期間を大切に過ごしてください」

森田はちゃんとメの言葉も忘れなかった。確かに毎日同じメンツで朝から晩まで過ごして学校の延長みたいだと思っていたが、こんな日もそう長くは続かない。

「今日飲めるヤツはみんな集まって飲もうぜ！」

同期の中で『ホスト顔』と評されている近藤が声を上げると、女性陣から「私も行く」、「連れてって！」と同調する声が出て、自然と男性陣もそれに続いた。和気藹々とした社会人生活のスタート。金曜日なのをいいことに、その日は3軒ハシゴして、寮生は寮の多目的室で朝まで飲み明かした。

2箇月間の新人研修も無事終わり、真木は計ったかのように西山が部長を務める商品開発部に配属された。部の歓迎会で「期待の新人」と紹介され、「そんなこと言われても右も左も分からない新人なのに……」などと思いながら、周囲の好奇の視線に耐える日々が続いた。

真木が最初に担当したのは下水汚泥のメタン発酵技術だ。メタン発酵自体は古くから確立された技術だが、東洋テクノロジーが目論むのは従来技術よりも消化率を格段に向上させてバイオガス発生量を増やし、汚泥の減量化と回収エネルギー量の増加を図るための技術開発だ。西山は真木の指導役として入社10年目の門田をつけた。門田は消化促進技術の一切合財を任されており、その当面のサポート役として真木があてがわれた格好だ。

研究所の実験室には容量5リットルの三角フラスコをメタン発酵槽に見立てた実験装置が5セット組んである。真木が門田に案内されて初めて見たときには実験開始後2週間、下水汚泥の滞留日数を30日とすると約半分が経過したところだ。門田の地道な実験で、消化促進のための前処理技術の候補はある程度絞られていた。下水汚泥の生物処理で生じる微生物の死骸である余剰汚泥は一般的に難分解性で消化率が低い。このため、何らかの前処理を施すことが効果的とされており、消化促進技術としてボールミルを利用した物理的破碎、オートクレーブ処理等による熱処理、酸・アルカリやオゾン等による化学的処理などが代表的な技術とされる。物理的破碎は文字通り汚泥を摩砕して細胞壁もろとも破壊するというもの、熱処理は汚泥を熱の力で変性させるというもの、化学的処理は加熱処理や酸・アルカリ、オゾン等の添加により細胞壁を破壊するというものだ。いずれも投入エネルギーやコストの問題から実用化段階に至らないという状況が長年続いている。

この状況を打破するために門田が当時着目していたのは磁気フェライト処理による汚泥の可溶化技術だ。当時、東洋テクノロジーでは都市ゴミ焼却飛灰のフェライト化による重金属固定化技術の開発に取り組んでいた。フェライトとは酸化鉄を主成分とするセラミックスの総称で、一般に強磁性を示し、磁性材料として広く用いられている。この廃材からのフェライト化物を余剰返送汚泥ラインに組み込み、フェライト粒子に交流磁場をかけることでモーションを制御し、マイクロオーダーでのボールミル効果すなわち、汚泥の可溶化、ひいては消化促進が可能になるという原理である。時期を同じくして磁気フェライト処理の研究に取り組んでいた帝都大学理工学部の研究グループとは既に共同研究体制を敷いており、東洋は相互の技術協力に関して既にMOU（研究協力覚書）を交わしている。ただし、磁気処理一般で見た場合には水処理等への応用で科学界、産業界からも懐疑的な見方も多く、また技術的にも未解明なものが多かった。しかし、実機ベースでの展開を考えた場合には初期投資が大きく、高い維持管理費や投入エネルギーを要する摩砕装置やオゾン発生器の導入は特に汚泥処理においては考えにくい。廃材からのフェライト利用を可能とし、磁気処理の効果が確かであれば、磁気フェライト反応槽の初期設置費用プラ

スアルファで相応の効果が得られるかもしれないという一種の賭けであった。

実験室の試験装置は、無処理系（コントロール）、物理的破碎系、酸・アルカリ添加系、オゾン処理系、磁気フェライト処理系の5種類としている。長丁場の試験のため、実験条件をある程度限定せざるを得ず、なかなか磁気フェライト処理系が他の系を上回るような効果を得られていないのが門田の目下の悩みだ。そのため、真木には帝都大学や社内のフェライト化研究グループとの連携により、磁気フェライト処理系の最適条件を見出すことを指示した。

真木は、実験の合間を見ながら、既存の文献や特許を知財戦略部と協同して調査し、「特許請求の範囲」、「発明の概要」、「産業上の利用可能性」等の必要事項のドラフトを書き、弁理士事務所へ日参した。実験に明け暮れる日々の中、特許請求の可能性が開けてきてようやく、「エンジニア」になった実感が徐々に湧いてきていた。

消化促進試験の説明を受けた2週間後に、門田と真木で設計し、業者に製作依頼していた新しい試験機が到着した。コンパクトかつ複数のパラメーターに触れるようにSUS製の中空直方体を十二分し、それぞれを容量3リットルの12連発酵槽に見立てる。この側面と下部はウォータージャケットで保護し、温浴層として発酵槽を一定温度に保持することができる。発酵槽上面は開口し、アクリル板で蓋をして隙間をチューブ状シリコンで完全密閉する。このアクリル板の中央部には攪拌機とガス捕集孔を設置している。生成したバイオガスはシリコンチューブを通じて上部に設置したアクリル製水槽底面に空けた穴を通り、プラスチック製のパイプを伝って、市販のプラスチック製1リットルシリンダーで捕集される。要は発酵槽からバイオガスが発生するとシリンダーがアクリル製水槽の水面に浮かぶので、その昇った高さでガス発生量を把握できるという訳だ。

基礎実験の結果が明らかになり、エネルギーバランス的に磁気処理系のいくつかの条件で他の系との有意な差が見られた。そのため新しい試験装置を用いて、4系列を磁気処理系、残る4系列を無処理系、熱化学的処理系、オゾン処理系、磁気フェライト処理系とし、ベンチスケール試験第2弾を実施することとした。今までは会社の研究所から程近く、汚泥譲渡の融通が利く勝鬨下水処理場の汚泥を使用してきたが、まだ試験段階にも関わらず営業マンの提案に食い付いてきた福岡県的那珂川下水処理場の汚泥をポリタンク数十缶で搬送してもらった汚泥を使っただけの本格的な実験だ。これでパラメーターフィッティングを行い、これまでと同等の試験結果を得られれば現地でのパイロット試験に乗り出す。

「いつまでも泥遊びしてんじゃねーぞ！ 結果出せ、結果！」

データ整理や実験レポートの作成で本社にいと、容赦なく西山の叱咤激励が飛んでくる。事実、西山は結果を出し続けて今の地位に上り詰めた。西山の功績は計り知れない。欧州のアンドレア社と共同開発したベルトプレス脱水機に始まり、自社独自開発の超高効率遠心脱水機まで。まさに技術開発の申し子とも言うべき存在だ。直接指導を受ける真木は西山に追い付けると感じた

ことはない。それくらい圧倒的な存在だった。

西山は真木を愛情の裏返しのごとく、しごきにしごいた、一人前の社会人にするために。

「温度よし、攪拌機よし、ガスのリークなし。異常なし！」

プレハブの鍵を開け、試験装置の異常がないことを点呼確認しながら、朝のラジオ体操に向かう。ここは福岡県的那珂川下水処理場だ。真木は福岡駅前のホテルから毎日バスで当地に通っている。消化促進パイロットプラントの建設が先月終了した。下水処理場の脱水機棟の横の更地に建てた3間4間サイズのプレハブには容量1m³のポリエチレン樹脂製タンクをメタン発酵槽に見立て3槽設置した。それぞれに処理場の余剰返送汚泥がポンプで圧送される。汚泥が発酵槽に入る前に配管を挟み込むように磁石を3箇所設置した磁気処理の系列、コスト的な問題はあるながらもベンチスケール試験では磁気処理同等の消化促進効果が得られていたオゾン処理系列、無処理系の3系列としている。

「森沢監督、おはようございます！」

真木が勤める東洋テクノロジーグループの工事会社から脱水機の建設工事の監督に入っている森沢が同じくラジオ体操をしに、下請け連中を引き連れ外に出てきた。この朝の体操模様は本社・研究所勤務では体感できない。他社も何も関係なく、同じ処理場内で工事に携わる人間達がお互いの無事を祈りながら挨拶し合うのだ。会社としてはライバル同士なのかもしれないが、当人達にとっては同じ時間を同じ場所で過ごす戦友のようなものなのだ。

「おっす、真木くん。今日も爽やかだなあ！」

森沢が鼻筋に蓄えた白髭を手で弄びながら、真木を冷やかす。一週間前に門田とともに初現地入りし、森沢のプレハブを訪ねたときには強面の森沢にどつきりした真木だったが、今や門田も東京に帰ってしまい、頼りになるのは森沢程度という状況の真木にとっては誰よりも頼もしい先輩だった。

「実験とやらは順調かい？」

「ええ、おかげさまで。結果が出るまでは時間がかかりますが、計器類の異常は今のところなさそうです」

「そうか、そりゃあよかった」

安全靴の底にこびりついた泥を落としながら、森沢はグルグルと身体を回した。

「まあ、俺には実験とか何とかよく分からんが、怪我だけはするなよな。現場経験もないこと

だし、油断してると何が起きるかわからんからな」

森沢の忠告を真摯に受け止めながら、音楽に合わせて足腰を伸ばし、ほぐしていく。こうして、仕事のスイッチが入ってくる。

ラジオ体操が終わり、プレハブに一人戻ると、今日の予定を確認し、各槽内の汚泥温度やガス発生量の経時的变化を記録する。そうこうしているうちに、普段は処理場の維持管理に入っている那珂川テクノメンテからバイトに入ってくれた3人のうち、最年少の植田が「おはようございます」と張りのある声でプレハブに入ってきた。バイトの彼らは三者三様だ。ギャンブル好きの青二才もいれば無類の女好きもいる。かたや、真っ当に家庭を築いている不惑過ぎの男もいる。最初に会ったときには自分がバイトとして使いこなせるのかやや不安だった真木だが、ここ数日で信頼関係が出来上がり、お互いにお互いを認め合いながら一緒の方向を目指す仲間だ。

試験プラント建設工事の終盤から現地入りして一週間。実験が始動したのが2日前。当初の設定条件通りに立ち上がったため、メタン発酵の滞留日数を30日とすると、結果が出るのが概ねその3倍の3箇月後だ。ただし、傾向は概ね30日程度で見定めるものとし、実験条件の変更等がある場合にはそのタイミングで行う必要がある。また、何らかのトラブルが発生すれば否応なしに実験期間は延長される。顧客の敷地、汚泥、ユーティリティ（水・電気等）を拝借しての試験ということもあり、そう簡単に失敗は許されない。しかし、脱水や乾燥と異なり、メタン発酵というそもそも結果が出るまで長丁場の試験だ。早く結果を出そうという焦りが失敗を産むはずだ。初めてのパイロット試験とはいえ、研究所でのベンチスケールテストの結果を再現しさえすれば何の問題もない。ここは努めて冷静に振る舞うべきだ。

那珂川下水処理場の雰囲気にも慣れ、あっという間に1箇月の月日が流れた。処理場に建設工事に入っている他社の現場監督や下請け業者の方々とも顔見知りになり、まだ若手ということで、どこに行っても可愛がってもらった。しかし、肝心の実験のほうは順調とは言えない状況だった。オゾン処理系の消化ガス発生量が著しく大きいのに比べ、磁気フェライト系の消化ガス発生量は無処理系と比較して10%増に届くか届かないかという程度だ。研究所で記録したガス発生量80%増と比べると物足りないどころか、別物としか思えない状況だ。

——何が悪いんだろう。確かにスケールアップ規模としては大きいけど、ここまでの違いが出ると思えないのだが……

実験開始から1箇月ということで、東京本社から門田がやってきた。門田は実験状況を見るなり真木に怒鳴った。

「一体どうなっているんだ！ 消化促進効果が全然出てないじゃないか！！」

門田の怒声がプレハブ内に響き渡る。現地実験開始から2箇月が経過するが、状況が芳しくないのだ。オゾン処理系列は無処理系と比べ、十分な消化促進効果を示しているが、磁気フェライト系は無処理とほぼ変わらない状況だ。

「想定される各種原因は一通り当たったのですが……。ベンチスケールと比べ、磁気フェライト槽の容量が大きい分、汚泥とフェライト粒子との衝突頻度が少なく汚泥全体への効果が乏しいのではないかと……。それで一時的に磁気フェライト化槽への送泥量を絞り、滞留時間を2倍、3倍にしてみたのですが効果は乏しいようです。次に、磁気フェライト槽のスケールダウンを考え、ベンチスケール試験の規模に近付けるべく20リットルタンクを5基配列し、それぞれに磁石を取り付けたのですが、それでも目立った効果が出ません……」

「ベンチ試験機を持ちこめ」

「はい？」

「こうなったら研究所での実験結果自体を疑うしかない。磁気フェライト処理がダメならダメで、とことんその原因を突き止めろ。可能性があるならとことん追究するんだ。幸い、オゾン処理のほうは効果が出ている。採算面で実機にはなり得ないが、本共同研究においてはオゾン処理と無処理系との比較試験をしたという形に収め、下水道公社と交渉してみる余地はある。不本意だがこの状況では最悪の事態を考えざるを得ない」

門田が試験装置をひとあたり見ている間に、真木は研究所にあるベンチ試験機発送の手当てをし、額の汗を拭いた。

「君の耳にも入っているだろう。水処理でもその効果に懐疑的な見方をされている磁気処理が汚泥処理に使えるとしたら画期的だ。しかし、そんなはずはないという見立ての人間が社内外問わず五万といる。こんな結果が万が一にも漏れたら、あっという間にこの実験は打ち切りになる。実験結果を捻じ曲げている訳ではないんだ。何とか数箇月前の成功要因をもう一度見出すんだ」

焦る真木を現地に残して、門田は本社に戻った。数日後、研究所からベンチスケール試験機が到着し、その立ち上げを開始した。果たして結果は無処理系と磁気フェライト処理系との間で有意な差は見られなかった。真木は、まさかとは考えつつ、同社のフェライト化研究グループから送られている飛灰からのフェライト化物ではなく、市販フェライトを取り寄せて試験してみた。その結果、磁気フェライト処理の効果が久しぶりに確認された。この予感実は薄々あった。廃材フェライトの磁性を真木のほうでも確認していたが、やはりは廃材由来ということもあってか送られてくるフェライト化物が完全に磁性を帯びているという訳ではないようだった。磁性

の強弱もあれば、まったく磁性を示さないものも多い。しかし、磁気-フェライト処理技術がオゾン処理に対して優位性を持つにはフェライトの調達コストを圧倒的に抑える必要がある。そのためには廃材フェライトを用いるしか、この研究の出口はない。意を決して真木は西山に電話をした。

「そうか、原因はフェライトか。確かにあれは研究途上だからな。原料となる飛灰や廃水の性状が一定でない以上、フェライト化物の磁性にバラつきがある程度あっても仕方がない。その変動を磁気処理で吸収することができないという訳だな」

「はい、そもそも磁性の乏しいフェライト化物を磁石でモーションさせようとしても汚泥の粒子を可溶化するほどのエネルギーを持たせることは難しいです。市販フェライトでは十分な可溶化効果が得られているので、ネックになっているのは明らかにフェライト化物の品質です」

「磁石はどの程度の磁力のものを使っているんだ？」

「0.5テスラのネオジム磁石です」

「廃材フェライトの磁性が弱いというのなら、より磁気の強い磁石を使う可能性は考えられないのか。磁石の初期投資がある程度上がっても、フェライト調達のランニングコストが増すよりはマシだ。その点は検証したのか？」

真木は思わず絶句した。原因がフェライトにあると決めつけていた真木は磁石の性能向上のほうに目が向いていなかった。

「いえ。磁石については特段パラメータを変えることはしていません」

「そこが安直なんだ。磁石の磁気は実験室で掴んだ経験則だけなんだろう。はっきりした数式で決まらないものなのだから、試験パラメータを現場で掴むしかない。磁石の磁気強度を変化させて、それでも安定的な効果が得られないというのならもう一度連絡してこい。開発者だろ、お前。諦めが早すぎるぞ」

真木は西山の電話口での剣幕に圧倒されながらも、自らの不甲斐なさに肩を落とした。

——フェライトが不安定な分、磁石でカバーか。確かに、磁石は市販品、フェライトは廃材由来。考えれば誰でも気付くことだ……

真木は研究所から送られてきたフェライト化物の袋に磁石を突っ込んでみた。磁石に張り付い

てくる粒子はごく一部だ。研究所でのベンチスケール実験の際はフェライト化物の量は知れていた。磁石にもほとんどのフェライト化粒子が張り付いてきた記憶がある。今回のパイロット試験ではフェライトの量がざっと100倍は必要になる。専用の窯を持たないフェライト化研究グループが電子炉で毎日少量製作して積み上げてきた量だ。フェライト化研究グループを疑う気持ちはないが、フェライト化物の品質がベンチスケール実験当初から格段に落ちていることは疑いの余地がない。数日後、より磁界強度の高い磁石が真木の手元に届いたが、磁石に付着するフェライト化物の量がそれほど増えた印象はない。

——やっぱり、これはそもそも無理なんじゃないのか……？

気を緩めると、フェライト化物に疑いの目を向けてしまう。それではダメだと、磁気フェライト槽の磁石をより強磁性の磁石に置き換え、実験を再開してみたが結果はほぼ同じだった。この頃から徐々に真木の顔から生気が失われていった。

「真木さん、元気ですか？　おーい！」

プレハブの二階のパイプ椅子で疲れて仮眠している真木の耳元でバイトの植田が声をかける。

「そんな寝方してたら腰痛めますよ。それよか、今日もつ鍋食いに行きませんか？　俺うまい店知ってますから。なんなら知り合いの女の子に声掛けときますよ」

「いやあ、会社に顔向けできない結果ばかりで、実験費から出張費まで浪費しまくってるから遊んでいる訳には……」

「真木さんらしいなあ。そんなんじゃ精神病んじゃないですよ。別に真木さんが悪い訳でもないし、給料が変わる訳でもなんでもないんだし。俺、真木さんのこと見てますから。結局あれが悪いんでしょ、フェライト」

植田が袋に密閉して湿気を含まないようにプレハブ内に保管しているフェライトを指差して言った。

「植田くん、どうしてそれを！？」

「ボクみたいな馬鹿にも見てりゃ分かりますよ。だってあれ磁石に引っ付かないじゃないですか。あんなのフェライト槽に入れて磁気かけても攪拌機でただかき混ぜてるだけでしょ。小学生でも分かりますよ」

西山や門田に聞かせてやりたかった。現場に居さえすれば誰にでも分かることなのだ。誰の努

力が足りない訳でもないのだ。結論は詰まる所フェライトの製品品質なのだ。市販フェライトで試したとおり、磁気ーフェライト処理による消化促進効果には疑いの余地はない。ただし、今の廃材フェライトは使えない。しかし、市販フェライトではコスト的に見合わない。フェライトの純度を高めるしかこの技術を科学的にも経済的にも成り立たせる術はないのだ。

「植田くん、ごめん。やっぱりもつ鍋は今度にして。試験装置全部止めるから手伝って」

「どうしたんすか、急に。ボクの知り合いの女の子じゃアテにならないっすか？」

「いや、今日の最終便で一旦東京に帰ることにしたんだ」

「まさか会社に喧嘩吹っ掛けに行くとか？」

「まあそんなところ」

「いいじゃないっすか、その意気！ でもまた絶対に博多に帰ってきてくださいね！」

真木は植田とともに、機械を全停止して、試験を一旦休止した。門田に「試験を一旦停止し、明日相談させてほしい」と電話で伝え、那珂川下水処理場の業務主任にしばらく外す旨の挨拶と報告をして、ホテルをチェックアウトし、福岡空港に向かった。

「これが現地に送られてきたフェライトです。これは市販のかなり強磁性の磁石です。研究所でのベンチスケール試験ではこんな磁石を使わなくてもハリネズミの針毛が逆立つかのようにフェライトがピンと張り付いてきました。が、今はこうです」

真木はフェライトが薄く張り付いた強磁性の磁石を取り出した。

「これでは余剰汚泥を物理的に衝突・破碎するようなフェライトのモーションが生まれません。この数箇月間、可溶化効果が僅かしか得られなかったのはここに原因があるとしたか考えられません」

新人の真木に詰め寄られて、フェライト化研究グループの梅田リーダーは顔をしかめた。

「と、ウチの真木はこう申すのですが、梅田さんの見解はいかがですか？」

戦闘モードの真木を制するように、門田が物腰穏やかに梅田に問いかける。梅田は視線を逸らしながら、「ベンチスケール試験のときは『フェライトがほしい』とおっしゃったじゃないですか。だから、確実に磁性を確認できるものをお渡ししたまでです」

「じゃあ、今回は！？」

真木が声を荒げて尋ねる。

「このパイロットテストを通過したら実機になる可能性がある訳でしょう。そうなるとフェライト化物の歩留まりも考えて行かねばならない。単なる原理的解明であればパイロットスケールまで拡大しなくてもパイロットスケールのテストで十分でしょう。今回は商業ベースを見込んだ上での歩留まりも考慮した上で、焼却飛灰からのフェライト化物を提供したまでです」

「じゃあ、フェライト化されていない粒子が混じっていても当然という訳ですか！？」

「そうです、もちろん現段階でフェライト化率が最も高い条件で焼成したフェライト化物を提供しています。しかし、現時点でそれ以上のものは考えられません。でもまさか、そこから磁石に引っつくものだけを選択的に集めて送る訳にもいかないでしょう。それじゃあ商品にはならないですからね。最高レベルのフェライト化処理とそちらの磁性処理の組み合わせで効果が得られるかどうかポイントでしょう。それを知った上でのパイロット試験ではなかったのでは？」

「それが分かっていたら、ベンチスケール試験でも同条件で実験していたのに……」

真木が唇を噛みながら言葉を詰まらせる。そんな真木の表情を見ながら門田が梅田に問い質す。

「では、当社の技術ではこれ以上のフェライト化物は調整できないとそういう訳ですね」

「いや、ですからここから実験に耐えうる磁性物だけを選び分ければいいでしょう。絶対量が不足する分にはこちらが処理量上げる必要がありますけどね。それでコスト的にペイするかどうか。もちろんフェライト化率の向上に関しては日夜研究を重ねています。ただ原料が飛灰や廃水ですからね。保証値というのは出せないのが実態です」

門田が真木のほうを向いて尋ねた。

「今送ってきてもらっているサンプルのうち、磁性物と言えるフェライト化物はどの程度の割合だ？」

「ざっと1割未満ですね、感覚的にですが……」

「そうするとフェライト化パートで10倍スケールですか。下水汚泥処理はフェライト化物の有望な利用先ではありますが、フェライト化のコストと見合うかどうか何ともいえませんね」

門田がホワイトボードにマジックでフロー図を描きながら説明した。

「要は、今はここに磁選プロセスがない状態で実験してきた訳ですね。ベンチスケール試験では梅田さん達に磁選していただいていたと。磁選抜きでは効果が上がらない以上はフェライト化処理量を増やして、磁選プロセスを加えるしかないですね。梅田さん、お願いできますか？」

梅田はしばし黙考した後、「何とかしましょう。ただ市販のフェライトでも試されたそうですから、それと相応の結果が出るだけだと思いますよ。それよりもコストが気になりますね。先ほどの真木くんの見立てが当たっていればフェライト化工程で10倍のコストアップです。プロセス全体として採算が取れますかね」とやや懐疑的な表情で回答した。

「うーん、確かに。廃材利用ということで、コスト試算の中ではフェライト化物の調達費用を抑えていますからね。ここが上がるようだと消化促進効果はともかく、コスト的に成立するかどうかポイントになってきます」

「場合によっては市販フェライトを購入したほうが安くつくかもしれませんよ。あちらは純度の

高い原料から大規模に生産していますから。品質も安定していますし。そもそも廃材利用という前提で多少品質が悪くてもOKというスタンスでいてもらわないと我々としては困る訳です」

「おっしゃる通りです。とにかくにも、当社の技術で一旦成功の結果を得ましょう。その上で、事業戦略会議の前に、今回の反省点も踏まえた担当者打合せをしましょう。真木くん、という訳でもう1回いくぞ！」

「はい」

真木は何とも合点の行かない表情で頷いた。今回の結末は担当者レベルではそれぞれに分かっていたはずだ。なぜ、こういう結果を招くまでコミュニケーションをうまく図れなかったのか、そもそも自分に落ち度があったのか釈然としない思いが心の中を占めていた。

その夜、真木は西山、門田に連れられて築地にある寿司屋に出向いた。

「入社一年目からの長期出張だ。久々の東京の夜をまあ楽しめ」

西山はそう言って真木を労った。真木は「はい」と一言答えたが、威勢のいい言葉は何ひとつ出てこなかった。

「なんか、うまく行かないんですよね。研究所で門田さんと万全に準備してこの結果じゃ誰にも顔向けできません」

「まあ、技術開発なんてそういうもんだよ。そう何でもかんでもうまく行くわけじゃない。どこに落とし穴があるか、すべてを予見できる人間なんてこの世の中にはいない」

門田がすかさずフォローを入れる。

「とはいえ、ここでこけたら宮津さんに何言われるかわかったもんじゃないな」

「あー、アレですか。『泥はなくなるらないんだよ』」

そう言って西山と門田は顔を見合わせて笑った。

「なんですか、それ？」

「いや、専務取締役CTOの宮津さんの口癖だよ。汚泥が減らないから、当社の主力製品の焼却炉や溶融炉、乾燥機が未来永劫売れ続ける、という理屈だ。私はちょっと違うと思っているがね」

「今回の磁気フェライト処理だってコスト面に目を瞑れば泥の可溶化は現時点でも可能です。そうすれば有機分がメタン発酵槽で消化ガスに変換する割合も増え、消化汚泥の量は減少するはず。そうすれば、いわゆる焼却、溶融といったエネルギー消費型の処理プラントへの依存度は低下させられるはず」

「真木くん、君の言うことはもっともだが、社内での発言には気を付けるように。仮にもフェライト化の歩留まり、コストというネックを抱えた状況だ。我々の足元をすくおうとすればいとも簡単にこんな研究はストップをかけられる。今が耐え時だ。残された時間はそう長くない。まだ経営陣がこの技術開発を続けさせてくれている間に何らかの活路を見出そう」

そう言うと、西山は門田と真木のお猪口に酌をした。

「本音を言えば、私が最前線に飛び出て陣頭指揮を執りたいところだが、なかなかそうも行かない。ここは門田くん、真木くん何とかしてもらわないと！」

それから1箇月をかけて、実験に必要なフェライト100kgの調整が完了した。那珂川下水処理場への発送とともに真木も福岡に飛び、試験を再開した。磁気ーフェライト処理系では言うまでもなく順調に無処理の1.6倍の消化促進効果が確認され、オゾン処理の1.3倍を上回る結果を残した。

本社での事業戦略会議前のミーティングで、門田・真木と梅田が率いるフェライト化研究グループが研究所の会議室で顔を揃えた。

まず、真木が那珂川下水処理場での再試験の結果を報告した。一同の反響は「おー！」というものであった。次に、梅田グループの市野から、フェライト化処理に係る技術的・コスト的制約が報告された。まず、技術的には確実に磁性を有するフェライト化物の歩留まりは12%といったところだった。微弱な磁性を有するフェライト化物まで含めると25~30%だが、それでは可溶化処理の効果が限定的になってしまう。という訳で、コスト的に見た場合、単純計算で9倍の手間もしくは規模が必要となり、その後に磁選プロセス、粒度調整プロセスを組み込むことになる。これを試算すると、市販フェライトの価格とほぼ変わらなくなる可能性があるというのが梅田グループの結論だった。

「残念だが……」

梅田は肩を落として言葉を絞り出した。

「同じ下水処理場内からの飛灰や廃液からフェライトを調整できればもう少し何かやりようがあったかもしれないが、廃棄物処理場の飛灰や工場排水を原料とすることを考えると、フェライト化処理により磁性を帯びなかった粒子の廃棄・再利用等を併せて考えると更なる課題が立ちはだかる。本当に残念だが、何らかの技術的ブレークスルーがなければまだ世に出すことはできないだろう。悔しいが、今は特許、論文でのガードをしっかりと自己研鑽しながら、他社がアイデアを持ち寄る可能性などを並行して待つしかないだろう」

翌日の朝、西山は社長はじめ部長級以上の居並ぶ中で半期に1回行われる事業戦略会議に臨んでいた。上期の総括ということで、各部から主な活動の成果を報告し、期初に設定したKPIの達成状況をその場で判定する。

西山が担当する全社開発がトップバッターとして報告の順を迎えた。

「皆さん、それではお手元の資料をご覧ください。まず、超高効率遠心脱水機の開発ですが要素技術の検証は順調に進んでおり、下期から実機ベースの試験に入ります。これは予定通りです。

ただし、アクア社が当社とはまったく異なる機構の脱水機を開発中という情報が先日飛び込んできました。我々の遠心脱水機とは異なり、低速で圧搾するためそもそもの動力が低い機器だという話です」

「当社でもスクリュープレス型の脱水機は以前に開発し、商品化もしている。しかし、処理量の制約から遠心脱水機とは棲み分けができるという整理ではなかったのか」

「私もその認識でした。その固定概念をどうやらアクア社が打ち破った模様です。省スペース設計でありながら、従来とは比較にならない程過面積を持つ脱水機を提案しています。アクア社はもともと農業集落排水などの脱水を手掛けてきたメーカーです。我々が下水処理の分野で培ってきたものとは異なる知見を持っている可能性もあります」

「西山くん、どうするんだ。遠心脱水機で勝算はあるのか？ 我が社のメンツにも関わるが、場合によってはアクア社にOEM製造をしてもらい、販売を当社が担うという覚悟も必要なのか？」

「詳細はまだ分かりません。ただ、時間的猶予は若干あります。下期からは超高効率遠心脱水機の開発と新型低速脱水機の開発の2本立てとしたいと思います」

「君の部の脱水部隊も今は超高効率遠心脱水機の開発に総出だろう。同時並行するほどの体力はあるのか？」

「そこで、次の報告になります。磁気—フェライト処理による消化促進の件です」

「福岡県下水道公社との共同研究の件だな。成果は、うん？ 何だこれは！」

「そこに書した通りです。原理的な究明、効果の検証は完了しました。ただし、当初期待した廃材からの回収フェライトが歩留まり、コスト面から採用に至りません」

「では、どうするというんだ？」

「ただいまフェライト研究グループが総力を挙げてフェライト化効率の向上試験を行っております。試算では一定の純度のフェライトが50%回収できなければコスト的にペイしませんが、現状で15~20%です。この進展を待つて、磁気—フェライト処理による消化促進の再開を決断するとし、現時点では研究を凍結したいと思います」

「本研究に前期から1年半、費用にしてざっと1億円以上を投資しているんだ。それに対してどの程度の成果が得られているんだ？」

「現時点では特許等の知財、論文発表によるステータスアップです。あと、当社2年目の真木も本研究を通じてかなり成長しました」

「共同研究先の下水道公社はどう言っているんだ」

「消化促進が無理なら、発酵槽の増設は凍結し、焼却炉の増設に舵を切るかと」

「ほら、いつも言っているだろう。要は『泥は減らない』んだよ。最初から、焼却、溶融の線でPRしていれば無駄な研究投資をしなくても済んだはずだ。増設する焼却炉は当社有利に進んでいるのか？」

「焼却、溶融ともに3号機となりますが、1, 2号機は当社製ですのでもちろん有利です。ただ、……」

「ただ、どうした」

「三友重工が油温減圧装置という乾燥機をPRしています。簡単に申すと天ぷらの要領で下水汚泥を油で揚げて乾燥させる方式です。下水処理場への導入事例はないので実績は未知ですが、下水道公社の専務理事は新しい物好きですので、下手をするとそちらに傾きかねません。もっとも、当社の磁気フェライト処理による消化促進に関心を示してくださったのも新しい物好きの専務理事ならではののですが……」

「能書きはどうでもいい。こうなったら消化促進だのフェライトだのは抜きにして、焼却、溶融炉の増設に向けた営業活動に本腰を入れろ。これを失注したら、そのときは田畑分かってるな！」

突然自分に矛先が向き、営業統括の田畑は目を白黒させている。

「で、脱水機の開発体制はどうするんだ？」

「はい、消化促進の実験がひと段落つきますので、現場から引き上げ次第、入社2年目の真木を新型脱水機の開発担当に据えます。開発従事メンバーは双方情報共有できるように、うまく両方のプロジェクトにアサインします」

「ちょっと待て」

宮津専務が会話の応酬を止め、しばし思案した。

「入社5年目の浦川はどうしている？」

「今は上水汚泥の新型脱水機の開発に従事しています」

「このページの最下欄にあるやつだな。開発経過良好、下期早々に完成見込みとあるじゃないか」

「はい、もともと今回の上水汚泥の脱水は圧搾工程に熱をかけて脱水時間の短縮と含水率の低下を目指すものなので、初期機構さえ定まればスケールアップはそう難しくはありません」

「だったらだ、浦川を下水の新型脱水機の開発に当てるべきだ。そう思わんかね。彼は元々下水畑だろう。育成ローテーションは分かるが今は一刻を争うときだ。是非そうしたまえ」

「しかし、せっかく経験を積んだ真木は……」

「彼は脱水については耳学問で知っている程度だろう。浦川か落合の下に付けて実地で覚えさせるんだな。幸い実験のイロハくらいは今回の消化促進で経験済みだろう。散々会社経費で泥遊びしたんだから、少しは当社の社益に貢献させたまえ」

「しかし、それでは彼の成長機会が……」

「東洋テクノロジーは真木のためにある訳ではない。真木は東洋テクノロジーのためにある。そして、西山、お前もだ。分かったか」

気付けば、真木が入社して1年半の歳月が流れていた。順風満帆に見えた社会人生活の幕開けだったが、最後の半年は早々に社会の洗礼を受ける羽目に陥ってしまった。

真木は福岡の地でプレハブ撤収後の更地を眺めながら物思いに耽っていた。

「真木さん！」

脱水機のメンテナンスに入っていた植田が声を掛けてきた。

「終わりましたね」

「ああ」

「ここに建てたかったですね、磁気—フェライト処理装置」

「そうだね」

「設置されたら、ボクがメンテするって張り切ってたのになあ……」

「植田くんには最初から最後まで本当に世話になったね。こういう結果になって申し訳ない」

「別に真木さんが悪い訳でもなんでもないし、いつか、数年後、数十年後にリベンジしてくださいよ。ボク待ってますから」

「ありがとう、必ず！」

下水処理場のど真ん中の更地で二人の青年が強く握手した。真木はこの約束をいつかきっと守らねば、と心に強く誓った。

「『泥遊び』は終わったか。高い授業料だったな」

西山の酌を受けながら、「はい」と真木はすっきりした声で答えた。

「今回の一件は苦い思い出だが、これで、実験のイロハは身に付いただろう。次のテーマはよろしく頼むぞ」

「もちろんです。今度こそ、目先に捕らわれず、研究成果をどう社会に実装していくか、幅広い目線で考えます。いいクスリになりました」

「それで当面だが、新しい研究テーマが出てくるまで、下水汚泥の脱水機の開発を支援してほしい」

「脱水ですか」

約1年間、福岡の下水処理場に張り付いた経験から、下水処理のイロハはどの工程についても習熟したつもりでいたが、こと開発となると、細かい部分はどのようにしてよいかやはり分からない。

「下期から、2種類の脱水機の開発がスタートする。そのうち先行している超遠心脱水機の開発サポートをお願いしたい。担当は入社1年目の落合だ。上期で要素技術の検証試験は完了済みだ。二人で力を合わせて何とか商品化に結び付けてほしい」

1年目社員の下につくことに抵抗がない訳でもなかった。しかし、脱水に関してはこと素人だ。ここは年次にこだわりなく素直に技術を学ぶ姿勢を貫いたほうが得策なのだろう。

「わかりました。当面は脱水に全力を尽します。フェライト化研究グループの尻叩きもよろしくお願いします」

「もちろんだ。フェライト処理の効率向上が進めば消化促進試験を是非再開しよう。そのときが私達の逆襲のときだ」

「打倒宮津さんですね」

「時間の問題だよ。まあ長い社会人生活、焦らないことだ」

「真木さん、これが実験計画書です。諸々の手配は真木さんが手馴れているとお聞きしていますので、よろしくお願ひしますね」

入社2年目の落合から半ば命令口調で数枚のレジユメを渡され、ムツとする気持ちを心の中で噛み殺しながら「OK！ 任せてくれ」と真木はいい先輩面をした。真木は落合から渡された実験計画書をつぶさに眺めると、その完成度に驚かされるばかりだった。

——これが入社半年の新米がつくる書類かよ……

研究所の実験グループに段取りをつけてくると言い放ってその場を離れ、入社1年目からお世話になっているグループ長の日野に落合の評判を聞くとやはり「相当の切れ者」ということで通っているようだった。長期出張のため会社を留守にしがちで本社や研究所の事情や先輩、同期、後輩の情報に随分と疎くなってしまった。

「上期で要素技術の検証を終えたと聞きましたが……」

「ああ、彼は勉強熱心でね。6月頭の配属以来、わずか3箇月余りですべて終えちまったよ。何より彼の動きには無駄がないのが素晴らしい。あれは誰にも真似できない。分からないことは分かる人に聞く、任せる、頼む、やらせる、巻き込む。目的達成のためには手段を選ばない。ああいう奴が世の中をリードしていくんだらうな、ちょっと悔しいけど、まあ正真正銘の実力者だよ」

「とりあえず、車載の脱水機を来週頭には動かす計画らしいので、負荷試験を今週中に予定しておいてください。もちろん私達も立ち会います。あと来週の実験に使う汚泥とポリマーは手配済みです。到着次第、荷受けをお願いします」

「その辺は任せてくれ。真木くんくらいの余裕があると、こっちも気が楽なんだけどな。そのうち、あれやこれや彼が直々に言ってくると思う。とりあえず、その実験計画書をコピーしてデスクに置いておいて」

「はい、よろしくお願ひします」

実験グループで雑談を交えた来週の実験の段取りを終え、実験室に戻ると落合が難しい顔をして凶面と睨めっこしていた。

「どうしたんだい、そんな怖い顔して」

「いえ、機器設計部の岩佐部長のところは今相談してきたんですが、肝心要の回生動力を回収する機構を組み込むスペースを創り出すのが難しいと仰るんで」

今回の超高効率遠心分離器の売りは、分離機の後段にスキマーという分離水の回収部品を組み込むことで高速回転する水と静止しようとする機器の間の抵抗を生み出し、それを動力に変えることで既存の遠心分離器と同等の脱水性能を誇りながら正味の消費エネルギーを下げるところにある。その機構が正常に作動することはスキマー単体の試験で確認されている。問題はそのパーツをどう実機に組み込むかに焦点が移っている。

「まあ、まだ下期も始まったばかりだし、そんなに焦らなくていいんじゃないか」

「真木さんはそうおっしゃいますけど、下期に完成させればいいというのはあくまで当社都合です。この技術を待っているお客さんはすぐにでも完成してほしいでしょうし、どこにどんなライバルメーカーがいるかも分かりません。それに真木さん、ご存じかどうか知りませんが浦川さんの低動力型脱水機、中規模型という棲み分けで社内には説明されていますが、実際は我々の低動力遠心脱水機とガチンコ勝負みたいですよ」

そう言って、落合は一枚の紙を真木に差し出した。

「これがアクア社独自開発の低動力型脱水機です。この円筒形の筒になった部分にリング状の部材が幾重にも装着されているそうです。言ってみれば人間の腸のような感じで蠕動^{ぜんどう}運動を繰り返しながら汚泥を圧搾していくらしいです。既に全国各地の下水処理場に持ち込み試験を開始したという情報もあります。で、ポイントはこの処理量です。最大処理量が40kg-DS/hrとあります。これは我々の超遠心分離器の小型サイズと同等の処理規模です」

「ということはこのアクア社の製品の性能が間違いなければ……」

「我々の製品の動力を低下し、かつ価格差を埋める能力を發揮しない限りシェアの3分の1程度をアクア社のこの新型脱水機に奪われる可能性があります」

「だから、この同時期に敢えて2種類の脱水機の開発を……」

「そうなんです、ゆっくりしている時間は我々にはないんです」

落合の剣幕に押され、真木はグウの音も出なかった。それにしても入社わずか半年で人はこんなにも育つものだろうか。この1年半の間、たっぷり時間をかけて堂々巡りしながら結局商品化に

漕ぎ着けることができなかつた自分を真木は恥じた。

——詰まる所、俺が甘かつたのだろうか……

「真木さん、ちょっと付き合ってくださいませんか？」

真木は落合に連れられて、研究所本館から離れた第一実験棟に出向いた。中には、福岡から戻した磁気フェライト処理槽やその関連備品をはじめ、様々な実験備品が整然と置かれている。その一角に回転体と思しき物体が吊り下げられ、その下部にバットが据えられている。

「あれです、上期の成果」

「スキマーの実験装置のことかい？」

落合は無言で頷くと操作盤のほうに歩み寄った。

「回してみましようか」

「あ、ああ」

「真木さんのキャッチアップと私のレベルアップのためです」

そう言うと落合は操作盤の赤いボタンを親指で押し、ボタンが点灯するとともに回転体が駆動し始めた。

「真木さん、そのガンで回転速度測ってみてください」

背後の棚に黒色のピストルのようなものが置かれている。このことか。

「そう、それを持ってきてください」

真木は落合に言われるままにそのピストル状のものを手に取って渡した。

「このボタンを押すとガンの先にある物体に赤い光が灯るはずですよ。その回転速度がそこに表示されます。やってみてください」

真木はその回転体にガンを向け、ボタンを押し込んだ。回転体の真木の胸元の高さくらいのところに赤い点が灯った。

「そう、その感じ。今、何rpmですか？」

「どんどん上がってる。1,000を超えて、1,100、1,200、……」

「2,000になったら教えてください。正常ならそこで止まるはずです」

落合は脇に置いてあるハシゴ付きのタンクに昇って中を確認している。

「何してるんだい？」

「水を張っておいたんです。念のため空でないことを確認しました。今からあのタンク内の水をこの回転体に投入します。投入された水は遠心力で回転体の壁面に張り付くように排出されます。これが従来の遠心分離器の分離水の排出方法です。これを排出前にスキマーで回収して回転体の中央を貫通している管から排出することで分離水のエネルギーを最小化します。」

「要は分離水の排出部位が中心に近ければ近いだけ失うエネルギーが小さくなるという訳だね」

「そうです。ただ、難しいのは如何に排水をスキミングするかなんです。高速回転している水はそう簡単にスキマーの穴に入ってきません。今は円盤状のスキマーに放射状に穴を空けているだけです。上期までの実験では分離水の回収率はよくて60%程度です。これを80%まで高めたいと思っています」

「更なる低動力化をということ？」

「もちろん。既に機器設計部の岩佐部長に新型スキマーの設計を依頼しています。スキマーの穴の空け方を細工するんです。どういう穴を空ければどの程度回収できるかのシミュレーションプログラムを機器設計部と私で作成しました。これは本社にもまだ報告していません」

「すごいじゃないか。どうして報告しないんだ？」

「余計な口出しする人が増えるだけですからね。結果だけ報告すればよい人とプロセスも併せて報告すべき人とは違うんです」

「あ、2,000rpm！」

「おし、じゃあ行きますか！」

落合は操作盤の「ポンプ1」と書かれたステッカーの張られたスイッチをONにした。ポンプが唸りをあげて中のモーターが駆動し始める。そして回転体に水が送り込まれる。

「真木さん、その窓から中を覗いてみていいですよ。水しぶきでほとんど見えないはずですが」

そう言われて真木がアクリル製の窓から内部を覗き込むと、物凄い勢いで回転体の後部から水が飛び散っている。

「やっぱりダメだな」

「ここから水が出るとダメだと言うんだね」

「そうです。理想的には中央部の水管から排出されてあのバットに水が溜まるんです。ちょっと止めますね」

そう言って、落合はまずポンプの停止ボタンを押し水の供給が止まると回転体も停止させた。

「バットの内壁に水量の目安線を書いています。そっちは何リットルですか？ こっちは500です」

金属製バットの中に目盛りが振られている。水面が揺ら揺らしているが概ね500リットルで合っているだろう。

「500リットルだね」

「500ですか。50%回収ですね。ダメだ……」

落合が肩を落としながら回転体を右手で触り思案している。

「全然改善の余地ありませんよ。西山さんは『短期間にしては上出来』と仰いますけど、担当としては全然物足りないです。何とかしなきゃ」

第一実験棟の照明を落とし、研究所本館へ向かう。落合の足取りは先ほどまでよりも迷いがあるようにも見える。見えない解決策の探求に苦しむ落合を救うためにも何がしか力にならなければならないと真木も考えるようになってきた。もはや先輩、後輩でもなんでもなく、ただ同じ目標に向かって走るエンジニア同士という関係になっていた。

処理量 $2.5\text{m}^3/\text{hr}$ の車載型遠心脱水機がハイトーンの唸り声を上げる。真木は勝鬨下水処理場の汚泥貯留槽から採泥してきた特殊ローリー車の助手席から降り、車載機の近くにいる落合に「泥到着したぜ」と報告した。

「あ、真木さん、お疲れです。ちょうどよかった」

そう言って落合は車載機のステップに上がってくるよう真木に指示した。

「今日の目的は何でしたっけ？」

「排泥バルブの動作確認だろ」

「御名答。じゃあ、排泥バルブについて実機を用いて説明してください」

「え、それはその……」

今回の超高効率型遠心脱水機のセールスポイントはスキマーによる分離水の動力回収の他に、排泥バルブを用いた汚泥の脱水性能向上がある。図面では一応見て分かった気になっていたが、いざ実機を前にするとどの部分が排泥バルブなのかよく分からない。

「見てもよくわかんないですよ。あそこの先端部分。あれが従来機にもある排泥部です。あの位置に二重焼きのような円形の押し板を排出汚泥の圧力を一定に保つように動作させる排泥バルブを組み込んでいます。これは外からじゃ分かりません。ただ、これは試験機なので分かりやすいようにゲージを切ってもらいました。ほらこの部分。これでバルブの動作状況がある程度見えるようになっています。今は無負荷で回してますから、ほらバルブが一番端にあります。汚泥が詰まってくると徐々にバルブが押し込むように動いてきます」

「で、バルブの圧力の制御方法は？」

「排泥部の汚泥が押し板を逆に押し返す圧力を計測します。含水率78%の脱水汚泥をコンスタントに排出させる設定を目指しています。要は汚泥の排出口を狭めて調整しているようなものです。15~20mmくらいの隙間があると概ね含水率80%を切る脱水汚泥が得られます」

「感覚的には駆動部が多い分、チェックポイントも多いし、故障、劣化部位や消耗品も増えそうな気がするけどその辺はどうなの？」

「真木さん、鋭いですね。そうなんですよ、汚泥の性状が安定しているときはむしろ排泥バルブなんかないほうがいいんです。ただ、難脱水汚泥だと高分子凝集剤の選定も難しくなってきますし、場合によっては2種類の凝集剤を使うような場合、ランニングコストもばかになりません」

「という、ある程度凝集状態が悪くてもこの排泥バルブで何とか脱水しちゃうってということ？」

「可能性はあると思います。凝集剤不要というのはありえませんが、ただ作業者の熟練度がある程度低くても機械的にうまく脱水させることができる可能性があります。問題は真木さんも指摘したようにハードトラブルですね。そこはウチの機器設計部を信じるしかありません……」

派遣社員の二人が実験準備が整った旨を落合に報告した。「おし、じゃあやるか！」

落合は電話を取り出し、機器設計部の岩佐部長に電話した。研究所本館の対面にある事務所棟から大西課長と出口主任が姿を現した。

「何回目になるかね？」

「えーと、二桁回数に乗ったくらいですかね」

大西と落合がにこやかに談笑する。

「大西さん、出口さん、こちら先輩の真木さん。脱水の実験は初めてなので、よろしく願います」

「真木くんってあれだろ、磁気—フェライト処理の実験やってた。今は脱水班になったんだ。随分ガラッとテーマを変えるねえ、ウチの上層部も」

「はい、落合先生から毎日指導を受けています」

「まあ、じきに覚えるよ。原理自体はそんなに難しくないんだから。ただ機械はなかなか思ったように動いてくれないんだけどね」

「それを言うなら、せめて汚泥のほうが思ったように動いてくれないにしてくださいよ。機械のほうはしっかり動かしてもらわないと！」

すかさず落合が大西に突っ込みを入れる。

「いや毎回この調子。厳しいのよ、落合先生は。『下請け』の機器設計部は辛いなのなの」

大西が笑いながらバルブの動作確認に取りかかった。「異常なし」の合図が出て、実験がスタートした。

汚泥供給タンクからポンプを通じて遠心脱水機に汚泥が供給される。ものの数秒も経たないうちに機械の後方部から透明の分離水が排出される。

「分離水のほうはいいですね。後は脱水汚泥のほうが安定的に排出されるかどうか」

落合はそう言うとバルブの覗き窓を眺めた。「真木さん、ほら今がチャンス！」

落合に促されて脱水機の前の方に近寄ると茶褐色の汚泥に押されてバルブが反発する様子が一瞬見えた。

「見えました？　すぐ真っ茶色になっちゃうんで、この窓は最初しか役に立たないんですよ」

「落合くん、バルブの圧が上がらないね」

「え、マジですか！？」

落合が慌ててタラップを降り、PCに映し出された圧力計の数値を確認しに行った。

「あー、これダメかもですね。止めますか？」

「いや、もうちょっと待ってみよう」

待つこと数分、ドロドロの汚泥が排泥部から少量出てきた。

「これ、凝集剤完璧？　たぶんフロックが緩すぎてバルブに圧が伝わってないんじゃないかな。お、おっと、バルブの圧は立ってきたけど、逆にこれじゃ圧が高すぎて排泥できないぞ」

「分離水が茶色になってきました！」

派遣社員の鈴木が大声で指摘した。出口が両手で『×印』をつくり、落合が慌てて操作盤で汚泥供給ポンプのスイッチをオフにした。

「おそらくボウルの部分に泥が詰まっちゃってるな。8回目のテストと同じような状況だ」

出口は試験装置全体を見渡しながらか、表情を硬くして言葉を捻り出した。

「含水率が高めの汚泥だとバルブが過剰に反応しやすいですね。圧密するために脱水汚泥の流路を塞いでしまう。その結果行き場がなくなって脱水機全体に汚泥が充満し、分離水側から汚泥が排出されてしまう」

落合は冷静に分析しながらも失意の色を隠せない。

「いっそのこと排泥バルブやめちゃう？」

大西が自嘲気味に呟いた。

「何言ってるんですか。今回の開発の2点しかないセールスポイントのうちのひとつですよ。開発当初よりも成功確率は確実に上がってますから、とにかく原因究明しましょう！」

落合は自分が一番凹んでいるはずなのに、気を取り直して機器設計部の二人を励ました。

「今日の実験レポートは私がまとめておきますので、明日にでも打合せをお願いします。清掃がてら、もうちょっと試してみます」

「悪いな、よろしく頼むよ。本社からの設計依頼が溜まってるので、いったん引き揚げてその対応に当たらせてもらうよ」

そう言うと大西と出口は事務所棟のほうに歩いて行った。二人の姿が見えなくなって、落合は真木に聞こえるか、聞こえないかというような声色で言った。

「あー、やんなっちゃうな」

「ん、何か言った？」

「いえいえ何でもありません。とりあえず、水を充填して脱水機の中を清掃しましょう。詰まった汚泥が出てこなくなったら一旦解体しなきゃダメなんです。実験は失敗後が一番大変なんですよ」

「落合も綱渡りなんだな」

「何がですか」

「いや、本社では万事うまく行っているような報告しか上がっていなかったからさ、こんなに苦戦しているとは思ってもみなかったよ」

「真木さんが来るまでは割と順調だったんですよ。たまたまここ数日の結果が悪いです。あ、もしかして真木さん貧乏神連れてきました？」

「いやマジでそうかもね。俺が来てからロクなことないもんね」

「そんなことはないですが……。これが順調に進んで現場試験に入ってから客先の前で無様な姿を見せるよりはよっぽどマシです。うまく行けば今月中にどこか協力的な下水処理場で現地試験したいという本社側の意向がありますから。ただ、今日の結果を見るに少し遅らせたほうがよさそうですね」

「なあ」

作業の手を止めず語り続ける落合に、真木は優しい眼差しを向け語りかけた。

「なんでそこまで頑張るんだ？」

「え？」

「いや、他の新入社員は結構悠々自適にやってるのに、どうしてそこまでストイックになれるのかなって、不意にね」

落合は手を止めて汚泥供給タンクに背を預ける真木の横に並び語り始めた。

「真木さんは西山さんの直系の後輩だそうですね」

「ああ、まあ20歳も離れてるんで先輩後輩というのもおこがましいけどね」

「あの人、西山さんがこの高効率遠心脱水機を開発して何年になるか知ってます？」

確か新人研修のときに当社の歴史を黒田社長が語った時に会社年表のような資料を配布され、その中に書いてあった記憶がある。確かあれは俺が中学生の頃、10年前くらいのはずだ。西山の

年齢でいえば30歳前後のことだろう。

「確か10年前くらいじゃないか。ロングヒット製品だよな」

「そう今から10年前、西山部長が35歳のときの開発品です。いくら官公庁相手の商売とはいえ10年同じものを作り続けているというのはどうなのでしょうね。民間相手なら考えられないですよ」

「確かに10年の歴史は長いけど、その中で細かな改善はなされているし、これを上回るものが出てきていないんだから仕方ない面もあるんじゃないか？」

「私の同期に津野ってヤツがいるんです。彼は民間企業を相手にプラント設計をやってるんですが、呑むたびに馬鹿にされますよ。『官需にあぐらをかいて税金で潤っていい身分だな。いつか逆転してやる！』って。正直ムカつきますけど、アイツが言ってることも一理ある訳で。『それなら西山さんが10年かけてやりとげた歴史を俺は1年で塗り替えてやる！』ってそう誓ったんです。津野にも宣言しています。もう逃げ場はなくなりました。やるしかないんです」

落合の独白を聞いて、真木は自分との意識レベルの差を痛感せずにはいられなかった。見様見真似で「うまくいくといいな」、「フェライト化研究グループが悪い」と自分のことを棚に上げてきた1年半が頭の中をよぎる。決して手を抜いてきた覚えはない。でも絶対にこれを世の中に出すという使命や熱意を落合ほどに持ったことはただの一度もなかった気がする。

「真木さん、続きやりましょう」

物思いに耽っていたところに声をかけられて、真木も作業に再び取りかかった。

「とりあえず清掃作業が終わったら機器設計部や実験グループも交えて作戦会議やりましょう。スケジュールも大幅に見直さなきゃいけないし、今回は本社に説明しないとマズイでしょうね」

入社一年目からプロジェクトリーダー然としている落合の姿を立派だな、と思いつつ、時間を見付けてフェライト化研究グループのほうにも足を運んでみようと思いつつ、真木も落合に合わせて黙々と作業を進めた。

「真木です。こんにちは。ご無沙汰しています」

「おー、すっかりご無沙汰だね。今は？ 遠心脱水機か。落合くんね、知ってるとも。研究所員で彼を知らない人はいないんじゃないか。仕事熱心だし、勉強家だし、知性も根性もあるしね。しかし、消化促進から脱水とは急な抜擢だな。キャッチアップするのも大変だろう」

梅田グループリーダーは真木の急な配置転換を慮って言った。

「ところで、例のフェライト化研究どんな塩梅です？」

「やはり気になるか？ 俺達の出遅れで真木くんには散々迷惑をかけたな」

「いえ迷惑だなんて。あのシステムは技術開発の組合せが最適化されてこそそのものですし、当時からそのマイルストーンを皆で共有すべきだったな、と落合くんの実験補佐をしながらも思うところがありまして」

「そうだよな、もっと摺合せが必要だったよな。当社の場合、本社の商品開発部と研究所ではどうしても若干の認識の相違がある。商品開発部は顧客の矢面に立たされるが、研究所はそういう場面が少ないせいか、割と鷹揚に構えている人間が多い。私も含めてだが……」

梅田は苦笑いをしながら自分達の否をあっさり認めめた。

「で、フェライト研究の現状だよな。現時点ではこういう状況だ。都市ゴミ焼却飛灰からの乾式プロセスの場合、依然歩留まり20~30%といったところ。産業廃水からの湿式プロセスであれば30~40%。消化促進に必要な最低ライン60%にはまだまだといったところだな」

「それに下水処理場で汚泥を大量処理する中での使用ですから安定的な供給を考えると、那珂川下水処理場に隣接している筑紫クリーンセンターの焼却飛灰を原料にするのが望ましいです。そうすると乾式プロセスの効率を上げなければ……」

「まあ、ちょっと実験室でも見学していくか？」

「はい」

実験室には所狭しと小型電気炉が10数台並び、それぞれに添加剤の調合比率や焼成時間を書い

たメモがテープで張られていた。4名の研究所員が忙しく、これから仕掛ける飛灰の調整や処理後のフェライト化飛灰の磁性チェックなどに追われている。

「思うのだが、君がやった実験ではフェライト粒子を懸濁させて槽の側面に磁石を設置したんだろう。そうじゃなくてさ、向流式にしてみてもどうだ。要は汚泥を槽下部から供給し、フェライト粒子は上部のN極から下部のS極に向かう形で衝突させる。ダメかな？」

「分かりません、やってみないと」

「お互いに知恵を出し合わないとな。こちらとしても歩留まり60%は厳しい。50%なり、少しでも下げられるアイデアがあれば、専門外のメタン発酵のほうにアドバイスもしたい」

そして梅田は唐突に真木に切り出した。

「もう一度やってみないか」

「え、何をですか？」

「磁気—フェライト処理だよ。君もあんな終わり方で納得が行ってる訳じゃないだろ。こうしてここに出向いた訳だし」

「いえ、今は超高効率遠心脱水機を造り上げたいんです、落合と。正念場なんです、あちらも。心から力になりたいと思ってます」

「欲のない奴だな。あの開発に成功しても手柄は落合のものだぞ。せつかく自分のテーマを与えられて手掛けてきたというのに。まあ、君らしい選択なのかな？」

「フェライト化研究頑張ってください。磁気—フェライト処理が完成したら、まさに梅田さんのお手柄ですよ。陰ながら応援を続けます」

「お前ってヤツは……」

梅田は「仕方ない奴だなあ……」という表情をしながら、「差し支えなければ打合せだけでも参加してくれよ。俺達としてもフェライトユーザーの商品開発部の声を聴かないことには前に進めない。よろしく頼むよ」と真木に依頼した。

梅田の熱意にほだされて、真木もフェライト化研究の援軍に廻りたいという思いがヒシヒシとこみ上げてきた。真木は元々環境化学系の出身であるし、フェライト化について知見を持つ社

外ネットワークもある。フェライト化さえ何とかなれば、もう一度消化促進を表舞台に立たせることができる。

「分かりました。こちらの実験やミーティングとかぶっていないときは、あちらを優先して構いませんよ」

落合は「フェライト化研究の援軍に回りたい」という真木の申し出を聞くと、一も二もなくOKの返事をした。

「ありがとう、大事な時期なのに。恩に着るよ」

「ボクだって環境エンジニアの端くれです。あの研究開発の意味合いくらい理解しています。ウチが焼却、溶融にどんなに力を入れたところで、業界最大手の新日本製鋼や三友重工には太刀打ちできません。しかし、当社の嫌気性消化は業界シェアの3割を保有しています。この部分を強化すれば、当社が優位にある、消化～濃縮～脱水工程に主戦場を移すことができます」

「ああ、門田さんに当初説明されたよ。消化促進は業界の構図を塗り替える可能性がある。だから、なかなか陽の当たらない研究ながらもコツコツと今まで続けてきたんだと」

「消化促進で嫌気性消化のシェアを上げれば、今ボク達が開発している脱水もこれまで以上に注目されることになります。正直言って、早いところ、そっちの開発を完了してほしいんですよ。こちらにも旨味のある話ですから」

「西山さんはそこまで睨んで、研究テーマを設定しているんだな。何とか期待に応えたいところだが……」

「くよくよしている暇はありません。ボクは機械屋なんでフェライト化の手伝いはできませんが、機器設計部の支援はできます。今から大西課長と膝づめで設計打合せしますよ。来ますよね」

「もちろん！」

結局、梅田に説得され、落合に相談した結果、真木は超高効率遠心脱水機の試験と並行して、研究所のフェライト化研究グループの作業を手伝うこととなった。本社の目の届かないところで、真木の新たな挑戦が始まっていた。

「まず、改良型スキマーのほうからいきましょうか」

「ああ」

大西は図面を取り出して指を差しながら、「俺達が模型で実験した結果だ。ここの水路をこの形にカーブさせれば分離水の回収効率は飛躍的に高まる」と言い切った。

「原理は解明できたんですか？」

落合の指摘に大西は押し黙った。

「『とりあえず、この形にすれば回収効率が上がりました』じゃあ、本社は通らないんじゃないですか。これでは特許出願も難しいし、誰もが『なるほど！』と納得するような理屈を納品前までに考えないと……」

傍で聞いていた真木はどうにも腑に落ちていなかった。回収効率を高めるためにスキマーの流路の形状を変えるとというのが、そんなに変化が出るものだろうか。希望的観測で実験して数回好結果が出たくらいで飛び付いたというのであれば愚の骨頂だろう。

「模型での実験、今やってみてくれませんか」

「お前、何言ってるんだ。実験には落合も立ち会って分離水の回収効率が高まることを確認済みだ」

「いや、皆さんはそうかもしれませんが、私はこの目で見ていないです。私が納得すれば他のエンジニア連中も納得するんじゃないですか？」

「わかったよ、やればいいんだろう、やれば。出口、実験の用意しろ」

出口は大西の指示を受け、実験の準備を始めた。

「確かに『百聞は一見に如かず』ですよ。この改良型スキマーの原理を一緒に見極めましょう！」

落合が真木の肩に右腕を回して言った。果たして実験が始まった。

「2,000rpmに達したな」

「こちらが従来型スキマーの模型がセットされている遠心分離装置ですね。そして、こちらが改良型スキマー」

「そう、あとは水を導入すれば違いは一目瞭然だ」

大西が水供給ポンプのボタンを押す。

「水供給開始。どうだ？」

「大西課長、何かおかしいです！」

「どうした！？」

「改良型スキマーの水の飲み込みが悪いんです。従来型スキマーと大して変わりません」

「バカな！ そんなはずがない。あれだけ試験したんだ！」

その後結局20回近く試験したが、改良型スキマーで分離水回収効果の向上が確認されたのはわずかに4回程度だった。

「マジかよ……」

一同は疲れ果てて立ち尽くした。

「どうして今まではうまく行ったんだ。今日は何が違うというんだ！」

納得の行かない表情で大西が拳を握りしめ、怒りを顕わにする。

「よく分からないのですが、別の手立てを考えたほうが良いように思います。そもそもうまく行った原理が分からないのでは、対策の打ちようがありません」

真木が毅然として言い放った。

「あのなあ、俺達がどれだけ苦労してこの改良型スキマーに辿り着いたと思ってるんだ。ついこの間から見習いで入っている分際で。だったらお前がこの状況を何とかしてみろ！」

「機械のことはよくわかりません。ただ、中心部から水を吸い出せばいいんですよね。外側から内側にかけて負圧にはできないんでしょうか？」

「圧をかけろと？」

「はい、可能なら」

大西が笑い飛ばして言った。

「これだから素人は口を出さなって言ってるんだ。2,000rpmの回転体だからこそ遠心力が働き、水が外側から出ようとしているんだろうが。こんな高速回転体をシールして圧をかけるなんてそんなバカな話が……」

「課長、あり得るんじゃないですか。軸受けの部分にうまくメカニカルシールをすれば内筒を外側から完全遮断できるかもしれません。真空ポンプでうまく引くことができれば内圧が負圧になり、……」

「スキマーの流路を伝って分離水が内筒から排出されるという訳ですね！」

落合が興奮気味に締め括った。

「今の発想を図面に落としてみましょう。これなら原理的にも技術的にも説明が付きますし、うまく行かなかった際にも原因を追究できます！」

しばらく沈黙が続いた。そして、しかめっ面だった大西が「よし、じゃあ真木案で設計するぞ。今日は徹夜の覚悟だ。わかったな！」と言うと、出口と落合はダッシュで事務所棟に向かい、AutoCAD で図面を描き始めた。真木は試験装置の片付けをしながら「ようやく役に立ったかな、俺？」と一人ほくそ笑んだ。

「梅田さん、あれから研究所でのフェライト化実験を見ていて思うんですが、まだ研究段階とはいえ、電気炉でのバッチ処理では効率も悪いですし、何より実機と違って攪拌工程がないのが気になるんです」

「それは私も気になっている。とはいえ、この段階で専用炉をつくるほど潤沢な研究予算は配分されていないし、攪拌工程については要所要所で手攪拌して最低限の条件はクリアしているつもりだ」

フェライト化研究グループの試験区域の一角で声を潜めて梅田と真木が会話をしている。

「ボク、この試験環境と条件でフェライト化がNGになるのはどうしても納得いかないんです」

「君の気持ちは分かるよ。だからといってどうすればいい？」

「研究所の実験グループが連続式の電気炉を持っているのはご存知ですか？」

「いや……」

「内径300mmのロータリーキルン炉です。実機のおおよそ1/2~1/3スケールといったところでしょうか。乾燥炉用の試験機が故障してそのまま研究所預かりになっているんです」

「でも壊れてるんじゃ……」

「実験グループの柴田くんがこの間『直せるか？』って聞いてみたんです」

「で、回答は？」

「焼肉食い放題で直せるそうです」

「本当か。それは安いな！ 今から実験グループに行ってみよう。もし直せたとしても、まだ壊れたままという扱いにしておいてもらわないと何かと不都合だからな。そうと分かれば日野グループ長に早く根回ししなければ！」

梅田と真木はその足で実験グループに向かい、焼肉をダシに抱き込み、ロータリーキルンの補修と確保の言質を取った。

「梅田さん、実験計画はよろしくお願ひします。電気炉での最適条件が案外違う結果に出るかもしれませんし、原料飛灰を多めに確保しておいたほうがよいと思います」

「よし、実験の準備は任せたまえ。後は実験の立ち会いはよろしく頼むよ」

「承知しました」

単なる思い付きではあるが、フェライト化のほうも前に進む段取りを固めた。何とか同時並行で消化促進と超高効率遠心脱水機の開発を進めたい。真木は新規に設計した分離水排出機構の改造工場の現場へと足を運んだ。

「落合、どうだい、そっちは」

「見てくださいよ、これ。図面がほぼ実機に再現された形です。内圧はあのゲージに表示されます。今真空ポンプのスイッチをONにしますんで」

真空ポンプがポンポンと軽い乗りの音で作動しはじめ、徐々に無音に近付いて行くと落合が「真木さん、ほら見て」とゲージを指差した。ゲージの針は時計の0時から左に傾き、要は負圧になっていることを示している。

「どの辺りが適正圧か分からないんですが、リーク箇所をこまめに探して内圧を負圧にまで持って行くことができました」

「やったな、落合！　じゃあ、この辺で一旦実験か」

「はい、ざっとした流体力学上の計算であればこの圧でも分離水が中心に向かうはずなんです。全量回収とは行かないと思いますが……」

「じゃあ、今は大西さんと出口さん待ち？」

「今、機器設計部の連中が排泥バルブの相談で本社の商品開発部にいます。私も打ち合わせに入る予定だったんですが、スキマーのほうに注力しろと西山部長から」

「なるほど、じゃあ排泥バルブの方もある程度進展したということ？」

「試作機の製作で相当予算を使い込みましたからね。新型バルブのお披露目とともに予算折衝だそうですよ」

「じゃあ西山部長の裁量次第でグッと進むね、排泥バルブもスキマーも」

「ですね、じゃあスキマーの試験、ボク達二人でやっちゃいますか！」

「その意気だよ。大西さんに、たまには朗報を聞かせてあげないと！」

2m³タンクに水を張り、1m³溜まったところで水供給ポンプを作動させる。唸りをあげて2,000rpmで回転する回転体に水が注入される。回転体の壁面に貼りついた水が排水部から排出され始める、はずだが……。

「お？」

分離水はスキマーの流路を伝って内筒からドボドボと流れ落ちていく。

「おい、落合、全量スキマーを通ってるぞ！」

「はい、やりました、真木さん！」

そこへ機器設計部の岩佐、大西、出口だけでなく、商品開発部の西山も現れた。

「これは、スキマーで全量回収したのか！？」

西山が驚きの声を上げた。

「お前ら、やったな！」

大西が真木のヘルメットをパコンと叩いて子供のように喜んでいる。

「真空ポンプで引いてるのか。パチあてのシールが気に食わないが、最初から設計し直せば耐久性も問題ないだろうな」

「じゃあ、デモ機の製作に入ってもOKですか！？」

岩佐が喜びの声を上げる。

「もちろんです。早くデモ機を製作してください。試験結果の成績がよければ全国各地にキャラ

バン隊を組んで回りましょう。作業員の手当ても問題なしです。頼みましたよ」

超高効率遠心脱水機の開発もいよいよ最終局面に入ってきた。要素技術の開発はすべて終わり、あとはデモ機を製作して結果を出すだけだ。競合が同等の性能を誇る脱水機の開発に成功したというニュースは幸いまったく入っていない。また、浦川が率いる新型脱水機のほうも処理量の棲み分けをうまく図り、カニバリゼーション（共食い）を起こすことはないという見通しだ。

「それじゃ、本社に戻ります。真木くん、落合くん、しっかり頼むぞ。あと、研究所に籠り切りにならずにたまには本社に顔を出しなさい。泥遊びも程々にな」

西山は笑いながら、研究所からJR最寄駅の間を送迎バスに乗り込んだ。

「西山さんもたまにはこっちの皆と飲んでいけばいいのに……」

落合がそう言うと、「いやあ、今日の予算折衝も大変だった。西山さんもおそらく宮津さんのOKを取り付けに帰ったんじゃないのかな。大変だよ、技術のNo.2だからね」

大西はそう言うと、「よし、新型脱水機のデモ機設計だ。今晚も頑張るぞ！」と言って事務所棟に引き上げて行った。真木と落合は試験の後片付けをしながら、終わりが見えてきた充実感に満たされていた。

「真木さん、焼肉のお返しできましたよ！」

研究所に出勤し、更衣室で作業着に着替えている真木に実験グループの柴田が笑顔で話しかけてきた。

「マジで！？ ロータリーキルン？ 案内して！」

真木は内線で梅田ら、フェライト化研究グループを呼び出し、第一実験棟の一角に居並んだ。「あちこちガタが来てたんで交換品とか結構あったんですけど、新規に調達した部品以外はサービスしておきますよ。じゃあスイッチオン、っと」と言って柴田が制御盤のボタンを押すとロータリーキルンが緩やかに回転し始めた。

「回転速度はこのインバーターで調節してください。最高温度は1,100~1,200°Cくらいじゃないですかね。負荷試験はしてないんで、そこはよろしくお願いします。ちょうどよく中に攪拌翼が付いてますし、シールもばっちりしておいたんで気密性も問題ないですよ」

「おー、これは凄いな。私もダメもとで日野さんに最初から相談しておけばよかった」

梅田が感嘆の声を上げながら新しい実験装置をメンバーと見て回る。

「こりゃあ、この辺の焼肉屋じゃ安すぎたかな」

真木が笑いながら言うと、「仕事ですから仕事。でも、いい結果出たらまた焼肉よろしくです」と柴田が茶目っ気たっぷりに言った。

「任せとけよ。これで結果が出たら弾むぞ！」と梅田が言うと、日野が「まあ、そんな訳なんで、実験グループをうまく使ってくださいよ。いい仕事しまっせ、食べ物につられやすい奴もいますが……」と言って皆を笑わせた。

その後、フェライト化の試験データ取得は順調に進んで行った。今まで電気炉でフェライト化率がイマイチ上がらなかった要因はおそらく飛灰の攪拌が不十分だったことと、手動で攪拌するために電気炉の扉を開ける際に炉内に空気が入り還元雰囲気を保てなかったことにあると見られる。ほとんどの試験条件で10%程度フェライト化率が上積みされた。

「うーん、それでも現時点の最適条件で40%か……」

当初の10%程度のフェライト化率よりは数段上を行っていた。しかし、商用化するには70%、せめて60%のフェライト化率がほしい。でなければ、残りは廃材となり最終処分に回ることになる。元々、この乾式フェライト化技術は溶融飛灰等に含まれる重金属類固定化による安定化技術として開発している技術である。飛灰の最終処分費用の削減分がフェライト供給の低コスト化に繋がるのだ。

「フェライト化されなかった40%は循環させて再処理してはいかががでしょう。そのうち60%がフェライト化されれば2段階の処理で歩留まり60+24%、要は84%になります。まあ、そううまくは行かないと思いますが……」

「そうだな、処理量は落ちるが滞留時間を長くするか、フェライト化されない粒子を多段処理するかのいずれかに絞られたかな」

「すっきりはしませんが、だいぶんとしどころが見えてきたようですね」

そこへ実験棟の開いたシャッターの脇から陽気な声が聞こえてきた。

「ブラボー、真木さん。そっちも成功ですか!？」

「落合! いや、まだ成功とは言えないけれども大分前進したという感じかな?」

「真木さん、超遠心脱水機のデモ機ができました。来てください!」

「マジか! 梅田さん、すみません。じゃあ、後はよろしくお願いします!」

真木はそう言い残すと屋外実験場にある車載型のデモ機のもとに落合と一緒に走った。

「一通り見てみたんですけどね……、完璧です!」

「大西さんと出口さんは?」

「このデモ機の製作に追われて溜まりに溜まった仕事を片付け中です。『実験は二人に任せた。何かあったら呼んでくれ』だそうです」

「だろうね、うちの部と違って開発ばかりしている人達じゃないもんね」

「それでも同じ夢を追い駆けてくださってホントに有難いですよ。じゃあ、まず水負荷試験から早速行きましょう。このデモ機は商用機をイメージしてるんで全自動で楽チンですよ！」

真木と落合は外注の実験員とともに24時間体制で実験に連日没頭した。まず水負荷試験でのスキマー機構については24時間運転で異常は確認されず、分離水排出部でのエネルギーロスは極小に抑えられることが確認された。それを受けて、汚泥を用いた実負荷試験を行った。前回は排泥バルブがうまく作動せず、ボウル部分が閉塞してしまったが、今回の排泥バルブは閉塞しそうな異常圧を感知するとバルブが『開』になる機構を具備しており、閉塞の懸念なく勝鬨下水処理場から持ち込んだ4m³の汚泥を従来機での平均含水率78%に対して75%まで脱水してみせた。

「やったな、落合！」

「やりましたね。でもここまでは想定内。水負荷試験はテスト機で成功していますし、勝鬨下水処理場の汚泥は脱水しやすい性状の汚泥ですから。ここからの全国キャラバンが見物ですよ」

ウイングを上げた車載型遠心脱水機のタラップに腰を下ろしたまま、夕陽を見つめて落合が言う。

「ようやく研究所から外に出られますよ。やっと勝負のときが来ました。今までは何だかんだ言って、甘えも誤魔化しも利く社内実験ですからね。これからは我々の産みの苦勞を知らない営業マンも付いてきますし、来週から茨の道を歩みます。真木さんもよろしくお願いしますね」

「ああ、何だかんだ言って開発工程も間に合わせたな。来月は4月か。また新人も入って来るし、入社早々いいニュースを聞かせてやりたいね」

「フェライト化もですね」

「一人二役もいい加減疲れてきたし、あっちも決着つけられないとな。梅田さんに『巻きでお願いします』と伝えておくよ」

その後、真木はフェライト化の実験を梅田らに託し、北海道から鹿児島まで落合とキャラバンを組んで、全国の下水処理場の脱水試験に取り組んだ。既設の脱水機が東洋製のところはもちろん、他社製が入っているところや他方式を採用している処理場までもが、大処理量・低動力・コンパクトの三拍子揃った超高効率遠心脱水機に度肝を抜かれた。プレスリリースに先立ち、本社をはじめ全国の支社・支店に問い合わせが相次ぎ、広報部や営業部がその対応に追われた。脱水試験キャラバンも本社や研究所に帰る暇なく次の日程が組まれ、毎日が汚泥との格闘だった。まさに体力勝負の中、正念場の3箇月を真木と落合の二人で何とか乗り切った。

超高効率遠心脱水機の大成功に熱狂する中、ようやく平穩が訪れ、フェライト化研究のその後の進捗を確認するため研究所に久々の出勤をしたある日のことだった。

「新日本製鋼が都下水と来月から共同実験だそうです！」

東京都下水道局に営業訪問している環境営業部の宮本次長から本社に電話が入った。

「何の共同実験だ！？ 脱水か？ 焼却か？」

「消化促進だそうです。磁石を使うとか担当者が言っていました」

「それ、ウチが福岡的那珂川下水処理場でやってたやつじゃないのか！？ 商品開発部の西山に確認しておく。もうちょっと詳細を探ってくれ」

高田営業部長が階下の商品開発部を訪れ、西山のデスクに顔を出した。

「来月から新日本製鋼が都下水と消化促進の共同実験をするらしい。方式は磁気処理だそうだ」

研究所にいた真木にもその情報はすぐに知らされた。真木はフェライト化研究グループにPCを借りて、新日本製鋼の特許公開情報を調べた。

「これか！？」

特許データベースを検索したところ、先月新日本製鋼から磁気処理を用いた汚泥処理の特許申請が出されている。真木らの研究との決定的な相違はフェライトの有無だ。三菱重工はフェライト抜きで汚泥の可溶化効果が得られたとしている。特許明細を読み解くに、添加剤の微妙な調整により磁力の効果が発現され、汚泥が可溶化されるというのだ。

「うーん、わかりにくい特許明細ですね。梅田さん、こんなことあると思います？」

真木は頭を捻りながら、フェライト化研究グループ長の梅田に質問した。

「うーん、何とも言えないが、都下水と共同研究するというからにはそれなりの根拠があるんだろうなあ。ちょっとトレース試験をしてみよう」

真木は梅田に促され、必要な資機材を集め、皆が固唾を飲む中、いくつかの条件で磁気処理を試してみた。

「特段の変化は得られないようですけどね。というか、酸・アルカリ処理で一定の効果は出るはずですから、磁石の効果の有無は何とも言えないですね。明らかにウチを意識したものとは思えません」

「フェライトの調達でウチが行き詰っているのは今や周知の事実だろうからな。新日本製鋼の野郎、ウチを完全に潰しに来たか！」

「いずれにせよ、この結果が出るまでには最低でも2、3週間様子を見る必要があります。その間は……。うん、待てよ！」

真木は特許明細をもう一度つぶさに見直した。

「やっぱり……」

「どうした真木？」

「ここです、ここ。添加剤の種類の中に『鉄粉』と。これなら磁石に反応しますからフェライト粒子と同等かそれ以上の効果が得られる可能性があります」

「しかし、経済性はどうなんだ？」

「くず鉄を有価物扱いとして輸送量プラスアルファで購入すれば廃棄物処理法には抵触しません。これを破碎・粉碎すれば安価に鉄粉を調達できます。やられました……」

「俺達がフェライトにこだわり過ぎたのか……」

「いえ、あのペースで実証試験に成功していればフェライトでも十分勝てましたが、特許出願で

敵にヒントを与えたまま開発に行き詰まり、逆にチャンスを渡した形になってしまいました……」

その頃、西山は本社で宮津らから執拗な叱責を受けていた。

「帝都大学がビーカースケールで成功しているからとって、実スケールでの落とし穴を見落とした！？拳句の果てに『フェライトは不要』ではウチの今までの研究投資は一体何だったんだ！」

「しかし、新日本製鋼の方式で当社の磁気一フェライト処理方式より、消化促進効果があると決まった訳ではありませんし……」

さすがの西山も確証が持てず、宮津が納得するような抗弁をすることも叶わない。

「フェライト化の実験はまだ継続しているんだろう。新日本製鋼と都下水の共同試験の結果次第では解散も視野に入れる必要があるな。それから、君の部の担当の……」

「真木ですか」

「あいつは今何してるんだ！？」

「落合と超高効率遠心脱水機の開発をしています」

「消化促進の実験はしていないんだな」

「はい。そのはずです」

「潮時だな。とりあえず新日本製鋼と都下水の様子を見守ろう。これで俺達に勝利はなくなった。敗戦か引き分けだ。今までの投資を考えると引き分けというのは難しいかもしれんな」

磁気一フェライト処理による消化促進の実験に終止符が打たれた瞬間だった。フェライト化の効率が合格ラインに近い値まで高まり、わずかに細く繋がっていた逆転挽回のチャンスは完全に失われた。

「と、そういう訳だ」

西山は表情穏やかに語りながら、真木にビールを注いだ。

「消化促進の試験、まだ続けてたんだろ？」

「いえ、あの、ちょっとだけです」

「隠したってダメだ。梅田グループ長は俺の同期でな、話は聞いている。落合からも一度相談を受けた」

「そうでしたか……。すみません」

「俺としては君の情熱の炎が燃え尽きるまで続けさせてやりたかったけどな」

「ありがとうございます。でも、担当者としてはあの新日本製鋼の方式には負けないという気持ちはあります」

「わかるよ、その気持ちは。何をどうすればどうなるか肌感覚で一番知っているのは君だからな」

真木の空いたグラスにビールを注ぎながら西山が真木を諭すように語る。

「でもこれが社会であり、ビジネス界だ。相手を蹴落とすためなら何でもやる。彼らの落としどころとしては、磁石を用いた消化促進自体を下水処理業界から抹殺することかもしれない」

「それはどういうことですか？」

「磁気―フェライト処理にせよ、連中の方式にせよ、もし本当に効果があれば、業界の戦略図を塗り替えるパラダイムシフトになる。リーディングカンパニーの新日本製鋼にとってそれは困るんだよ。要はウチが邪魔だということだ。それが幸いフェライトの調達部分で勝手にこけてくれた。ここで磁石活用方式にそれほどの効果がないと結論づけて、あの方式自体を業界のレガシー、要は過去の遺物として片付ける算段だろう」

「そんな、我々の方式はあくまでフェライト粒子と汚泥粒子の衝突によるもの、単なる磁気処理のような未知数の技術とは一線を画するものです。原理が確かなことは歴然としており、消化促

進の効果には確証があります」

「それはあくまでウチの主張だからね。悔しいけど、宮津さんが我々の前進を止めた以上、もう挽回の余地はない。残念だが諦めよう。フェライトの歩留まり向上もまだ十分な目途が立っていないんだろう。梅田さんから『あと少し時間が欲しかった』と先ほど連絡があった。今回は残念ながら負け戦だ。この革命的な技術で汚泥処理業界に旋風を巻き起こす大チャンスだったんだがな。俺も無念だ」

「『泥はなくなる』ですか……」

「なかなか『なくなる』な……」

それ以来というもの、真木は技術動向調査等、本社で過ごす日々が多くなった。研究所に行くときは誰かの実験補助というケースが大半だったし、新しいテーマを与えられることもなかった。

それに引き替え、超高効率遠心脱水機を開発した落合と、低動力型脱水機を開発した浦川はともに社長賞を受け、次なる新商品開発に向けて技術開発に励む日々が続いていた。その差は誰の目にも明らかで、新入社員時代に寵愛されていた真木を知る者は不憫に思いつつも、「結果がすべて」と社会人生活の厳しさを我が身に刻み込んだ。

資料をどうまとめればよいか急に分からなくなり不安に陥る。次第に手先が震え出し、背中にじわっと汗をかく。周囲から常に見られているような気がする。人と話すときに相手の目を直視できず、思わず視線を逸らしてしまう。何を話していたか思考回路が支離滅裂になり急にどもり、口ごもってしまう。真木にそんな症状が現れはじめたのはちょうどその頃のことだった。満員電車で通勤するのも苦痛になり、会社に電話して独身寮から一番最寄にある明德総合病院に雇った。

「今日診た範囲では身体に異常はなさそうですね。まだお若いですし、一応血液検査やレントゲン検査の結果が出たら連絡しますが、紹介状を書いておいたので、ここに一度行ってみてください」

「どこですか？」

「心療内科です。当院には生憎専門の医師やスタッフがいないので、高橋クリニックと提携しています。真木さんからお聞きした症状と今日の診察結果からすると、精神的なストレスから出た症状の可能性が高いと思われます」

「治るんですか？」

「もちろんです。抗不安薬や抗鬱剤を処方する投薬療法やカウンセリングにより気持ちや行動をコントロールできるようにする認知療法など様々な解決策があります。詳しくは高橋クリニックの先生と相談してみてください」

明德総合病院の担当医に言われるがまま、隣接している高橋クリニックに出向いた。

「明德総合病院で紹介状をいただきまして、初診なのですが大丈夫でしょうか？」

「今日は平日なので予約しなくても大丈夫です。受け付けましたので、おかけになってお待ちください」

自分の名前が呼ばれるまで、真木は不安と闘っていた。自分は鬱病なのか。確かに消化促進の技術開発を成功に導けず、他社に出し抜かれ、宮津からも叱責を受け、事実上の戦線離脱となったが、その精神的ダメージはこんな形で及ぶものだろうか。

「真木さん、どうぞ」

眼鏡をかけた30代前半くらいの女医が診療室から顔を出して呼びかけた。

「あ、はい」

真木は荷物を持って、診療室へそそくさと入った。

「今日はどうなさいました」

真木は戸惑いながらも最近自分の心身に現れている症状を口にした。

「何か思い当たる原因とかありますか。例えば身内の不幸とか、業務上のストレスとか」

「今技術職に就いていまして、社会人3年目になるのですが、業務成果でも後輩社員に追い越され、干されるような形で現場を追われ、デスクワークの日々でかなり参ってます」

「まだ社会人3年目なのに厳しい会社なんですね。もう少し温かい目で見ればいいのにね。周囲に厳しい言葉を浴びせられるとかそういうことは」

「それはないですね。自分で自分を追い込んでいる感じです」

「あなたは責任感が強すぎるのかもね。まだ入社3年目なんだから失敗だってするさ、って開き直っちゃえば楽になるわよ。それに貴方は後輩に追い越されたと思っているようだけど、1年の経験の差はあなたが考えているより遥かに大きいはずよ。きっと周囲があなたを頼りにするときがくると思うし、今は少し休む時間を与えられたと思って力を温存しておくとかどうかしら？」

まだ、そんなに人生経験豊富という感じでもない年齢の女医だったが、ひとつひとつの言葉が新鮮だった。思えば、そういう温かい言葉を職場でかけられたことがなかった。皆、腫物を触る

かのように内勤で縮こまっている真木を遠巻きに眺めているような気がする。

「あなたのほうから周囲に声掛けしていったほうが周りもあなたに声をかけやすいのよ、きっと。周囲もあなたが凹んでいるように見えてどう声をかけていいのかわからないんだと思いますよ」

カルテにカウンセリングの内容をさらさらっと書き留めながら、その女医は話をまとめた。

「いずれにせよ、早めに相談に来てもらってよかったです。ひどくなってからだと会社に出社するのも辛くなる方もいらっしゃいますからね。今日は念のために薬を処方しておきますから、どうしても辛くなったときに飲んでください。おそらく大丈夫だと思いますけどね」

「あ、あの」

「はい？」

「で、結局私は鬱病なんですか」

「鬱病というのではないのですが、鬱的症状が少し見られる感じです。今日処方するのは抗うつ薬ですが、依存性も軽いですし、こういう症状の患者が平均的に服用する中では量的に一番少ないものです。鬱とか言うと過敏に皆さん反応なさいますけれども、よく言うように『心の風邪』ですし、誰でも大小そういう感情や症状は持っているものなので、あまり自分を特別なものと思わないようにしてください。要は真木さんの個性の現れなんです、責任感の強さや周囲に対する優しさ、そういったものの過度な現れですね。人よりも少し心が繊細なんだとそう思ってください」

「はあ……」

「またいつでもご相談にきてください。気の持ちようですから、周囲の状況が変われば落ち着くかもしれませんし、あまり過度に心配しすぎないことです」

真木はクリニックの会計を済ませ、処方箋に書かれた薬が出てくるのを調剤薬局で待ちながら、一人物思いに耽った。

——まあ確かにまだ社会人3年生なんだよな。いくらでも取り返せるチャンスはこの先きっとあるはずだよなあ……

そう自分に言い聞かせた真木だったが、その日以来会社を欠勤する日々が多くなった。入社してもふさぎ込みがちな真木の様子を見て、西山も何らかの決断をしなければと覚悟を決めた

「宮津さん、お話があります」

「なんだね、改まって」

「当部の真木の処遇の件です」

「何かと思えばそんなことか。力のある奴は自力で頭角を現してくる。放っておけばよい」

「しかし、あの試験を打ち切って既に半年が経とうとしています。このまま彼を放置するのは機会損失です。あのテーマを与えたのは私ですし、彼に責任を押し付けるような形で片付けてしまうのは会社の為にも、彼の為にもなりません」

「彼にもう一度チャンスをやれと？」

「もう一度と言わず、一人前になるまで面倒を見させてください。落合の成果にしたって、彼の下支えがなければ実現しませんでした。彼にも評価すべき点は多々あるんです」

「フォロワーとしてだろう。要はプロジェクトをリードする力はどうか、ということなんだよ。ウチは入社1年生、10年生など関係ないからな。プロジェクトリーダーとしての資質があればテーマを任せる。それだけの話だ」

「真木にはその素地がないと？」

「比較論の話だ。彼にやらせなくてもいい仕事をする人材は他にいる。組織の中には縁の下の力持ち的に目立たず、周囲を支える人材がいてもいいんじゃないか」

西山は宮津の真木に対する評価や見方を忸怩たる思いで聞いた。入社以来の2年半余りの間に真木は相当の経験値を積んだはずだ。失敗経験も踏み、成功経験もプロジェクトメンバーという立場で味わった。そろそろ芽が出るタイミングだと感じるのだ。

——うちでダメなら外で活躍してもらおうか……

西山は唇を噛み締め、技術企画部の丸田部長に直談判に行った。

「丸田さん、担当直入に言います。ウチの若手を引き取ってほしいんです」

「ああ、うちも慢性的な人不足というか、年寄り連中が仕事しないんでね。仕事のできるヤツだったら大歓迎だよ」

「仕事はできます。今も技術開発動向調査などさせています。単なる専門バカではなく、幅広い知識を身に付けるよう指導しています」

「そんなヤツを何で外に出すんだ？」

「それはその、ウチでは活躍の場がないんです」

「技術開発ができない？ 何故だ」

丸田は見当が付かず思案していたが、はっと瞬時に気づき西山に切り返した。

「そりゃ駄目だ。無理な相談だよ。宮津さんに睨まれている彼だろ、磁気処理で失敗やらかした。確かにウチは宮津さんの所管部署じゃないが、それにしても今会社で干されている社員を受け入れるというのはね……」

「丸田さん、真木は悪くないんです。悪いとすれば、彼にあのテーマを担当させた私の判断ミスです。勝ち戦と思って投入したにも関わらず、意外な盲点に気付いていませんでした。あれは彼のせいじゃない。彼はやるべきことはやり尽くしたんです」

「君の立場であれば部下を守らなければならん、というのは分かる。ただ、結果もあのような形で現れ、勝敗は決している。ここでウチに来ようものなら、ますます彼の敗戦を強調するようなものだぞ」

「彼を飼い殺しにするよりはマシです。丸田さんの力で彼を一人前にしてやってください。当部も今まで以上に技術企画部と連携を強化し、彼の指導にも引き続き関わっていくつもりです」

「君は随分彼を買ってるねえ。西山君の見立てであればそんなに狂いはないはずだが。まあ、しばらく考えさせてくれ。ウチも今日明日という単位で困っている訳じゃないんだ。何しろ受け入れたところで指導役は私くらいしかいなんだからね」

丸田は苦笑いを浮かべながら回答を保留した。西山は提案を一蹴されなかったことに安堵しつつ

、丸田が真木を受け入れてくれることを願った。

真木が上京して4度目の桜の季節が到来しようとしていた。入社3年目も終わりに差し掛かり、もはや中堅社員への入口という状況にありながら、順調な成長カーブを描かない自らのキャリアを不本意に感じることもあった。それもこれも最初で最後の大チャンスで結果を出せなかったからだと思うと、あの頃あれをやっておけばよかった、といった後悔が山ほど出てくる。

そんな中、期末の人事考課に先立ち、真木は西山から会議室に呼び出された。

「どうだ、最近は？」

「本音を申せば、消化促進実験にもう一度チャレンジしたいです。特許も押さえていますし、フェライト化の効率さえ上がれば確かな技術になります。新日本製鋼と都下水の共同研究もお茶を濁した形で終わっていますし、反撃のチャンスを虎視眈々と窺っています」

「そうだな、今は次なる攻め時かもしれないな」

「来期の事業計画に何とか織り込んでいただけませんか」

「それも大事だが、今日は君にビッグニュースがあるんだよ」

「なんですか！？」

真木は消化促進への再チャレンジが認められたと思い、思わず席から立ち上がった。

「まあ座りなさい。ここ半年くらい、君に技術動向調査をお願いして、環境の幅広い分野での知識、見聞を広めてもらった」

「はい」

「そこで、君の次のキャリアパスとして技術企画部にポストを設けた。肩書きは主任。昇進だ、おめでとう」

真木は鬱屈した日々の中でも逆転プランを描かない日はなかった。そんな中での突然の辞令に真木は衝撃と落胆を隠せなかった。

「磁気―フェライト処理には将来がないとそういうことですか……」

「それは違う。ただ今の宮津体制の下ではどうしようもない。磁気－フェライト処理云々の前に君の可能性が閉ざされてしまう。エンジニアとして入社して4年目で異動というのは不本意だろうが、受け入れ先の丸田部長も歓迎してくれている。もちろん、商品開発部も連携して事業推進していく。新天地で新たなキャリアパスを描いてみてくれないか」

真木は西山の真摯な眼差しをシカと受け止めた。

「選択肢は他にないんですよね、当社で生きていく限り」

「ああ、最善の選択肢だと思う」

「一両日、心の整理をさせてください。西山さんが仰ることはよく分かりました」

「真木洋介殿 平成二十三年四月一日付をもって、技術企画部企画グループ 主任に命じる」

真木は交付された辞令をしげしげと眺めた。

西山の親心で、真木は商品開発部から技術企画部へと異動することとなった。開発者としての道は一旦断たれたが、新たな分野での事実上の昇進であり、またより広い視点で環境技術に触れることとなった。確かに真木にとって自身のキャリアをスタートした技術開発には相当の思い入れがあった。しかし、西山から異動の内示を受けて以降、環境技術を俯瞰しつつ企業戦略の立案、ひいては社会課題の解決を目指すというのは入社以前の志向により合っているのではないかと考えるに至った。もちろん消化促進の技術開発に未練がないではなかったが、そこに拘るがために自身のキャリアを閉じてしまうのは得策ではないとも考え、無理やり自分自身を納得させた。

とはいえ日夜実験に明け暮れていた技術開発漬けの3年間から打って変わって、企画畑に移り、主にマーケティングや技術サーベイを手掛けることになり苦労がない訳がない。商品開発部時代に近い業務をしていたとはいえ、まずは東洋の保有技術の棚卸から始まり、競合企業との技術比較、海外勢の保有技術調査などから、会社としての綿密な技術戦略を練るための検討素材の収集・作成に明け暮れた。これまでとは打って変わって終日デスクワーク漬けの日々に明け暮れ、一からの出直しの日々に四苦八苦しながらも、真木は次第にその面白さに憑りつかれていった。

「アンタも大変だねえ。エリート集団の商品開発部からロートルの吹き溜まりへようこそ」

事務職の古瀬が独特の表現で真木を歓迎した。古瀬は年の頃なら真木の2, 3歳上といったところか。短大出なので在社歴は真木よりも6, 7年長いという計算になる。歯に衣着せぬ発言と、茶髪ならぬ紫や赤の奇抜な髪色で周囲から煙たがられている。そんな風紀違反状態でもクビにならないのは、実家が東洋の筆頭株主である第一中央銀行の重役で、その縁故採用という専らの噂だ。素顔や服装は意外と地味なのだが、髪色のせいでとにかく一緒にいると目立つ。

「ちょっと『ロートルの吹き溜まり』だなんてそんな。『ベテランの溜まり場』じゃないですか」

真木が周囲に聞こえないように声を潜めてフォローする。古瀬はそんなこと知ったこっちゃないという表情で次々と話題を変えていく。

「で、どうなの？ 何か商品開発部でしくじったとか皆言ってるけど、それ本当なの？」

「開発に成功しなかったのは事実ですよ」

「ふーん、まあうちの会社、というか、あそこの部、若手に責任ぶっつけ過ぎなんだよね。大学出たばかりのひよっこに大事な開発任せて失敗した責任取れってそれどうなのよ！」

「まあ、いいじゃないですか。おかげさまで技術企画部の一員にさせていただきましたし」

「いや、アタシは納得いかないね。丸田さんに直談判してくる！」

「いや、あの、ちょっと待ってくださいよ」

「あー、真木くん、いいからいいから。こういうの慣れてるんで」

話が全部筒抜けだった丸田からそう返事が来ると、古瀬の怒りの矛先は丸田に変わった。随分と変わった部署に来たものだ、と真木は思いながら、それまで目を通していた資料に再び視線を移した。

技術企画部の雰囲気は毎日そんな感じで、思い付くまま話を吹っ掛けてくる古瀬の相手役を務める毎日だったが、そんな古瀬との掛け合い漫才は思いの外、真木の心を和らげる効果を持った。新入りの真木に無関心な年配部員が多い中で、理解のある丸田と一風変わったキャラクターの古瀬という存在のおかげで、普段感じていた対人恐怖、視線恐怖や自律神経を失調したりすることなどが激減した。商品開発部では入社するのが辛い日が続いていたが、1ヶ月も経たずして会社に通うのが苦痛でなくなった。高橋クリニックで処方されていた薬も半年を待たずして服用する必要がなくなり、医師からも「もう通わなくて大丈夫」との太鼓判をもらった。

自身の思いとは裏腹の左遷的異動とも言える今回の処遇が真木の窮地を救った。後々、丸田から「君を推してきたのは西山くんなんだよ」と聞かされ、西山への感謝の念が一段と募った。

当時、東洋では土壌汚染浄化事業のテコ入れを図っており、ライバル社と差別化するための道具立てのため、他社との技術提携、技術導入等を模索していた。土壌汚染浄化分野は欧米が二歩も三歩もリードしており、提携している海外のリサーチ会社World Insight社から隔週で送られてくる欧米企業のプロファイル进行分析していくのはなかなか遣り甲斐のある仕事だった。真木は約半年をかけて環境技術マップを作成した実績を認められ、技術企画部、商品開発部、土壌環境事業部、法務・コンプライアンス部等の混成チームに入り、多面的な角度から諸外国の土壌汚染浄化関連企業のプロファイルを整備した。結果として、検討チームは数ある提携先候補企業のうち、コンサルティング力に定評のあったアメリカGWT Technology社、ドイツBauer社、オラン

ダGroenlo社をリストアップし、経営会議への報告後、技術企画部長の丸田と商品開発部長の西山が渡米、渡欧した。出張時に丸田、西山が先方から入手してきた資料を真木らが整理し、丸田と西山が出張報告をまとめた。この交渉経過を経営会議に丸田、西山が報告し、オランダGroenlo社との業務提携にゴーサインが出た。提携の効果が出るかどうかはこれからだが、まずは提携まで漕ぎ着けた成功体験に真木は充実感を覚えた。西山も元部下の働きぶりに目を細めた。

西山は丸田に誘われ、業務提携のプチ祝いということで赤坂のBarに出向いた。

「いやあ、この度はお疲れさん」

「丸田さんこそ。しかし米国のGWT社の最後のアプローチには心が動きかけましたね」

「そうだな、まあ実際問題GWT社とGroenlo社のどちらが正解だったか分からないが、それを生かすも殺すも当社の営業部隊、技術部隊に頑張ってもらわないことにはな」

「そうですね、商品開発部としても最大限のバックアップをしていきます。まずはGroenlo社が得意としている原位置浄化技術のノウハウを土壌環境事業部の技術部隊とともに習得します」

「話は変わるが、真木くん、君の推薦通りなかなかいい仕事するじゃないか」

「ありがとうございます。そうなんです。彼にはセンスがあり優秀なのですが、最初に手掛けたテーマがチャレンジング過ぎました。その責任は私にあります。それにまさか宮津さんが新人の失敗に対してあそこまで咎めるとは思いませんでした。完全に私の誤算です」

「まあ、それも経験だ。今彼がすべてにおいて慎重に事を進めているのもその苦い経験があつてのことだろう。次はカタール電力・水公社の海水淡水化プロジェクトへの資本参加の検討チームに彼を抜擢するよ」

「先日の経営会議で初めて報告された案件ですね。確か100億円規模の事業だったはず。それは彼も意気に感じるでしょうね！」

「実力のある奴には若いうちから経験を積ませるのが当社の流儀だからね。あとは失敗してもチャンスを与える風土が定着するともっといい会社になるんだが……」

「本当にそうですね」

西山は丸田と杯を交わしながら、これから会社を背負っていく経営幹部としての責任を噛みしめていた。

気付けば、真木が技術企画部に移籍して早3年が経過していた。最初は腕試しのような技術サーベイの日々に追われていたが、気付けば東洋テクノロジーの大型案件には何らかの形でかかわるようになっていた。かつて「泥はなくなるらない」と主張を曲げなかった宮津も「水を変えれば魚も泳ぐものだなあ」と独特な表現で真木を称賛するようになっていた。

そして、新たな部署での業務にも大分慣れてきた4年目、真木に人生の転機とも言えるビッグチャンスが訪れた。

「部長じゃなくて私がですか？ 本当に私でいいんですか？」

入社7年目、技術企画部で丸田の懐刀としての地位が確固たるものとなり、国内外技術のリサーチから技術導入、業務提携、事業出資等に至るまで幅広く任されるようになってきた。そんな中、環境関連の社団法人が東南アジア方面に視察団を送ることになり、団長を務める西山の補佐役として真木が抜擢された。商品開発部を離れて実に3年、部署間の協業はあれど、直接同じ仕事に携わるといえるのはこの3年間はもとより、入社以来の6年間を通じても稀有な機会だった。

「聞いたぜ、真木。海外出張だって！ 土産、土産頼むぜ」

どこで聞き付けたのか、古瀬がいつもの調子で真木に詰め寄る。

「情報速いっすね……。もちろん買って帰りますよ。何がいいですか？」

「何がいいって何があるんだよ？」

「知りませんよ、ボクだって初めて行く国なんですから」

「あっそ、まあじゃあいいや。とにかくうまいものよろしく。何なら免税品店でシャネルかブルガリのオードトワレとか、って真木ってそういうの疎そうだなあ……」

「古瀬さんは一体ボクに何を期待してるんですか？」

真木は3年間かかっていまだに古瀬の受け流し方を覚えられずにいた。何かというと古瀬の不満の捌け口になり、仕事の手を止めざるを得ないのが常だった。わずか一週間余りの出張とは

いえ、古瀬も真木の不在が寂しいというかつまらないのだろう。

「もちろん、土産だよ、土産。土産話じゃないからね」

「仕事頑張れよ、とか、そっち方面の激励はないんですか……」

「んなの、やって当然だろ。当たり前なこと言わせるなよ。あたしや、アンタの仕事っぷりなんかより土産のほうが心配な訳。そういうの苦手そうじゃん、真木って」

「とにかく大丈夫ですから。ご期待に沿えるよう頑張りますよ。ただし、シャネルとかブルガリは期待しないでくださいね！」

真木は仏頂面の古瀬をかわし、PCの手を止め、プリンターで資料を印刷する。その場でざっとミスがないかチェックし、丸田のデスクに足を運んだ。

「丸田さん、今回の出張の旅程案です。ご確認ください」

「西山くんとは調整済みか」

「はい、まだお見せしていませんが、概ねこの内容で合意しています」

「一週間余りで3か国か。慌ただしいな。まあ、現地の情報を肌で感じてくるんだな。現地に必要な技術や提携等できそうなパートナー、競合の動きなど、チェック項目は無数にある。しっかり頼むぞ」

渡航日、成田空港の登場口で西山と落ち合い、雑誌等を買って揃えた後、出発までの時間をラウンジで潰した。

「真木くんもすっかり企画の水が合ってきたようだな」

「丸田部長には本当によくしていただいています。それもこれも西山部長のお口添えがあったからです。ありがとうございます」

西山はラウンジのチェアに腰を深く沈ませながら、真木とのひとときの会話に応じた。

「真木くんはチャンスさえあれば、どこかで花を咲かすと思っていたんだ。本当はウチで咲かせてほしかったんだが……。もう君も先を見据えているのは承知の上で敢えて聞くが、フェライト

化の効率向上、かなりいい線行ってたらしいな。それに超高効率遠心脱水機の分離水を負圧にして引くアイデアは君のものだそうだな」

「全部過去のことです。超高効率遠心脱水機の成功は落合の頑張りがあったからこそのもので。それはともかく、フェライト化については悔しい思いをしました。新日本製鋼さえ出てこなければ当社に商機があったのに……」

真木は技術企画部に異動してからは見せたこともないような悔しげな表情を浮かべた。西山はその顔を見ながら「宮津さんがもう少しなあ……」と恨み節を口にした。その後、二人はラウンジで終始無言を貫いた。時間はあっという間に過ぎ、日本を離れる時間が刻一刻と迫ってきた。西山と真木はラウンジを後にし、バンコクへの直行便の機体に入り込んだ。機内は多国籍な面々でごった返し、飛び込んでくる声も英語やそれ以外の聞き慣れない言語が日本語よりも多かった。二人はビジネスクラスのシートに着座すると、リラックスした雰囲気ですぐに再び会話に興じた。

「西山さんは海外出張、慣れていらっしゃるんですね」

「最近じゃ年に数回だけだな。俺が君の年齢の頃は単身でアメリカに学会発表しに行ったこともあったし、海外出張なんて頻繁だったぞ」

「海外で学会発表ですか！？ 初耳です」

「君と落合が今回開発した前の世代の高効率遠心脱水機を開発した時のことだよ、アメリカの機械工学会で発表することになり、当時は日本国内より海外からの注目を集めたものだ」

「その頃から英語は達者でいらしたんですか？」

「その場で慣れたんだよ。人生であれほど冷や汗かいたのはあれが最初で最後だよ」

西山は過去を回想しながら、微笑んでそう言った。

「なあ真木くん、商品開発部に帰って来るつもりはないかい？」

自身の過去に思いを馳せていると思っていた西山から真木は唐突に話しかけられ、その内容に面食らった。返答に窮して口籠っていると、「今更だよな。企画の仕事がすっかり板に付いているもんな」と正面を向いたまま西山は唇を噛んだ。

「私の世代なら落合がしっかり引っ張っているじゃないですか」

「アイツはアイツでいい個性を持っているんだが、まっすぐ過ぎるところがあり周囲が付いていけない場合があるようだ。当部の全体的な成長を考えると、真木くんくらいの成長曲線でなだらかに大きく育つ先輩がロールモデルでいてくれるほうが若手の部員からするとやりやすいんじゃないかと思ってね」

真木は視線を飛行機の窓外の上空の雲に遣りながら、ゆっくりと言葉を絞り出した。

「西山さんが3年前に評価してくださったように私はリーダータイプじゃなくてフォロワータイプだと思います。いつまでもその地位に安住してはダメですが、今技術企画部で会社の戦略を練る最先端の情報を入手し、整理、分析する作業がちょうど板に付いていると思うんです。お陰様でとても遣り甲斐があります」

西山は真木の返事に頷きながら、「わかった、自分で送り出しておいて何だな。ただ、君も異動して3年。そろそろ脱皮すべきときだと思うぞ」とアドバイスを忘れなかった。

——脱皮か、要は一人前になれということだな……

真木は今までの社会人生活7年に思いを馳せ、このギザギザなキャリアカーブをこの先どう紡いでいくべきか頭の中でシミュレーションした。技術企画部にも商品開発部にも自分のロールモデルとなりうるような近い年代の先輩はいない。敢えて言えば西山は真木にとっての理想像ではあったが、入社数年にして違う道を歩んでしまっている。

——自分の道は自分で切り開いていくしかないんだな、きっと！

そうこういう間に西山と真木を乗せた飛行機は、最初の訪問地であるタイ上空に到達し、機体は徐々に高度を下げた。真木が窓外を見下ろすと、空港周辺部に広大に広がる緑が目飛び込んできた。

「成田から約6時間、意外とあっという間ですね。もっと大変なのかと思ってました」

「ああ、海外、海外って会社の連中もうるさいけどな、慣れてしまえばすぐ近くさ。ただ、それだけに技術や商流の違いには驚かされるぞ」

スワンナプーム国際空港に降り立つと、到着ゲートにタイ支社の永瀬が出迎えにきていた。

「ようこそ、西山さん、真木さん」

「真木くんははじめましてだよな。タイ支社長の永瀬くんだ」

「今回はお世話になります。海外は不慣れですので、よろしく願いいたします」

「まあ、慣れの問題ですから、そんな肩肘張らずに。とりあえず、荷物を車に積み込みましょう」

郷に入りては、でもないが、タイにしる次の訪問国のベトナムにしる、支社員のアテンドがあったからとはいえ、大きな違和感を感じることはなかった。強いて言えば日本でいう売れ筋と同国の売れ筋が異なること、また価格帯の違いであろうか。良くも悪くも日本は過剰品質、過剰プライスということがよく分かった。廃棄物処理施設にしる、上下水道施設にしる、普及率を上げていく段階にある両国では、例えば真木が手掛けてきたような消化促進や超高効率遠心脱水機や現時点で必要なく、まずはオーソドックスな嫌気性消化槽、脱水機を全国に万遍なく導入していくことが重要であり、そのを日本企業だけでなく他国企業との競争の中でシェアを確保しなければならないのが現地での最大の難しさであるように思えた。

タイ最終日の食事の際に永瀬が言い放った、「西山さん、昔の当社製品を安く売るんじゃないくて、途上国向けの新製品を出さないと勝てないですよ。現地生産によるコストダウンももう限界かと。欧米の水メジャーが運営も一手に引き受けて応札する中で、東洋は選択肢のひとつ。単なる一プラントサプライヤーです。何とか他社にない競争力を！」という言葉が耳に残った。

日本にいと順調に見えていたタイ、ベトナム戦線だったが、思いの外実情は異なるようであった。そして、この両国以上に東洋が参入に苦戦しているバングラデシュへの渡航日となった。

Bangladeshには東洋の現地法人はない。この旅程は東洋も加盟している日本環境機器協議会という社団法人の現地視察をタイ、ベトナム出張に抱き合わせで組んだものだ。

そして、タイ、ベトナムについて最終訪問国である Bangladesh に一行が辿り着いた。首都ダッカに程近いシャージャラル国際空港は様々な肌の色の人波でごった返していたが、親日家のベングル人達は日本人に優しい。” I am Japanese.” の一言で出国ゲートでの手続きを程なく済ませると、” Welcome To Bangladesh” という鮮やかなオレンジ色の看板が目飛び込んできた。

「日本環境機器協議会の方々ですか？」

流暢な日本語でいきなり話しかけられ、真木は思わず戸惑ってしまった。振り返ると、真木と同年代程度と思われる日本人の青年が微笑んで佇んでいた。

「少し離れた場所に車を待たせています。こちらにすぐ回しますね」

彼は電話でのやり取りを済ますと、視察団一向に名刺を配りながら挨拶して回った。彼の名は山口という。 Bangladesh に太陽光発電やバイオガス化等の再生エネルギー技術を普及させるため、JICAの技術協力専門家として働いているエンジニアだそうだ。

空港に到着したTOYOTA製のハイエース2台に一行は分乗し、ダッカ市内のホテルに向かった。ホテルに到着し、車の扉を開くとダッカの町には腐臭が漂っており、皆口々に「なんか臭うな」と言っていたが、下水汚泥の臭気に慣れ親しんだ真木にはなんてことはなかった。

「じゃあ、皆さん長旅お疲れ様でした。今日はゆっくりお休みいただいて、明日、明後日と皆様をご案内させていただきます。明日はダッカ南部にあるチャンドニガット上水道施設とダッカの北方ガジプールにある家畜糞尿バイオガス化施設を中心にご紹介したいと思います。お食事等は自由になっておりますので、ホテルで取っても外食なさっても構いません。ただし、日本と比べて治安は保証しかねるので夜歩きの際はご注意ください。それではよい一日を！」

そう言って山口は颯爽と去って行った。振り返ると、西山は早速名刺交換に追われている。「せっかくだから俺も顔を売っておかなきゃ」と真木も慌てて名刺交換の輪の中に入って行った。

荷物をホテルの部屋に運び込んで、ベッドでくつろいでいるとドアをノックする音がした。開けてみると西山が柔和な表情で立っていた。

「メシを食いに行こう」

ダッカの町は想像以上に都市化が進んでおり、外国人街と呼ばれるグルシャン付近には中華料理、タイ料理、インド料理、イタリア料理、トルコ料理、日本料理など多国籍な料理屋が居並んでいた。

「何か食べたいものあるかい？」

「そうですね、せっかくだから現地料理を食べてみませんか」

「じゃあ、そこに入るか」

西山が指差したのは、“Santoor”と書かれた看板の出ているレストランだった。西山の手引きで店に入ると、スパイスの強い刺激臭が鼻についた。

「どうやらインド料理だな、ここ」

「でも何かおいしそうです、ここにしましょう」

店員に案内されるままに席に座ると、西山はメニューを手にしながら言った。

「真木くんも3箇国目。ちょっと慣れてきたんじゃないか。表情も穏やかだし、行動もテキパキしてきた」

「いや、それは西山さんに同伴していただいて心強いからですよ」

「まあ何にせよ、ここが最終訪問地だ。しかも、タイ、ベトナムとは違いここには現地法人もない。二人の目でしっかり情報を得て帰ろう！」

「分かりました」

西山は隣のテーブルを見ると「あれがうまそうだな」と言い、真木にも確認した上で隣席と同じインドカレーのコース料理を2人分オーダーした。

真木は滞在最終日の朝、目覚めるとホテルの朝食を取りに1階の食堂へ足を運んだ。よくいえばビュッフェ形式、悪く言えば作り置きの状態だが、日本と同じサービスレベルを求めるほうが間違っている。それよりも、ただでさえ頭の回らない寝起きに慣れない英語で話しかけられる

より、” Good morning”、” boiled egg & coffee” くらいの英語とアイコンタクトでやり過ごせられるのが頃良い感じだ。野菜とソーセージ、ビーフンのようなものを皿にとり黙々と食事していると、山口が「おはようございます。ここいいですか？」と相席を求めてきた。「おはようございます、どうぞ」と真木は席に座るよう促した。

「二泊三日ですが、今日で最終日です。皆さんはタイ、ベトナムからここバングラデシュでお疲れなんじゃないですか？」

「いえ、そうでもないですよ。私は入社以来はじめての海外出張なのでかなり刺激を受けています。失礼ながら思ったよりも開発が進んでいる印象です」

「そうですね、昨日は上水道施設とバイオガス化施設をご案内しましたし、初めて来られる人からすると『何だ、結構進んでいるじゃないか』と表向きはそう見えるのかもしれませんが、今回ご案内していない地方部にはまだまだインフラ整備が必要ですし、首都ダッカですら実態として課題が山積んでいます。今日はその辺りも見ていただければと思っています」

「ところで山口さんは日本人のエンジニアとお聞きしましたが、会社組織には属していないんですか？」

「私ですか。実は元々はジャパンエンジニアリングの社員でした。それがひよんなことからバングラデシュの上下水道公社の開発案件に携わることになり、当地への駐在が決まりました。そこからは縁でしょうか。なかなか離れがたくなり、今からちょうど1年前にジャパンエンジニアリングを辞める決断をしました。今はSADAという国際NGOに籍を置かせてもらって、今回の視察団のアテンドなど好きなことをやりながら、生計を立てています」

「どうして、そこまでしてバングラデシュにこだわるんですか？」

「この国にお世話になっている間に本当によくしてもらいましたからね。経済成長し尽くして自身の地位にあぐらをかいている日本に居座るより、この国にいるほうが人間として社会に役立てるような気がしたんです、青臭い考えですが」

「いえ、とても立派な決断だと思います。なかなかできることじゃないですよ」

山口はナイフとフォークを置き、目を見開いて真木の話に聞き入った。

「今日の視察を迎える前に真木さんにだけはっきりと申し上げます。バングラデシュには東洋のような大企業が手を出せるような市場はまだありません。東洋仕様じゃ、まずもってコストが見

合わないのです。当国には当国の事情に応じた相応の力があるエンジニアリング企業があります。低コストでそこそこの技術レベルを有しています。クライアントもその品質で満足しているんです。もし可能性があるとするればそれら企業との業務提携ですが、give & takeが成り立つかどうか疑問です。悪いことは言いません、バングラデシュでビジネスができるのはまだかなり先の話だと思ってください。私はそれよりも、首都ダッカの町の不衛生や全国的に見た環境インフラの未整備等の課題を解決していきたいと思っています。日本の大企業で営利追求する限りは看過しがちだと思いますが。真木さんはその点を見過ごさないでくださいね」

そう言い終わると、山口は残ったスープをささっと喉に流し込み、「まずい、朝から話し込んで済みません、なんだか真木さんなら話を聞いてもらえるような、話しておくべきような気がして、つい……。では、後ほどロビー前に車を回しておきますのでチェックアウトをよろしくお願いします」と真木に言い残し、慌ただしく食堂を後にした。

タイ、ベトナムでは東洋の支社駐在者とも会食し、今後の事業展開について十分な協議ができた。しかし、東洋がまだ支社も駐在事務所も持たないバングラデシュではやはりビジネスの芽はまだないのであろうか。真木は山口の話の消化しきれないまま、残った食事を急いで片付け、コーヒーを啜った。

10時のチェックアウト時間を迎え、ホテルのロビーはチェックアウトの行列ができていた。真木は「最後でいいや」とロビーのソファに座り、新聞を手にとったが英語とベンガル語だらけでどうも頭に入ってこない。「まったく英語くらい、もっとしっかり勉強しておくべきだったなあ……」と思っていると、山口が姿を現した。

「真木さん、余裕ですね。もうすぐ出発しますよ」

「といってもこの行列がなんとかならないと。時間ギリギリってところでしょうね」

「今日の視察後、多分ドタバタだと思いますので、今のうちにこれを渡しておきます。何かあったら遠慮なくご連絡ください」

山口はそう言って真木に一枚の名刺を差し出した。

「SADAって、朝食のときの……」

「ええ、私が今所属している国際NGOです。東洋がバングラデシュで事業するのかどうか分かりませんが、何らかアドバイスはできると思いますし、各方面にも繋げると思います」

「何から何までありがとうございます」

「いえ、この国が少しでも良い方向に向かうなら」

「同じ質問を繰り返しますけど何故そこまで？」

「長く暮らすと分かると思いますよ。この国の国民は世界一素晴らしい国民性を有しています。日本にいるより数倍住み心地がいい。ただ、それだけの理由です」

山口はそう言って笑うと車のほうに戻り、荷物の積み込みを始めた。真木もチェックアウトの行列に並ぶべく荷物を手に取った。

バンングラデシュ視察第2日目が始まった。

「皆様おはようございます。本日は19時半のフライトまで既に10時間といったところなので、ダッカ市内でいくつかお見せしたいところをご紹介しますと思います。昨日もご説明しましたが、バンングラデシュはその経済発展レベルに見合わないほどに都市化が進展しています。同国経済はここ30年程度の間大きく変化しました。GDPの中でも農業セクターの雇用率が減少し、工業部門が増加、そしてサービス部門が激増しています。ただし、このサービス部門の伸びはいわゆるインフォーマルセクター、例えば右に見えるようなゴミからの資源回収や解体工事現場でのレンガ砕きなどといった生産性の低い種類のサービス産業が主体となっています」

車の窓ガラスから覗くと、ゴミの集積場があり、子供から老人までゴミをかき分けながら空き缶などの資源を回収している様子が見える。

「日本だったら選別ラインを入れれば一発だけどな」

「廃棄物の集積が仮にうまくいき、リサイクル工場を建設して動脈と静脈を好循環させたとしても、結果としてそれがバンングラデシュ国民の仕事を奪うことに繋がるんです。安易な機械化は貧富格差の拡大に繋がりがねません」

そういうと山口は運転手に車を出すように促した。車を取り囲む物乞い達が慌てて車から離れさる。他の新興国と変わらない発展を見せるダッカの中心地とは異なり、同じダッカにも関わらず途上国の爪痕があちこちに残っている。

「水・電力供給、下水排水網、交通網、公共輸送、下水処理施設といった都市環境インフラとサービスが不十分な一方で、公共用水域へのゴミの投棄、未処理廃水の垂れ流しが横行しています

」

山口がある工場で停車するよう運転手に指示した。

「ここはバングラデシュで1, 2番を争う繊維会社の工場です。このように表向きは立派な建物ですが、廃水については先ほど申した通りです。同社の経営者に事前に説明して、その辺も説明したださるよう事前に依頼してあります」

一行が車から下車すると、出迎えの社員が3名でそれぞれアテンドした。まず一行は応接室に通され、同社の経営幹部と思しき薄毛で彫りの深い顔をした男性から事業概要を伝えるプレゼンを受けた。説明によると、日本をはじめ欧米各国からの注文生産で肌着からシャツ、ニット、ジーンズ等、幅広く生産しているようだ。また、環境負荷の削減にも精力的で、廃棄物等からのバイオガス回収にも取り組んでいるらしい。

「工場見学させてくださるそうです。皆さん、ではShahadatさんの後について行ってください」

真木らが見たのは「女工哀史」、「あゝ野麦峠」を思わせるような労働収奪型産業の様子ではなかったが、まさに労働集約型作業の典型といった形で一糸乱れず働く男性、女性の姿があった。

。

「思ったよりは効率的な製造ラインですね」

「彼ら一日何時間働いていると思います。シフトという概念が日本ほど進んでいませんし、彼らもできるだけ稼ぎたいという意思がありますから、彼らの平均労働時間は1日15~20時間くらいじゃないでしょうか。バングラデシュでは日本の労働基準監督署のような組織も整備されていませんしね」

続いて、同社が誇るバイオガス化設備の見学に入った。

「おー、結構立派な設備が入ってるじゃないですか」

「主には、周辺地域から受け入れている食品廃棄物や家畜糞尿、それに社員食堂の残渣などを原料バイオマスとしています。これにより得られるバイオガスから電力を得て、紡績工程や屋内照明の動力源の一部としています」

「ちなみにメタン発酵廃液はどこに行っているんですか？」

真木がそう尋ねると、担当者が口籠った。山口が担当者と隅のほうで交渉している模様だ。そ

のやりとりが数分続いた後、山口が一行の前に帰ってきた。

「ついてきてください」

担当者が無言を貫いたまま工場の裏側に皆を案内した。

「狭いから気を付けてくださいね」

山口にそう言われながら、担当者、山口、視察団一行の順に工場の周囲に1.5mほどある通路を歩いて行く。工場はどす黒い色をした川に囲まれている。

「ここです」

担当者が立ち止まり、指を差した。その先には赤とも青とも黄色ともつかぬ色をした排水が工場周囲の川に放水されていた。

「これがバングラデシュの現状です。同社のようなリーディングカンパニーですら、まだこのレベルなのです。逆に言うと彼らが廃水処理にコストをかけず、安い人件費で労働している分、日本をはじめとした先進国企業が潤っているとも言えます」

「技術で解決できるのならこんな問題は大きなことはないのだが、そういう簡単な事情じゃないということですね」

亜細亜化工の友近が山口に尋ねる。

「その通りです。グローバル経済になっている昨今、こうした問題はバングラデシュ固有の問題というよりは世界経済全体の課題と言っても過言ではないでしょう。環境森林省も規制強化に動いていますが、環境問題というよりは環境経済問題ともいべき社会問題なので解決はそう容易ではないと思います。JICAのような機関も公共セクターだけでなく、こうした民間企業の支援も視野に入れて活動する必要があると個人的には思っています」

この後も、山口は医療系廃棄物、産業廃棄物、有害廃棄物、電子系廃棄物等がごちゃ混ぜに集積された現場などに車を回した。

「まだこのようにゴミを一箇所に集約しなければという意思が働いているところはマシなんです。市街地には平気でゴミが捨てられています。私が日本などから渡航者を受け入れる際に最初によく言われるのは『なんか腐臭がする』という一言です。私はもう慣れたというか既に無感覚で

すが、都市全体を覆う空気がダッカという都市の闇を象徴しているように感じます。さて17時になりました。そろそろ車を空港に向かわせます」

視察団一行を乗せた2台の車がシャージャラル国際空港に到着した。運転手と山口が荷卸しし、皆それぞれに受け取りながら「ありがとう」、「Thank you.」と声をかける。山口は「皆さん、忘れ物ありませんね。今回はどうもありがとうございました。短期間ではありますが、バングラデシュの国情をある程度知っていただけたかと思います。また、バングラデシュにいらっしゃるときには是非一声かけてください」と全員に謝辞を述べ、搭乗手続きに向かうよう皆を促した。

「山口さん」

真木は皆を見送る山口に声をかけた。

「あ、真木さん、いかがでしたか。バングラデシュ？ 都市化と開発途上とが混在した複雑な町の様子を見ていただけたかと思います」

「本当に。無職の浮浪者のような人も普通に携帯持ってますし、ダッカの中心部の賑わいは想像を遥かに超えるものでした。その一方で、環境汚染や労働収奪は日本における経済成長の負の時代を見るようでしたね。平成と昭和が混在したような不思議な気持ちが渦巻いています」

「また何かあったらご連絡ください。まだあなたに伝えたいことがたくさんあります」

「はい、必ず。近いうちにご連絡します。ありがとうございました。それじゃまた！」

真木は山口に手を振りながら、スーツケースをひきながら、一足先に出国ゲートに向かった西山を追った。

「真木くん、お疲れ様」

西山と真木はトランジットのチャンギ空港へ向かう飛行機の中で祝杯を上げた。

「タイ、ベトナム、バングラデシュ、三者三様だったが、やはり書籍やWeb情報で知るより現地で見聞きするのが一番だな」

「そうですね、本当に勉強になりました。今回はありがとうございました」

「真木くんに渡航機会を与えた丸田さんが今頃日本で地団駄踏んでるんじゃないか？」

「いえ、そんなことはないと思いますが。部員の成長も上司の手柄ですし」

「真木くんも変わったよな」

「そうですか？」

「入社一年目の頃を思い出してみな。例の消化促進試験。私や門田くんに言われるままに実験してたろ。もっと、自主性を持って研究所のフェライト化研究グループと協同したり、MOU締結先の帝都大学を活用したり、いろんな期待をかけていたものだよ。ただ、あのときは入社1年目だったもんな。今は入社……」

「7年目になります」

「随分積極的に自分から動くようになったな。今回の出張報告書は一任するよ。あれだけ食い付いて質問していたんだから、君のほうが正確なレポートを書けるはずだ」

「西山さん、そこでご相談が」

「何だね？」

「往路のフライトで私に『そろそろ脱皮すべきときだと思ふ』と仰っておられましたよね」

「ああ、そんなことも言ったよな。それで今回の出張であんなに頑張っていたのか？」

「いえ、そうじゃなくて、今回の出張で自分がやるべきことを見付けたような気がするんです」

「ほう、例えばどんなことだい？」

「日本の環境を守るより、地球人としてもっとやるべきことがあると、今真剣にそう思っています。タイ、ベトナムには当社の支社があり、同国の発展にも一定の貢献ができていると思います。しかし、バングラデシュには当社の拠点がありません。しかし、解決すべき課題は山ほどあることが分かりました」

「海外に拠点を置くのはそれに見合う事業機会がそこにあるからだからな。バングラデシュはまだ早いというのが現時点の当社の判断だ」

「そこでご相談なんです。もちろん支社とは言いません。駐在事務所を置かせていただきたいのです。経済成長と環境悪化、貧富の差拡大が同時進行するバングラデシュの姿をリアルに目に焼き付けつつ、この国の持続的発展に当社として役立ちたいのです」

「駐在事務所ねえ……。まあ、うちのグループの商社に言えばオフィススペースの用意などいくらかでも手を貸してくれると思うが、一体誰を派遣するというんだね」

「もちろん私です。今回視察をアテンドしてくれた山口さんにアドバイザーとして入ってもらい、JICAの上下水道、廃棄物処理案件のFSなどから着手したいと考えています」

西山は真木の訴えをそう易々と受け入れる訳にも行かず、どう説得したものか思案した。

「真木くん、これは私の個人的な思いだが、今ウチから君を出す訳には行かないだろう。技術企画部もエンジニア上がりの高齢者ばかりで丸田部長も手駒がなく困っていらっしやる。君という戦力を失う訳には部としても社としてもいかないんだよ」

「そこを何とかお願いします」

「これは帰国して丸田さんと相談だな……」

西山と真木はしばらく無言を貫いた。二人を乗せた飛行機の窓外から見える翼は太陽の光を受け白銀色に輝きを放ち、力強く飛び立っている最中だった。真木もあのような翼を持ち、羽ばたきたいと思いながら瞼を閉じた。

無事帰国した真木は翌朝早々に出社し、バングラデシュみやげのマンゴーバーを配りながら、部員の年配者から「どうだった『海外旅行』は？」などと冷やかされていた。

「ですから、『海外出張』ですって。すっごく勉強になりました。田崎さんも次は是非！」

「いやあ、俺は欧米オンリーだから。あとシンガポールなら引き受けるぜ」などと軽口を叩く年配社員達を横目に真木は丸田部長に「今回の出張、大変勉強になりました。つきましては西山部長にもご同席いただき、出張報告させてください」と告げた。「何も西山君まで一緒じゃなくていいだろう」という丸田に「西山さんが是非」と仰ってますと返し、翌日朝一の日程を抑えた。

「そうか、タイ、マレーシアは順調か」

「最近では日本や欧米だけでなく中国からの投資も増えていますからね。もみ殻などを利用したバイオマス発電など再生可能エネルギー絡みの引き合い案件が多く、現地法人の皆さんも嬉しい悲鳴を上げていました。我々が競争を勝ち抜いて行くためには、各国の状況に応じた技術導入が必要になります」

「本社もますます支援していかなければならないな。海外比率を高めていくことも重要だし、各国の実情に応じた商品開発や海外人材の育成も急務だ」

打合せスペースで丸田と西山が東南アジア談義に明け暮れるのに同席した真木は「海外人材の育成」という言葉に敏感に反応した。

「それに引き替え、バングラデシュはインフラも人材もこれからという印象でした」

真木は丸田と西山との会話の間に割って入った。

「バングラデシュも首都ダッカを中心とした経済発展が盛んで、日本からもJICAやJBICの投資が目白押しと言うじゃないか」

「都市化の速度に付いて行けず、いろんなところに歪みがでています。今回の視察でも、ゴミ処理施設の整備が追い付かず、工場には排水処理設備がなく公共水域に垂れ流し、そんな中に上下水道処理施設や再生可能エネルギー設備が整備されたりと、誰の目から見てもアンバランスな形で成長が進んでいました」

「西山くんの目から見て、当社にビジネスチャンスはあるかね？」

「そうですね、確かに経済発展が著しく、インフラ整備も真ただ中ですが、当社が乗り出すとなると、それなりのリスクも伴いそうです」

「リスク？」

「はい、JICA（国際協力機構）やJBIC（国際協力銀行）、WB（世界銀行）、ADB（アジア開発銀行）等の案件は多々あり筋もよいですが、コンサルやエンジニアリングをするには現地企業を活用する必要があります。しかし、政府機関をはじめ民間企業も技術移転を見据えたキャパシティビルディングが必要です。タイ、マレーシアのような状態までバングラデシュが辿り着くには少なくとも5年から10年は必要かと」

「なるほど、確かにタイやマレーシアでも今の状態まで来るのに結構な年月を要したな。当社にもエンジニアを受け入れたり、それなりの投資をしてきてようやく今があるという状況だ。バングラデシュについても今の段階から投資するタイミングにあるかということところだな」

真木は丸田の発言を受けて西山と目を見合わせた。

「丸田部長、私から提案があります」

真木は身を乗り出して話を切り出した。

「わずか数日の滞在では投資に値するかどうか、何とも判断が付きません。ここは、支社とは申しませんが、現地事務所を構えてみてはいかがでしょうか？」

真木の唐突な提案に丸田は躊躇いながら、「君はそう簡単に言うが、バングラデシュ政府とのパイプを持ち、かつ市場を見極められるような人材はウチにはそうはいない。西山君の部署にも進んで獣道に行くと言う輩はいないだろう」

「彼は自分が行くと言っています、一人で」

「真木くんが！？ バカな。当社代表というより日本代表として行く訳だぞ。企画畑でようやく腰が据わってきたばかりの君にそんな大役が務まると思うのかね」

「丸田さん、そう鼻から否定しないでやってください。彼の決意は本物です。あと、ジャパニエ

エンジニアリングでエンジニアをやっていたという青年が現地で幅広く活動しています。もうかれこれ4, 5年バングラデシュにいるとか。今回の視察も彼がすべてアテンドしてくれました。その彼が全面的に協力してくれると言っています」

「しかしだなあ、ウチはどうなるんだ。技術企画部は」

「真木くんがいる横でなんですが、うちでくすぶっている中堅がいます。技術自体は幅広く知っていますので、真木くんがもしいなくなるようでしたら是非後任にと思っています」

「友永くんか？」

西山は苦笑いしながら首を縦に振った。

「彼くらいの知識と若さがあれば助かるな。まあ、真木くんとセットでウチで頑張ってくれるのが一番好都合なんだが」

「もし仮にバングラデシュに現地事務所を構えることになったら、企画、開発、設計の各部署との接点は更に増すと思われます。一人では窓口しかこなせませんので。なんとかバングラデシュの持続的な発展に貢献したいんです。丸田さんと西山さんの後押しを是非ともよろしくお願いします」

「まあ、こればかりは経営陣が決めることだ。宮津さんには私からインプットしておこう。とにかく早めに出張報告をまとめてくれ。君の意向は了解した」

「ありがとうございます！」

「真木くんも丸田さんの下について随分変わったようですね」

「そんなこともないさ。君が出張中に何か彼に吹き込んだんじゃないか？」

「また御冗談を。私を悪者にするんですか。確かに3年前に真木くんを受け入れてくださった恩義は感じています。おかげさまで彼も自分の道を自身で決めるような肝が据わってきました」

「普段は人のことを褒めない西山君が君のことを褒めているぞ、真木くん。随分と買われたもんだな」

バングラデシュ駐在事務所の件は当面単年、真木1名の派遣ということで経営会議で承認された。現地事務所は系列グループのオフィスが入っている首都ダッカの中心地にあるビルの一室をうまく手当してもらった。オフィス環境は、真木から山口に依頼し、一通り必要になりそうなOA類一式を現地で調達してもらった。

渡航を翌週に控えた金曜日の夜、技術企画部と商品開発部との合同で壮行会が行われた。

「真木くん、いよいよだな」

「はい、片道切符の気持ちで頑張ってきます！」

隣席に座った西山の期待を感じつつ、真木は力強くジョークを込めて返事をした。

「えー、それでは我が技術企画部のエース真木くんがバングラデシュ市場の開拓に単身で乗り込みます。当部としては惜しい人材流出ですが、これを契機に途上国への展開を加速する好機と捉えて、盛大に彼を送り出しましょう。では真木くんから一言」

丸田からの身に余る言葉を受け、真木は思わず涙腺が緩んだ。

「今日はこのような盛大な会を開いてくださりありがとうございます。技術企画部に来て3年。この場にお集まりいただいた商品開発部の皆様も含め、本当に6年余り、成長させていただきました。思い起こせばうまく行かないことのほうが多かったようにも思いますが、それもこれも皆自分自身の成長に繋がっていると思います。バングラデシュの自身の全力を注ぎたいと思ったのは確信に近い直感です。成長と破綻の両方の可能性を兼ね備えた危うい国家基盤にある彼の国に、自分の持ちうる知識や技術を総動員して貢献したいと考える次第です。やるべきことは山積みですが、何一つやれないかもしれませんし、大きな前進を果たす可能性もあると思います。すべてが未知数ですが、それも当社に入社したときと同じです。挑戦心を忘れず、無謀と評されようとやるだけのことはやってくる所存です。バングラデシュにいらっしゃる際にはご連絡を。最上級のもてなしで大歓迎いたします」

会場から万雷の拍手が響き渡った。

「真木さんがバングラデシュですかあ。遠心脱水機を回してた頃が懐かしいですね」

落合がビールを片手に真木のところにやってきた。

「おー、落合！ 本当にあの頃は本当に世話になったね。君の技術開発にかける情熱にはたくさん学ばせてもらったよ」

「いえいえ、お互い様ですよ。本当に対照的にタイプが違う二人じゃないですか、ボク達。だからあの開発がうまく行ったように思うんです」

落合が顔を赤らめてすっかり語りモードだ。今ではまったく異なる環境の二人だが、同じ困難を共に解決した同志だけに気心は知れている。

「おいおいおい、アンタ、大事な人に挨拶がないんじゃないの!？」

すっかり酔っ払った古瀬が真木と落合の会話の間に入ってきた。

「あー、古瀬さん。すみません、すみません。後ほど伺おうと思ってたんです、ホントです」

「嘘ばっか言ってんじゃねえよ。それにおせーんだよ。決まったことは報告する、これ社会人としての基本だろ。ったく、何年ウチの会社に世話になってんだか。先輩として恥ずかしいね、あたしゃ!」

「ひどい絡みようですね、大丈夫っすか、真木さん」

「いや、まあこういうキャラなんだよ、この人は……」

古瀬に聞こえないように小声で真木と落合がやり取りすると、「また何ごちゃごちゃ言ってる。隠し事してんじゃねえぞ、お前ら。男の友情とか見せびらかしやがって、うざってーんだよ、こちとら女だつてえの。悪かったね、男じゃなくて!」と古瀬が更に真木らに絡み始めた。

「いや、だからそういうんじゃないんですって。もう……」

「真木さん、ボク席譲りますよ、古瀬さんに。とにかく向こうに行っても頑張ってくださいね。超高効率遠心脱水機開発の御礼はいつか必ずします!」

「ああ、ありがとう。もっとすげえ開発して俺のことビックリさせてくれたらそれでいいから。お互い頑張ろうな」

ジョッキを高く掲げ、乾杯の格好をとった形で落合が脇のほうの席に退いた。もともと落合が

いた席に古瀬がどかと座った。

「で、アンタどこ行くの？」

「だからバングラデシュですって」

「バングラデシュってどこよ？」

「南アジアです。インドの東側のほうにあって、ミャンマーとも接しています。飛行機でざっと10時間くらいです。直行便はないですが、なんてことはないですよ」

「本当か？」

「は？」

「だから大したことないって本当か、って聞いてんの」

「あ、ああ、本当ですよ。国民性もいいし、親日国だし、とてもいい国です」

「あっそ。よかった。じゃあ遊びにいこ」

そう言うと古瀬は突っ伏して寝てしまった。「なんだよ、まったく最後の最後まで人騒がせな人だなあ」と思いながら、真木はスーツのジャケットで古瀬の背中を覆った。夢の中に沈んだ古瀬の表情はどこまでも穏やかに見えた。真木はそんな古瀬を微笑ましく見守った。

翌週の月曜日、真木は会社の挨拶周りに奔走した。社長からは「無理は禁物。撤退も選択肢のひとつ。いつでも出直せるから、とにかく一步踏み出してきなさい」と暖かい言葉をいただいた。宮津は「いいか、泥はなくなるからな。ゴミも一緒だ。そこさえ分かっていたら日本だろうがバングラデシュだろうが関係ない。絶対に成功させてこい！」と相変わらずの雄弁ぶりだった。西山からは「ここが君の人生のターニングポイントになるかもな。私は君のような生き方はできないからこれ以上のサポートは難しい。後は自分自身で道なき道を切り拓いてほしい。検討を祈る！」とエールを送られた。最後に丸田はじめ技術企画部員への挨拶を終え、遂に本社を後にした。すべてがリセットされた瞬間だった。

翌朝、真木は重いスーツケースを引きずって成田エクスプレスに乗り込んだ。窓外の緑に目を遣りながらこの日本の風景も当分見ることはないんだな、と思うとちょっと切ない気分になった。せっかくだから電話だけじゃなく両親のもとに顔を出しておくべきだったかなと今更ながら思ったが、変に里心がついても困るのでこのまま突っ切るのが正解だと思い直し、今日からの日々に思いを馳せた。

——どうやって暮らして行こう……

会社から給料は出るので金の心配はない。衣食住にせよ何とかなるだろう。いざとなれば山口がいる。養う家族もいないので、そういった心配もない。問題は仕事だ。まさにゼロからの出発。見知らぬ土地で見知らぬ人と俺は一体何を創り出すのだろう。思いを馳せ、勝手気ままにアイデアを出すだけなら誰にでもできる。しかし、リアルに当地で暮らしていく、当地の社会をより良い方向に改善していくなどと思うと気が遠くなるほど先が長く感じるのだ。

そんなこんなを考えている間に成田空港に到着した。出国手続きを済ませ、荷物を預けると身軽になった。新人時代の東京への引っ越しのときですら部屋いっぱいの荷物だったのに、今や海外へ移住するにもスーツケース1つだ。人というのは変わるものだなあ、などと思いながら、書店や免税店で時間を潰す。そしてフライトの時刻が迫り、真木が乗り込んだ飛行機は勢いよく飛び立った。いよいよ未知の人生が始まる！

「真木さん、こっちです。こっち！」

山口が笑顔で手を振っている。

「山口さん、これからお世話になります。諸々の準備ありがとうございました！」

山口は嬉しそうな表情で真木から荷物を手に取り、車の運転手に渡した。

「彼がドライバーのShohagです。私がいなくても彼に言えばいつでも送迎してくれます、オンオフ関係なく。” Shohag, He is Maki-san”」

「コンニチハ、マキサン」

「真木です、よろしく」

「彼は日本語はできないんで、会話は英語でお願いしますね。私もバングラに初めて来た頃に世話になったんですが、ベンガル語も英語もできるし、何より仕事熱心で、雇い主に対する忠誠心が強いです。彼は信頼に値します」

真木は典型的なベンガル人という風貌、細身で髭を蓄えた30歳前後と思しきShohagを見遣った。

「とりあえず、今日からの住処に行きましょう。メールでお伝えしたとおり、ボナニ地区のアパートメントです。家具付きなので、大した手間なく生活しはじめられると思います。” Shohag, Please go to his apartment.”」

山口がそう言うとShohagは無言で運転席に乗り込み、山口と真木もそれに続いて後部座席に座った。

「割と無口なんですよ、彼。でもじき分かりますが、交通渋滞やなんやかんやで彼と車の中に閉じ込められることが多くなりますから、ドライバーを雇うなら物静かな方がいいです、私と違って」

山口は運転席のルームミラーでShohagの顔色を窺いながら、笑顔で真木にそう言った。

「ふーん、そういうものなんですね」

案内された先は、自動車や『リキシャ』（日本でいうところの人力車）や多くの人波でごった返すグルシヤンのオフィス街にも程近い割に落ち着いた雰囲気のところだった。車の往来も比較的少なく、見た感じ安全そうに思える。

「なんだか落ち着いた、いい雰囲気のところですね」

「この辺は外国人の駐在員からは人気が高いんです。よくこのタイミングでこの部屋が空いていたと思いますよ。スーパーもすぐ近くにありますが、治安も比較的よいほうだと思います。オフィスのあるダンモンディへはホッタールを避ければ30分もあれば到着します」

「ホッタール？」

「野党の政治活動のことです。デモやストライキを伴い、参加者が暴徒化することもあるので危険です。交通も麻痺します。その辺はShohagがうまくかわしてくれるはずです。現地人の嗅覚には敵いません」

車を降りて周囲を見渡しながらか、山口と真木はこれから新生活を始めるアパートメントを眺めながら、気を引き締めた。Shohagは車のトランクからスーツケースを下ろすと、二人の先を歩き、アパートメントの3階の一室に運び入れた。

“So, is everything OK?”

“Sure. Thank you so much.”

“See you later.”

英語で簡単な会話を交わすと、Shohagは手ぶらで階段を降りて行った。

「働き者ですね、彼」

「真木さんのバングラでの足ですからね、本当に遠慮せず何でも彼に頼ってください」

「ありがとうございます」

「調度類も揃ってますし、室内はこんな感じで既に生活できる環境になっています。落ち着いたら周囲を散歩がてら散策しましょうか」

真木は室内を事細かにチェックすると、スーツケースの荷物を出し、生活用品を室内に整えた。ざっと1時間でその作業を終えると、山口の案内でアパートメントの周辺を散策し、食品等の調達場所などを確認して回った。

「じゃ、ボクはこれで帰ります。また明日迎えに来ます」

山口はそう言って、手近に停まっていたCNG車（天然ガスで走るオート三輪）に乗り込んだ。

「山口さんは随分現地生活が板に付いているもんだな」

真木は感心しながら山口が乗ったCNGの後ろ姿を見遣った。一人、ボナニ地区のアパートメントの前に立ち尽くし、本当に知らない異国の地に一人で生活することの大変さを徐々に感じつつあった。

翌日はダッカのダンモンディにある新オフィスに初出勤した。15階建ての商業ビルの8階の一角にある六畳一間が東洋テクノロジーのバングラデシュ駐在事務所だ。既に山口の手配でデスク2台と打合せ用テーブル、PC類がセットされている。

「何から何までありがとうございます」

真木は既に整備された新オフィスに感心しながら、山口に謝意を伝えた。

「一応、私も囑託ながら東洋の社員にしていただきましたから当然ですよ。それより見た目は整っていますが、日本オフィスとの通信環境などのセッティングはさすがにまだです。その辺を一気に片付けましょう」

「午後は挨拶廻りでしたよね。何とか午前中に片付けばいいのですが。あ、そうそう忘れてた。これ、山口さんの名刺」

「ありがとうございます。まあ、私もなんだかんだで名刺が既に3、4枚あって、組織に縛られることなく個人で仕事してるんですけどね」

そういうことをさらっと口にする山口が真木には羨ましく、また格好よかった。

昼までに二人がかりで何とかオフィス環境をそれなりに整え、オフィスビルを出て数分歩いたところにある店でジャンクフードを昼食代わりにしながら、午後の予定の確認をする。

「まずはJICAの現地事務所に挨拶に行って、その後にインフラ開発公社に顔を出してみましよう。JICAは日本語が通じるから楽ですけど、インフラ開発公社は全部英語ですよ。頑張りましょう！」

「今は山口さんがいてくれるから鬼に金棒ですよ。本当に一人でのスタートアップだったら、とてもこうは行かないです」

「バングラにいと一事が万事こういう感じですよ。国民性がいいですし、特に親日国というのが大きいです。もう丸4年、バングラにいますが、日本人だからということで嫌な思いをしたことは一度もありません」

「その辺りが山口さんがバングラに居座ってる理由ですか？」

そう尋ねると山口は意味深な笑みを浮かべ、「まあそんなところでしょうか」と答えた。

JICAのバングラデシュ事務所では2名の駐在員が迎えてくれた。

「遂に東洋テクノロジーさんもバングラデシュ進出ですね。頼もしい限りです。バングラデシュにもエンジニアリング会社はありますが、日本とは技術レベルが遥かに違います。当JICAはじめ世銀、アジ銀からも積極投資がなされています。是非、日本の環境技術をバングラデシュにも普及させてほしいと思います」

「一方で、日本のハイスペックな技術をどうバングラデシュの市場に合わせていくかという課題もあります。当社もこれまでタイ、インドネシア、マレーシアなどに拠点を設け、市場を開拓してきましたが、ことごとくその課題にぶつかってきました」

「その辺の御経験もある東洋さんだからこそ期待している部分もあります。今までもいろんな企業がバングラ市場参入を目指して参入を試みましたが、ことごとく撤退していきました。ただ、当時よりも今は法整備も進み、経済的にも条件は整っています。今、東洋さんが駐在事務所を置かれたのは好判断だったと思いますよ」

「いずれにせよ、JICAさんの開発案件には当社も是非関わらせてください。FSでも何でもやれる部分から対応させていただきたく存じます」

真木はJICAの担当2名と握手を交わし、JICAオフィスを後にした。

「思いの外、歓迎していただいているようですね」

「最初に大見得を切っておいて、『ビジネスにならない』と撤退した企業がこここのところ相次ぎましたからね。私も日本人として恥ずかしかったですよ。私が東洋さんに肩入れしているのは、そういう背景があった上での日本人としての贖罪という意味合いもあるんです」

「それは？ どういう意味ですか？」

「日本人がベンガル人を裏切るのを見るのはこりごりなんです。東洋さんには日本企業としての責任を是非果たしてほしいんです」

山口の熱い思いを耳にし、想像以上に重いものを背負っていることに真木は今更ながら気付いていた。

続いて訪れたインフラ開発公社では、各デスクを廻りながら英語の達者な山口が真木を紹介した。山口はインフラ開発公社でも顔が売れているようで、高官から受付の男性までほぼ一人残らず真木を紹介してくれた。

「今度一人で訪ねることがあったら、私の名前を使っていただいて構いませんよ。『山口の同僚』といえば、皆悪いようにはしないですから」

「山口さんはどうやってこの国の人達と、こんなに深い信頼関係を築いたんですか？」

「さあ……。まあ、要は骨を埋める覚悟の有無を彼らは見極めているというところでしょうか」

そう言うと路上で買ったヤシの実のジュースを山口は真木に手渡した。

「うまいですよ、それ」

ヤシの実に穴を空けてストローを突っ込んだだけのシンプルな売り物だが、このほのかな甘みのある喉越しのいい爽やかな飲み口が心地よい。

「なんかいいですね、こういうの。バングラに住んでるって感じがして」

「私はもう生活の一部になっちゃってますけどね。真木さんもじき慣れますよ」

ヤシの実ジュースを飲み干して殻を出店のゴミ箱に捨てると、ちょうどShohagが車を回してきた。ボナニ地区にある山口のアパートメントに車を回し、荷物を部屋に置いた後、近場のタイレストランに向かった。

「真木さん、まずは2日間どうですか」

「思いの外スムーズに進んで安心している気持ちと、なかなか仕事に入れないもどかしさと双方ですね」

「まあ、慌てないことですよ。今仕事が入っても真木さん一人じゃ何もできません。パートナーを見付けないと。明日はボクが以前世話になった現地のコンサルタントを紹介します。彼らの協力が得られれば仕事も取りに行きやすいですし、彼らも東洋さんなら歓迎するはずですよ。時差が3時間ありますから、食事を終えたら日本の上司に一報入れておくといいですよ。早速JICAとインフラ開発公社に挨拶回りしたと言えば安心するでしょう。」

「そうですね。そうします」

山口は店の入口の扉を押して指で「二人」を意味するVサインを出した。店員がOKと言うのを確認して、「真木さん、入りましょう」と言って中へ促した。

タイ料理を味わいながら、山口と真木はこれからの日々について思いを巡らせた。山口は想像以上に東洋に、いや、真木に期待をかけていた。真木の何に期待しているのかは分からなかったが、彼の直感がそうさせているのだと信じて、まずは山口に着いて行こうと真木は腹を括った。

「そうか、それはよかった。その声の感じだと元気そうだな」

「はい、この調子で毎日前進できるといいんですが」

「早く具体的な案件を取って成果を出したいところだろうが、今は種まきのほうが大事だ。辛抱だよ」

「はい、わかりました。また、折に触れ連絡します」

真木は電話を切るとアパートメントのベッドに寝そべり、天井を見上げた。

「なんか、前に進んでいそうで何も進んでなさそうで変な感じだな」

真木はそう呟いて起きるとベッドに腰掛ける形になり、TVのリモコンのスイッチを押した。不思議と日本が恋しいという気持ちは湧いてこなかったが、自分が何を求めているのか時々不確かになる。TVのニュース番組を消して窓からダツカの町並みを眺める。今自分がここで何をしているのか、何をしようとしているのか、何に向かっているのか、誰もいない中空に向かって心の中で叫んでみる。答えはない。答えは自分自身で見付けるものなのだ。誰かに教えてもらうものではない。

具体的な進展を見せぬまま、3箇月の月日が経った。山口も元々の活動に時間を割かれ、バングラデシュの生活に慣れてきた今では真木一人で行動することも増えてきた。そんなある日のことだった。JICAオフィスから連絡が入った。できれば今日中に会いたいとの申し出で、断る理由もなく、真木は即座に了承した。

JICAの職員佐々木は真木の顔を見ると、「急な申し出ですみません。至急回答を日本本部に返さなくてはならなくて」と頭を掻きながら気忙しそうに話し始めた。

佐々木の話はこういうものだった。JICAからバングラデシュ政府に対して、再生可能エネルギー導入プログラム推進のための資金援助をするという。しかし、メタン発酵や太陽光・太陽熱、灌漑システムなど、技術範囲として幅広く、同国の現地企業の技術力だけでは対応できない。JICAはこのプログラムをまとめ上げられる企業群を探しており、是非東洋に手を挙げてほしいというものだった。

「お願いできますか、真木さん」

真木は話を聞いて思案した。確かにこのプログラムを計画段階から施工段階まで引き受ければ大きなプロジェクトになる。しかし、まだ同国でのプロジェクト経験が浅い東洋がこの規模のプログラムを受けるのはリスクを伴う。おそらく東洋に話が来たのも他のエンジニアリング会社と並行してか、もしくは先行して依頼した会社が急に断ってきたといった経緯があつてのものではなかろうか。

「プロジェクト規模が大きいですね。一駐在員の判断では決められません。持ち帰らせてください。日本本社と至急連絡を取ります」

「いいお返事を期待しています」

真木はJICAオフィスを早々に後にすると、まずは山口に電話した。

「お！ 来ましたか、引き合い案件。しかも、規模が桁違いにでかい。これはチャンスですよ、真木さん」

「しかし、当社ではメタン発酵はともかく、太陽光・太陽熱や灌漑システムは手掛けてないんですよ。どこかのコンサルティング会社の下に入るとか、そういうフォーメーションを組まないと本社のゴーサインがかからないように思うんです」

「真木さん、随分と弱腰ですね。そんなんじゃ異国でのビジネスはやっていけませんよ」

「私だってせっかくの声掛けです。受りたいですよ。ただ、専門外の部分まで責任を持って受けるとなると話が違ってきます」

一呼吸置いて山口がこう切り出した。

「いいでしょう、メタン発酵パートの設計・施工を受けたいんですよ。全体をコーディネートできる会社を探しましょう」

「アテはあるんですか」

「なくはないです。彼らがこの案件を既に何らかの理由で断っていないことを願います。太陽光・太陽熱はソーラーエネルギー、灌漑システムは久保田製作所ですかね。日本勢で提案するとなると」

「オールジャパン連合ですか？」

「JICAの腹が分かりませんか？ これは国対国の争いですよ。日本勢はここ数年撤退企業が出ていますからね、不利ですよ。よほどいい提案をしないと」

なるほど、おそらく当社に時間があまり与えられなかったのは日本企業がただの保険だからなんだろう。既に、他国企業に条件提示しプロポーザルを待っている一方で、そういえばこの間同国に駐在事務所を置いた東洋にも声をかけておこうという程度のものなのだろう。

「なるほど、山口さんの仰ることは分かりました。厳しい戦いですね。で、オーガナイザーはどこに？」

「私のツテといたらジャパンエンジニアリングしかないじゃないですか」

「古巣ですか……。大丈夫ですか」

「大丈夫です。今までも無理を承知で何度かお願いしてきました。今回も名前くらいは貸してくれるでしょう。ただ、事実上のオーガナイザーは東洋さんという覚悟でいてください。じゃないとこの話をご破算です」

山口との電話を終え、オフィスに戻った真木は丸田に電話をした。JICAからの引き合い案件に対し、ジャパンエンジニアリングをプライムとした、東洋、ソーラーエナジー、久保田製作所の連合軍で提案したいという真木からの連絡に、丸田は戸惑い、「それは経営会議マターだなあ」と第一声を放った。

「しかし、ここで引き下がるようではこの先当社に引き合いがなくなる可能性があります」

「ジャパンエンジニアリングや他の企業は大丈夫なのか」

「そのフォーメーションについては至急調整を図ります。まずはプライムになるジャパンエンジニアリングを抑えることが大事です。その下につく会社についてはいくらでも替えが利きます。当社パートも現地のエンジニアリング会社の協力を仰ぎます。技術指導は私ができるので大丈夫です」

「分かった、こっちは東洋社内の調整に入る。そっちはコンソーシアムを早急に取りまとめてくれ」

いよいよ、戦いの火蓋が切って落とされた。とはいえ、企業群を組成しないことには東洋本社に大見得を切った面目が立たない。真木は山口からの連絡を待ちに待った。2日後、山口から待望の連絡が入った。

「真木さん、お待たせしました。ジャパンエンジニアリングの了解を取り付けました。今オフィスの近くにいるので、10分ほどで顔を出します！」

このところ随分忙しそうにしている山口だったが、この数日間はJICA案件の調整に奔走してくれていたのだろう。電話があつてちょうど10分後、山口がオフィスに顔を出した。

「久しぶりです！」

「わざわざどうもありがとうございます。朗報ですね！」

山口は笑顔を少し崩し、「いや、それが朗報というほどのことじゃ……」と言いながら、一枚の名刺を差し出した。

「ジャパンエンジニアリング株式会社 アジア地域担当 山口亮一？」

「最初からちゃんと話しておくべきでしたね……」

山口は視線を落としながら、話を切り出した。

「ボク、まだジャパンエンジニアリングに一応籍があるんです。といつても実態的には大した機能は担っていないんですが。ジャパンエンジニアリングに本件でプライムを取るよう依頼したところ、『お前が自分でやるというのなら名前は貸してやる』と。この交渉に丸2日間かかりました。太陽光・太陽熱はソーラーエネルギー、灌漑システムは久保田製作所に声をかけておきました。ただ、バングラデシュに拠点を持つのは東洋さんだけです」

「要は私と山口さんの2人でこのプロジェクトを回すということですか？」

「そういうことですね。悔しいですが、ジャパンエンジニアリング本社からは『負け戦』ということでリソースを得られませんでした。他の企業もプロジェクト自体には興味はあるが、プロポーザル段階でバングラまで人を送り込むのは無理だそうです」

「厳しい戦いになりそうですね」

山口は「勝算無き戦い」に自分が挑んでいるような不安に一瞬襲われ、その不安をかき消すかのように話題を変えた。

「ところで一体あなたは何者なんですか？」

「便利屋ですよ。どこも私を100%受け止めてくれない。いいとこ取りばかりする。だったらこっちも徹底的に利用してやろう、という魂胆です。どうせ、私の理想なんて誰にも分かりやしないですから……。もし、分かるとしたら……。いえ、何でもないです」

真木は意味深な山口の答えを訝しく思いながら、これは大変なことになったと痛感していた。

翌日から東洋のバングラ駐在事務所に山口と真木は缶詰めになり、JICAへの提出書類を整えた。その足で、JICAバングラデシュ支所を訪ねると、担当官から「威勢のいい書きぶりですが、顔ぶれはいつもと同じですね。まあいいでしょう。よろしくお願いします」と入札参加を認める発言が得られた。応札期限は2週間。限られた時間との戦いとなった。

「ただ単に、仕様通りに施設を収めるだけであれば、バングラデシュでの調達経験がある海外企業のほうに部があります。現地企業を束ねてオーガナイズするだけですからね、コスト面でも太刀打ちできません」

山口の顔からいつもの強気な表情が消えている。

「見えざる敵と戦うというのは気持ち悪いものですね」

「見えてますよ、少なくとも私には！ ただ、打ち手が見付からないんです……」

山口の顔には明らかに焦り、苛立ちが見て取れる。

「ハードにこだわり過ぎなんじゃないですか？ 確かにこの調達仕様書を読めば如何に低コストで品質・効率のいい製品を納める発想に至ると思います。そこで一步下がって、山口さんがかつてアテンドして下さった視察会を思い出してください」

「あのスクラップ回収や不法投棄、廃水の垂れ流しのことですか？」

「そう、いくら国や政府系機関が立派な施設を導入しても、根っ子の部分、社会システムやひいては市民の意識を変えて行かなければ根本的な課題解決には至らないでしょう」

「提案内容に環境政策の立案まで盛り込むと？ 2週間の期限ではそこまで根回し仕切れません」

「いや、もっと簡単なことです。現地の大学等と連携して、セミナーやワークショップを開催しましょう。日本が公害から克服してきた歴史や日本の環境法体系について日本側から紹介するのもいいですし、バングラデシュで頑張っている政府関係者、学識経験者、企業にもその取組をアピールしてほしいです。こういったことの積み重ねがバングラデシュの方々のキャパシティビルディングに繋がっていくのでは？」

山口は滔々と語る真木のアイデアを瞬きもせず聞き入ると、思わず手を叩きながら、「なんだ、この人。すげー、凄すぎる！ ていうかボクの目は節穴ですね。いつからこんなに濁っちゃったんだらう？ その提案乗りました。私もそれで勝負したいです！」と感嘆と賛同の声を上げた。

「そうと決まれば話は早い。メタン発酵は私がまとめるとして、太陽光・太陽熱はソーラーエネルギー、灌漑システムは久保田製作所、キャパシティビルディングは……」

「私がSADAのネットワークでまとめ上げます！」

「よし、綱渡りだけど作業分担と体制は決まった。後は時間との戦いですね！」

その日から二人はオフィスに泊まり込んで不眠不休でプロポーザルを作成する日々が続いた。そして、〆切の前夜を迎えた。もう既に、メタン発酵、太陽光・太陽熱、灌漑システムなパートは出来上がっている。他社との差別化を図るキャパシティビルディングのパートのみ、連携先候補のダッカ大学学長の下承が得られておらず、直談判に行った山口の連絡待ちだ。その間、真木は突貫作業で作成した他パートのチェックをして適宜修正指示していく。今夜ばかりは日本で対応している東洋、ソーラーエネルギー、久保田製作所の技術陣も修正に備えて待機している。山口からの連絡は一向にない。午前5時、朝日で空が白み始めた頃、山口から待望の電話があった。

「すみません、今Shohagを起こしてオフィスに向かっているところです。学長の了解は取り付けたんですけど、いくつか改善要望があつて。でもまあ昼には上げられます」

「good job! すごい、ダッカ大学とひとりで交渉しきるなんて！マジでどんな手を使ったんですか？」

「詳しくは全部終わってから。しかし、まあ” sake” の力は偉大だ、ということで」

「え、そういうこと？」

「あの学長、敬虔なイスラム教徒と見せかけて、まあ強いなのなの。次回は真木さんも連れて行きますからね。お、もう着きます。それじゃあ後ほど上で！」

程なく山口がオフィスに帰ってきた。連日の疲労が溜まっているはずだがアルコール注入が功を奏したか、思いの外元気に見える。

「一時間もあればボクのパートは仕上がります。そこから全体をマージして読み合わせましょう！」

山口の獅子奮迅の働きのおかげで、正午前にはプロポーザルドキュメント5部の提出準備が整った。

「さあ、いざJICA事務所へ！」

真木と山口は力強く立ち上がった。

「古瀬さん、こっちこっち！」

出国手続きの列に並びキョロキョロ辺りを見回している古瀬に真木は大声で呼びかけた。声が届き、古瀬の顔に安堵が浮かんだ。無事手続きを済ませ、小ぶりのスーツケースを片手に真木のもとに身を寄せると、古瀬は「待たせたな、本当に来たぞ」と言ってニカッと笑った。

「車回すんでこっち来てください」

「お、おう」

程なくしてShohagが真木と古瀬が待つ空港のバス乗り場のほど近くに車を寄せた。

「お前、運転手つきの身分って何様だよ！」

「会社命令ですから。乗れば分かりますよ、ボクらが運転できるようなところじゃありませんから」

“Shohag, her name is Ms. Kose. My colleague in Japan.”

“Nice to see you, Kose-san”

Shohagと古瀬は握手し、真木に続いて古瀬も後部座席に乗り込んだ。そして古瀬の荷物を積み込んだShohagが車を出した。

「どうですか、初めてのバングラデシュは？」

「どうもこうもまだ着いたばかりじゃねえか」

雑談に興じている間に車はまたたく間に渋滞に巻き込まれた。脇から割り込んでくる車をうまくかわし、じりじりと進みながら、Shohagはなるべく最短ルートを探し出す。その間にもバイクやCNGやりキシャが脇を駆け抜け、前の車のドアミラーをりキシャがふっとぼし、運転手が飛び出して大声で抗議するも届かない。

「ね、ボクらが運転できるような交通事情じゃないんですよ。毎朝の渋滞もひどいですし、よほどこの国に通じていないと、車の運転はむしろ仕事の妨げになるんです」

「あ、ああ、そのようだな」

「ホテルまでShohagがちゃんと送り届けてくれるから、古瀬さんは安心して乗っててください」

「へ？」

「だからホテルですよ、どこですか。早くしないともうダツカの中心部ですよ」

古瀬は頭をかきながら、「あれ、お前ってお屋敷みたいなところに住んでんじゃないの？ てっきり部屋のひとつやふたつ貸してくれるのかと……」

「何言ってるんですか、1LDKのアパート住まいです。” Shohag, please stop the car.”」

真木は車を止め、古瀬に向き合った。

「マジすか！ 今から取れるホテルなんて、この時刻じゃもうないですよ。一応かたっぱしから当たってみますけど……」

検索を始めた真木のスマホ画面を古瀬の手が覆った。

「異国の地に独りきりでやってきて、またホテルで独りぼっちなんてやめてくれよ。別に仕事の邪魔もしないし、何も悪いことしないから置いてくれないかなあ……」

珍しく女性面して上目遣いに懇願する古瀬に真木は頭を抱えた。

——この人はいったい何を考えているんだ……

「分かりました。” Shohag, go to my apartment.”」

真木がしぶしぶ了解すると、車の中で「やった、わーい！」と小躍りを始め、Shohagはニヤついた顔で運転を始めた。車内で” Shohag, lets go!” と叫ぶ古瀬ひとりが意気揚々としていた。

——だから、そんなんじゃないっつーの！ 参ったなあ、まったく……

10分後に真木と古瀬を乗せた車は真木が住むアパートメントに着いた。古瀬の荷物を降ろすShohagに真木は” So, I will call you later.” と声をかけると、” Take your time.” と微笑みながら返すShohagをド突きながら、「古瀬さん、行きますよ。着いてきてください」と告げた。古瀬の荷物を運びながら、真木が「二階に上がって一番右手の部屋です。あ、鍵はこれ」と告げ、部屋の鍵を渡された古瀬は「えーと、203号室か」と言いながら真木の部屋を探し当てた。「あった！」とはしゃいで指差す古瀬に「入っていいですよ」と真木が言うと、古瀬は「わーい！」と子供のようにはしゃぎながら部屋に飛び込んだ。

「なんだよ〜、もったいぶつといて真木、結構いいところ住んでんじゃなかよ！」

「て言っても1LDKですよ。滞在期間中ずっとここにいるつもりですか……」

「なんだよ、アタシのことオンナ扱いしてない癖にこういうときだけ急によそよそしくなりやがって。アンタの仕事の邪魔はしないから5日間だけいいじゃんかよ」

「分かりましたけど、ボクが仕事中はどうするんですか。足もないですし、女性の一人歩きは危ないですよ」

「だから、アンタの仕事の邪魔はしないけど、アンタに着いてくから」

「職場まで？」

「食事もね。これ会社命令。丸田さんに夏季休暇はバングラデシュに行くって言ったら『真木くんの様子を見てきてくれ』言われたもんね」

「それは『言葉の綾』っていうもんでしょうが……。もう丸田さんも余計な一言を……」

「いい加減に納得しないと、バングラデシュで真木に襲われたって会社に報告するぞ」

「だから分かりましたって。簡単に案内します。その玄関入った右手がトイレ・バスルーム。一体になってるんでシャワー浴びるときはどちらかがトイレを我慢しましょう。この荷物はとりあえずクローゼットの中に置いておくんで帰ってきたら整理してください。後は見てのとおりリビングとキッチン。ボクは料理しませんけどね」

「アタシもしないから安心しなよ」

「ベッドは古瀬さん使ってください。ボクはソファで寝ますんで」

「おうスマンな。何ならベッドに入ってきててもアタシは別に構わんぞ」

押し込み強盗のような古瀬の勢いにすでに真木は完全に負けていた。

「会社の偵察員を襲って何の得があるんですか、美人局つつもたせじゃあるまいに」

「おい、お前、『美人局』だと！ 何かアタシが悪いことしてるみたいな言いぶりじゃんかよ！」

「もういいから、外でShohagが待ってます。とりあえずウチは出ましょう。まったくShohagにも完全に勘違いされてるみたいだし……」

「何、それってアタシ、お前の女と思われてるとか？」

「もう、いいですから行きますよ」

久々に古瀬との掛け合い漫才を演じた後、二人はアパートメントの鍵を閉め、階下へ降りた。車に戻るとShohagが” Hi, Maki-san. Did you enjoy sweet time?” とからかうので殴ってやろうかと思ったが、Shohagは先に古瀬を車に乗せ、” So where will we go?” と素早く切り替えた。” Go to our office” と命じると、Shohagはいつも通り車をダンモンディ方面に向かわせた。

オフィスでは山口が電話中で、日本人女性連れの真木に驚きながら会話を終えられず「ちょっと待って」という視線を二人に送ってきた。

「古瀬さん、ここがボクらのオフィスです」

「比較的手狭だけど結構綺麗にしてんじゃん」

「このビルの清掃士が定期的に入って掃除してくれるんです。彼、山口っていうんですけど、彼もボクもきれい好きですしね、あんまり散らかさないですね、そういえば」

電話をようやく終えた山口が古瀬に向かって、「あ、あの真木さんと一緒に仕事している山口と申します。えーと……」

職場に突然日本人女性と現れた真木を見て、山口は虚を突かれた格好になっていた。

「あ、こちら、東洋テクノロジーの先輩、古瀬優美さん。こちらが山口さん。バングラデシュに初めて来たその日からお世話になってます」

「はじめまして、古瀬と申します。うちの真木が大変お世話になりました。今回は社命でバングラデシュでの真木の働きぶりをチェックしに来ました」

「あ、そうですか。それはもう、彼は真摯にバングラデシュの課題に向き合い、同国に早く溶けこもうと日々努力しています」

「真に受けないでくださいよ、山口さん。彼女、ただの旅行だから、旅行」

「え、マジですか！？というか真木さんも隅に置けないですね、いつの間にこんな段取りを？」

「知りませんよ、勝手に来ちゃったんだもん……」

「ま、いいじゃん、仕事しなさいよ、仕事。アタシ、このビルの中を探検してくるから」

古瀬が席を外し、ようやくオフィスに静寂が訪れた。

「なるほどね、真木さんはああいうタイプが好みだったんだ。どおりで、日本人美女にもベンガル美女にも興味を示さない訳だ」

「だから、違うんだって本当に。いくら山口さんでもそれ以上言ったら怒りますよ！」

「まあまあ。それよりコンペの結果、明日出ますね。ドキドキします」

「あれが取れるのと取れないんじゃあ天と地との差ですからね。この拠点を維持拡大していくために何としても！」

山口がスマホを取り出してスケジュールを確認しながら、「今日はインフラ開発公社との打合せですね。今回のコンペのこともそうですし、その保険という訳じゃないんですが、次の案件情報を引き出せるとよいのですが」と言っている間に、古瀬が戻ってきた。

「早いつすね」

「一人じゃつままないや、やっぱり。アタシここで監視しててあげるから、アンタ達早く仕事し

なよ」

「まったくどこまで傍若無人なんだ、この人？」と思いながら、真木は山口と打合せの準備を始めた。一瞬、打合せの間、この人どうしよう？と頭によぎったが、どーせ、付いてくるんだろ、と半ば諦めの境地でそのまま仕事を続けた。

午後一時半からの打合せに向け、真木、山口、古瀬の三人はオフィスが入っているビルを出て、徒歩10分のインフラ開発公社に向かった。

「おうおう、車の窓から見ててもすげえけど、やっぱ自分の足で歩くのが一番だねえ。なんか活気あるわ、この国」

「この国、というかこの町ですかね。首都ダッカの人口密度は世界一ですからね。繁栄もあれば貧困もあります。この町にはバングラデシュの現在が凝縮されています」

「山口さんだったっけ、アンタ本当に日本人？ ひょっとして日本よりバングラデシュのほうが詳しいんじゃないの？」

山口は苦笑しながら、「そうかもしれませんね」と返し、二人を先導した。真木は翌日のコンペの結果のことで頭がいっぱいだった。能天気な古瀬の相手などよくできるなど山口を感心していた。

インフラ開発公社では、Ms.Saadiaという女性高官が今日の打合せ相手だった。山口と真木が” Hello!” と挨拶する中、古瀬は” Nice to meet you. My neme is Yumi Kose.” と名刺を出しながら挨拶した。

「古瀬さん、いつの間に英文名刺なんて!？」

「ったりめーだろ、仕事で来てんだよ、仕事！」

古瀬はしたり顔でMs.Saadiaと握手したかと思ったら、” Did you also come from Japan?” という問いに「へ、今なんて言ったの？ おい真木!？」と真木に助け舟を求めた。「ったくしょーがねえなあ」と思っていたが、意外や意外、古瀬の奇抜なファッションや間抜けな質問で話が盛り上がり、終いにはMs.Saadia が着ている民族衣装” Sally” を指差して「アタシ、これでコスプレしたい。マジで気に入ったんだけど」などと言い出す始末だ。Ms.Saadiaは気をよくして「私がお店に連れて行ってあげる」とまで言ってくれたが、そこは山口と真木が丁重にお断りし、「我々が連れて参りますので」と頭を下げた。

今回の訪問での一番の収穫は明日結果が分かるコンペに関わる内容だった。コンペに参加しているのは、イギリス、シンガポール、そして真木と山口が率いる日本勢の3箇国。指名入札の段階では日本勢に勝ち目はなかったが、今はおそらく横一線の状態で、明日のJICA本部での最終会議で結論が出るだろうとのことだった。もし仮に真木・山口の日本勢が勝利するようなことがあれば、インフラ開発公社にはキャパシティビルディングのパートでかなり世話になることになる。コンペの選考過程の情報は厳重に管理されていたが、古瀬の出現に気が緩んだか、まさかのリークに真木も山口も興奮を隠せなかった。

「古瀬さん、お手柄っす！」

「あれはボク達じゃ聞き出せない情報ですね」

「何、アタシ何かした？ まあ何でもいいや。あの”sally”とかいう民族衣装買いに行くぞ」

「え、古瀬さんマジでほしいんですか」

「Saadiaさんの機嫌を取るために戦略的に言ったのかと……」

「あのね。アタシはオタクらと違って裏表のない人間なんだよ。とにかく約束だ、連れてけ」

山口は爆笑しながら、「渡航初日ですが、じゃあAarongでも行きますか。あそこに行けば古瀬さんも退屈しないでしょ」とダッカーの民族工芸品等の市場を提案してきた。

「アーロン？ なんだそりゃ？」

「分かりました、じゃあ、Shohagに連絡ですね」

10分後、Shohagにピックアップされ3人はアーロン市場へ向かった。渋滞を避けながら20分程度走って辺りがやや夕闇を帯びた頃、「はい、古瀬さん、好きなだけ見てきてくださいね」と山口が車のドアを開けながら言った。

「ここって……？」

「バングラデシュの伝統工芸品なら大抵のものを扱っています。少々割高ですけど、外国人観光客がまとまったショッピングするならここに限りますね」

「おう、わかった。見てくるわ。いやっほーい！！」

「結局あの人、仕事の邪魔しにきたとしか思えない……」とこぼす真木に「まあいいじゃないですか、結果がわかる前日に貴重な情報を聞き出せましたし。明日はもしかしたら吉報が届くかもしれませんよ」と山口が諭した。車中で打ち合わせること1時間、「何やってんだよ、真木!」と古瀬から電話があった。何事かと思い、店内で古瀬の姿を探すと、3着の”sally”を持って、仏頂面で待っていた。

「なんすか、決まりましたか？」

「決まらねえから呼んだんだろ、というかお前ら、こんなだだっ広い店にレディーを一人放置してひどくねえ？ 普通、横で荷物持ったりするだろうが」

「あー、すみません、すみません。ちょっと山口さんと話し込んでしまって。で、その3着ですか候補は？」

「お、おう。何かヘンかよ？」

「いや、いいんじゃないですか。その水色のやつとか似合うじゃないですか。今、髪にブルーのメッシュ入れてるから、水色が似合うと思いますよ」

「でも赤メッシュに変えるんだよ、日本に帰ったら」

「赤でも似合いますよ。落ち着いた色だから大丈夫」

「そうか？ てへ。じゃなくて、お前適当に言ってんだろ！」

「どこまで疑心暗鬼なんですか。ボクはこれが好きです。あとは古瀬さんの好みで決めてください」

「お前が『これがいい』って言うんなら、これにしてやるよ」と古瀬は水色の”sally”を店員に「”This one”ね。よろしく」と英語ができない弱みなどまったく感じない様子で差し出すとレジで勘定を済ませた。「あとな、これそのまま着て帰りたいんだけど」という古瀬のわがままを飲み、真木が店員にフィッティングルームでの着替えをお願いし、古瀬は早速現地人モードに突入した。

「ほら、めっちゃいいだろ、このコスプレ。やっとバングラデシュに来たっっちゃう感じがしてきた」という古瀬から山ほど買った土産物を運ぶよう指示された真木は「何気に似合ってるじゃ

ないの」と微笑ましく見守りながら、「ほら、荷物も重いし、早くしないと置いてきますよ～」
と一声かけて車に早足で歩を進めた。

翌日、コンペの結果を待つ真木と山口はピリピリしてPC画面と向き合っていた。JICA担当者からは「13時にメール通知する」と言われていたが14時を回っても一向に知らせがない。

「アンタ達、何ピリピリしてんだよ～。仕事なんか楽しくやんなきゃ息が詰まるっちゅうの。ここでジタバタしたって結果は変わらないんだしさあ」

「古瀬さんはボク達があのプロポーザルドキュメントをどれだけ苦勞してつくったか知らないからそんなに氣楽でいられるんですよ。この勝負に負けたら、この数箇月間の苦勞がパーになります。また一からの出直しなんです！」

「まあ、いいや。好きにしなよ。あたしゃ、休暇中だからね、休暇中。氣楽で何が悪い！」

ピリピリした雰囲気の中、山口が「真木さん！」と叫んだ。

「来ましたよ」

「マジですか！」

PCのメール受信箱に” The result of the judgement for your proposal” という表題のメールが添付ファイル付きで届いている。

「結果は！？」

「ちょっと待った。ここは古瀬さんに聞いてもらいましょう。インフラ開発公社のSaadiaさんから情報をゲットした手腕といい、この落ち着きといい、何か持ってますよ、古瀬さん」

「ん、呼んだ？」

日本語の観光雑誌を読んでいる古瀬が顔を上げた。

「はい、古瀬さん出番です」

「何？」

「このメールの添付ファイルを開いて読んでください」

「バッカじゃないの、アンタ等、ガキじゃあるまいに。自分で読みなさいよ」

「そこを何とか。ゲン担ぎなんです」

古瀬は山口に懇願され、真木にも「アンタもそれでいい訳？」と確認し、「じゃ、アタシが読むね」といってメールの添付ファイルを開いた。

「残念、ダメだ〜……」

「ダメですか、やっぱり」

真木も山口もがっかりして肩を落とした。同じくうなだれた古瀬は「アタシ、英語読めないんだよ〜」と元いた席に座り込んだ。

「えっ？ えっ！？」

PC画面の間際に顔を近づけた真木が信じられないという表情をしている。PC画面には”Your proposal is qualified.”という一文が覗いていた。

「勝った！！！」

「真木さん、マジですか、マジで！？」

慌ててPC画面に見入った山口もすぐさま興奮を隠せず、「やったー！！！！」と声を張り上げた。

「何、で、アンタら結局なんかうまくいったの？」

「コンペに勝ったんですよ！ これはすぐさま本社に報告です。総事業費300億円のビッグプロジェクト始動ですよ！」

その日は、ジャパンエンジニアリング、東洋テクノロジー、ソーラーエナジー、久保田製作所等、関係する会社すべてに連絡し、直ちにJICA事務所に挨拶に行った。決め手はやはり「キャパシティブUILDING」の提案だった。JICAの担当官からは「ハードを入れても、人が育たないことにはこの国の真の意味での成長はない。ジャパンエンジニアリングさん、東洋テクノロジーさん、頼みましたよ！」と言われ、「任せてください。プロジェクトの成功をこの二人が保証します

」と我先に答えたのは水色の”sally”をまとった古瀬だった。

「ではプロジェクト受注を祝して乾杯！」

その日の夜は店に食材を買い出しに行き、古瀬が日本からスーツケースに忍ばせて持ってきた焼酎で3人乾杯した。

「これから忙しくなります。明日はお互いゆっくりしましょう。真木さん、せっかくですから古瀬さんをどこかにご案内してはいかがですか？」

「え、例えば？」

「そうですね、シヨナルガオとか」

シヨナルガオはダッカの東南約30kmのところにある古都で、ヒンディー語で「黄金の都」という意味だ。

「まあ、確かに比較的近くにある割に私もまだ行ったことがないです。古瀬さん、古都とか興味ありますか？」

「ん？ あるあるある。何かよくわかんないけどお前が行くならアタシも行く。それでいいよ」

なんだかよくわからない流れで翌日の休暇とシヨナルガオへの古都探訪が決まった。

「やっぱりShohagは生活必需品だなあ。頼りになるねえ」と感心しながら古瀬はダッカの町並みを車中から眺めている。仕事から離れてみるとここには本当にいろんな人が集まっている。オフィスワーカーと思しき男性や大学生を思わせる若者たち、“sally”を身にまとった上流階級風の女性達、靴磨きのおじさん、信号待ちのたびに車に群がる物乞い達、道端で行き倒れている老人など。町に活気はあれど、その漲る力が渾沌としている。発展のためのエネルギーはあれど、まだまだ是正しなければならない部分があるように感じる。

やがて車はごった返すダッカの市街地を抜け、渋滞に巻き込まれながらシトロッカ川を越える。

「あー、そうそうこういう雰囲気。ダッカを少し離れると、この国も随分落ち着いた感じになるんですよ、緑も増えますし。ただ、交通量はどこへ行っても多いですけどね」

あれこれ会話しながら車で走ること1時間、Shohagが” So, we have just arrived. This is Sonargaon.” というので「古瀬さん、着いたみたいですよ」と言うと、「古瀬はそうか。おし、降りるか!」と言って、車から出て外の空気を吸った。

“Shohag, so please come back here three hours later, 12 o’ clock.”

“O.K. Have a nice time!”

Shohagもさすがに真木と古瀬の関係を理解したのか、もう茶化したりすることもなくなっていた。とはいえ、日本でも経験したことのない二人きりでのお出掛けだ。Shohagと別れて古都ショナルガオの町並みを散策する。やはり名所ということもあり、インド人と思しき観光客などたくさんの方が道路を行き来している。

「わー、なんかすげーな。中世ヨーロッパって感じだな」

石レンガ造りの建造物が道の左右に並んでいる。確かに初めて訪れる人からしたら、中世ヨーロッパに迷い込んだと感じても不思議ではないだろう。古瀬は忙しく写真撮影に興じていたが、観光客と思われる男性二人組に身振り手振りで話しかけると「真木、写真だ、写真。証拠写真」と言って手を握ってきた。

「何の証拠写真ですか？」

「ちゃんとお前の仕事ぶりを偵察しにきた証拠写真だよ」

「もう意味わかんねえ……」

うなだれる真木と意気揚々とした古瀬の写真がカメラに収められた。「おっしや、写真ゲット」と言いながらズンズン歩く古瀬に「この人、生活力あるわ」と苦笑しながら後を追う。古瀬と真木は建物の内部を覗いたり、外観を眺めたりしながら、優雅なひとときを過ごした。

「真木、あれどうやって乗るんだ？」と、建物を見飽きた古瀬がリキシャを指差して尋ねる。

「どうやってって、行き先を告げて料金交渉が成立すればOKだと思いますよ」

「おし、じゃあ乗ろう！」

「乗ってどこ行くんですか？」

「シヨドルバリって民族博物館がこの先にあるんだよ。レディーをもてなすのならそれくらいの予習は普通しておくもんだろ」

古瀬はおそらくまだ10代のリキシャを引く青年と交渉している。なんで英語もできないのに交渉できるんだよ、と様子を窺っていると、古瀬が駆け寄ってきて「真木、40^{タカ}Tkって高いのか、安いのか？」と聞いてきた。「まあ二人乗りだし、安いんじゃないんですか」と答えると「よし決まり。お前も乗りな」と言って、料金を先払いし座席に乗り込んだ。いつの間にか古瀬のペースに乗せられていると感じながら真木もリキシャに乗り込むと、土道の上をガツタンゴットンと揺られながら、思ったより速い速度でリキシャが走っていく。

「民族博物館に行く、って通じたんですか？」

「お、おう、多分な」

10分ほどリキシャを走らせると、引いていた青年は” Here.” と指差して” Closed.” と告げた。確かに入口の傍には” Closed” と看板が下がっている。

“Is this place Sadarbari?”

“Yes, this is it.”

「古瀬さん、参りましたね。閉館みたいですよ」

「何〜っ！！！」

古瀬がリキシャを飛び降りて入口を強行突破しようと突進するので、真木は笑いながら制止し「とりあえず戻りましょう」と言って、追加で40Tkを支払い、元の場所に戻った。

「参りましたね、別れ際にShohagに『三時間後』って言っちゃいましたからね。携帯通じるかな？」

真木はShohagが停車していった車の傍に腰かけ、Shohagの携帯番号を鳴らしたがやはり通話に応じない。

「ダメだ、あと1時間待ちですね」

「いいよ、アタシ何かこの雰囲気気に入ったから」

「不安とかそういうの無いんですか？」

「なんか時間がゆっくり流れてるじゃん。東京みたいに1分1秒に追われてあくせく暮らしてると、本当に大事なものを見失っちゃうよ。アンタの生き方が正解かもね」

「古瀬さんが真面目なこと言うとなんか気持ち悪いですね……」

「んだよ、バカにすんじゃねえよ！」

行き交う人の流れを見ながら、真木と古瀬はお互いに顔を見合わせて笑った。その後、Shohagが約束通り12時に帰ってきて、民族博物館に行ったが休館日だったと告げると、先ほどリキシャで連れていかれたのは閉鎖されている通用口で、入場口は別にあり開館していると伝えられた。ぶち切れて、「往復の80Tk回収してくる！」と憤慨する古瀬をなだめながらShohagに案内してもらい、3人で民族博物館を鑑賞して遅めのランチを取った。その後、古瀬は出店で工芸品などを物色し、古都シヨナルガオを満喫した。思いの外、小さな街だったが、思わぬハプニングで気付けばいい時間になっていた。

“Shohag, Thank you for today.”

「Shohag, ありがとう。アンタ、真木より全然頼りになるよ、やっぱり」

「現地人だから当たり前じゃないですか！」

そんな遣り取りを微笑ましく見守るShohagとアパートメントの前で別れると、真木は「今日はいかがでしたか？」と古瀬に尋ねた。

「仕事の日も面白いけど、ちょっと小旅行するのも悪くないな」

「でも確かに事前にサーベイしていたら、もっと楽しめたかもしれませんね。もう一箇所くらい行けたかも」

「アンタも日本人根性抜けてないね～。ダツカはともかく、せつかく時間がゆっくり流れる場所にいるんだから、ゆっくりすりゃいいのよ。今日は楽しかったね、でいいじゃんか」

「そうですね、古瀬さんが満足ならいいんです」

「んだ、アタシは満足だよ」

そう言って自分の家に帰るが如く真木のアパートメントの中に入っていった。「どこまで図々しいんだ、この人……」と思いながら、日本にいたとき以上になんとなく彼女に親しみを感じる自分に真木は気付きはじめていた。

「それじゃあ、また来るぜ～、仕事の邪魔しに」

あっという間に古瀬のバングラデシュ滞在も終わり、シャージャラル国際空港から飛び立つ古瀬を見送りに、真木、山口、Shohagの3人が顔を揃えた。

「真木、アンタはちゃんと仕事してたって丸田さんに伝えておくよ。5日間も泊めてもらったからな、仕方ない。でもあれだ、バスルームのお湯がちゃんと出なかったことは報告しておこう」

「あの、それはバングラデシュ全土変わらないので。別に外れ物件でもなんでもないのでから」

「山口さん、うちの真木がご迷惑ばかりかけておりますが、これからもよろしくお願いします。山口さん抜きでは真木は生きていけません」

「そんな大袈裟な。真木さんは立派にバングラデシュ生活を営んでおられますよ。大丈夫です、心配しないで」

「それと、Shohag。えーと、真木訳せ。毎日あちこち連れていってくれてありがとう。バングラデシュにまた遊びに来たときもアタシの足になってちょうだいね」

それを真木の口から聞いたShohagははにかみながら、「真木さんと古瀬さんはお似合いのカップルでした」と英語で返したので、真木は「もちろん、どこへでもお連れします」とShohagは答えています、と古瀬に訳して伝えた。

「という訳で、アタシ、ここ気に入った、また来るね、バングラデシュ！」

そう言い残すと、古瀬は大きなスーツケースと土産物を運びながら搭乗口へと向かった。また古瀬がいない普通の日々が訪れる安堵と寂寥感の双方が真木を襲った。

「いなきやいないで寂しくなりますね、特に真木さんは」と山口は真木の肩を叩いて車のシートに滑り込んだ。真木も車に潜り込むと「そんなことはないですよ」と強がって見せた。

もう既にジャパンエンジニアリング、東洋テクノロジー、ソーラーエナジー、久保田製作所の4社はバングラデシュの現地企業と連携しながら基本設計を始めている。真木と山口は遅ればせながらその戦列に加わると、キャパシティビルディングのため都市インフラ公社やダッカ大学との調整を開始した。なんだかんだ言って、古瀬がいる間はロクに仕事が手に付かなかったが、この5日間は真木、山口二人にとっていい休養になったのは確かだった。

その後、導入する機器の選定、設計は順調に進み、導入先の現地調査も並行して行っていった。合計で数百か所への機器導入は容易ではなかったが、プロポーザルドキュメントを詳細に作成していたのでWBS (Work Breakdown Structure) を整理しマイルストーン管理さえ徹底すれば問題なさそうだった。環境意識高揚のためのセミナーもバングラデシュ各地での講演をバングラデシュ政府、都市インフラ開発公社、ダッカ大学、また日本からも経済産業省、環境省、帝都大学から招き、大々的に行う方向で調整が進みつつあった。ダッカ以外の地域にはあまり踏み入れた経験のない真木としては、このパートは山口に任せきりであった。

そんな忙しい毎日を送るうちに、古瀬と楽しく過ごした日々は忘却の彼方に押しやられていった。

そんな日の朝、LINEのコール音で目を覚ました。

「誰だ、朝っぱらから」

真木はベッドの上で毛布を引っぺがし、転がりながらテーブルの端に置いたスマホに手を伸ばした。

『真木、ニュース！ 大ニュース！！』

古瀬からだった。これじゃ、どんなニュースかわかんないじゃんかよ、と思いながら『なんすか、ニュースって？』と返すと、『アンタの宿敵宮津が倒れた。心筋梗塞だって』と返事が返ってきた。ちょっと待て、ダッカと日本の時差は3時間。今こちらが朝7時だから日本は早朝4時のはずだ。さすがにちょっと気が引けたが、『無料通話かけていいっすか？』と聞くと、程なくしてLINE電話が鳴った。

「まっきー、元気？」

「『元気？』じゃないっすよ。早朝からこんな知らせ、古瀬さん、いつ知ったんですか」

「え、さっき。あ、言っとくけど、会社の連中もほとんど知らないはずだから誰かから聞くまで内緒にしておいてよ」

「わかりました。それにしても、こんな情報よく……」

そこまで言ったところで、古瀬が東洋の筆頭株主である第一中央銀行幹部の御令嬢だということ思い出した。しかし、長年に亘って「技術の東洋」の「技術」を先導してきたCTO宮津の緊急事態だ。社内はもちろん社外に与える影響も甚大だろう。

「どうよ、アンタを追放したMr.宮津が遂に会社を去るよ。このまま行けば、丸田さんか西山さんが宮津さんの座に取って代わる。アンタ、それでもそっちに居座るのかい？」

「それとこれとは別です。それにしても宮津さんの容態が心配です。長年の心労が祟ったんでしよう……」

「自分が気に入らないものを切り捨ててシンパばかり集めてきた報いが回ってきたんじゃないの？ それにそろそろ世代交代の時期だよ。宮津さんが身を引かないと新しい技術が生まれない。宮津さんには悪いけどタイミング的にはバッチリだったと思うよ」

長年勤めているだけあって、一般職とはいえ古瀬の見立てはさすがとしか言いようがなかった。宮津の言うように「泥はなくなる」の路線ではマーケットが縮小傾向の今パイの食い合いになっている。脱焼却を目指す消化促進のようなパラダイムシフトや海外途上国向けのBOPビジネスなど新たな展開を見せなければゆくゆくは東洋も自然淘汰されてしまうだろう。

「とにかく宮津さんの御無事を祈ります。この件は丸田さんや西山さんから連絡があるまでは私は知らなかったことにします。早朝にご連絡ありがとうございました」

電話口から古瀬の溜息が聞こえた。

「アンタの痩せ我慢も大したもんだねえ。じき、アンタの恩師の西山さんか丸田さんから連絡があると思うよ。『戻ってこい』ってね。そう言われてアンタ断れるの？ アタシの電話なんぞは無視したって別にいいけどさあ……」

「そういう訳じゃないんです、決して。古瀬さんには本当に感謝しています」

「感謝が伝わんねーな。たまにはアタシのために何かしてくれたっていいじゃんかよ……」

電話を切った真木は複雑な感情だった。古瀬は自分にこれ以上何を求めているのか、もう既に会社の同僚という関係は越えているように思う。確かに古瀬は鬱状態にあった真木を救い、またハードな日々を癒してくれる存在ではあったが、それ以上でもそれ以下でなかった。自分はいったい何を古瀬に対してこれ以上求めているのだろう。そう考えると解が出ることはなかった。

予想通り、東洋社内は「宮津専務入院」の報で全社員パニックに陥ったようだ。ニュースは市場をも駆け巡り、同社の株価にまで影響を与えた。そのくらい、「技術の東洋」を支える宮津の存在は絶対的なものだった。あの丸田も西山も宮津には最後まで叶わなかった。それくらい凄い存在が一夜にして表舞台から姿を消すということの計り知れない影響の大きさに真木もネット情報を検索しながら思い知っていたところだ。

その日の夜遅くに電話があった。西山からだった。

「真木くん、久しぶり。元気か？」

「はい、こちらは変わりありません。例の件ですよね」

「ああ、宮津さんが心筋梗塞で倒れて入院中だ。今さっき、見舞ってきたところだ」

「どうなんですか容態は？」

「予断を許さない状態とのことだ。万が一のことも考えておかねばならない」

「社葬ですか」

「そういうことになるな、縁起でもないが」

「私もどこかのタイミングで帰国したほうがよさそうですね」

「しかし、今そっちを空ける訳にはいかないだろう」

「そうですね、まだJICAプロジェクトの立ち上げ段階ですから、こちらのメンバーに任せてというには早すぎる状況です。でも何とかならないか調整してみます」

電話を切ると、真木は山口に真っ先に連絡した。

「おっ、どうしました？」

「あの、日本で恩師が危篤とのことです。できれば一時帰国したいんですが、この状況じゃ難しいですね」

今回のプロポーザルの中でメタン発酵パートの司令塔は真木だ。全パートを山口に押し付けてバングラデシュを離れる訳には行かない。

「真木さんの目から見て現地パートナーGS社の実力はどの程度ですか？全然ダメですか？」

「そりゃあうちや日本の競合他社と比べれば実力差は歴然としています。ただ、実際に動くのは東洋の設計陣とGS社のエンジニアの共同体です」

「要は真木さんがいなくても回るんですね、プロマネさえいれば」

「それはそうですが、その肝心なプロマネが……」

「いるじゃないですか、ここに。こう見えても私はジャパンエンジニアリングで5年間プロマネ経験あり。Project Management Professional、技術士衛生工学部門の有資格者ですよ」

真木は山口の目を見た。真顔だった。

「いいんですか、本当に！？」

「そんなこと気にしてる暇があったら、私が逆の立場になったときに頼めるように鍛えておいてくださいよ。私だって家族が日本にいるんです」

「わかりました。ありがとう、恩に着ます。最低限の引き継ぎをしたら日本に帰国します。今現在の進捗状況から説明しますよ」

真木は進捗、顧客との調整状況、東洋とGS社のカウンターパート、当面のスケジュール等を伝え、山口が「もう十分です。早く身支度して、今日の最終便に間に合わなくなりますよ」と言うのを受け、Shohagをビル地下一階の駐車場に呼び出した。山口は真木とともにShohagを待ちながら、「真木さん、戻りはいつでも構いません。ただ約束してください、必ず戻ってくるって」と真木の目を見つめて言った

「当たり前じゃないですか。まだ、試合は始まったばかり。不戦敗するほど臆病じゃないですよ

」

「ならいいんです。恩師との時間を大切にしてください。これから長丁場の戦いになりますから」

山口に見送られ、Shohagが運転する車に乗り込むと一路アパートメントに向かった。最低限の荷物をボストンバッグに放り込み、玄関先に待たせておいたShohagに” Go to the airport!” と指示をして車を出させた。

“Maki-san, I’ m waiting for your return.” というShohagに” Everything is alright. We will see again sooner or later.” と答えて安心させ、不安げなShohagをひとり残して搭乗手続きに向かった。搭乗時刻まで既に1時間を切っていた。

「西山さんですか、真木です。今、羽田に着きました。宮津さんは！？」

「御家族からの話だと、小康状態を保っているとのことだかもう既に意識はない状態だそうだ。今日、明日が山とのこと。私は仕事が片付き次第病院へ向かう予定だ」

「私もこの足で聖路加病院に向かいます！」

「よし、じゃあ向こうで落ち合おう！」

東京モノレールの窓から見える東京湾が美しい。そしてビルが乱立する東京の街並みが懐かしい。

聖路加病院に着くと、真木は受付で真っ先に宮津の病室を訪ねた。

「失礼ですが、御親族の方ですか？」

「いえ、会社でお世話になった者です」

「失礼いたしました。実は御家族と相談したところ、御親族以外は面会謝絶とのご希望でして。こちらにお名前をご記帳いただけますか。御家族に連絡してみます」

一部上場企業の専務取締役ということもあり、厳戒態勢を敷いているようだ。はるばる異国の地からやってきたが、最悪目通し叶わなくても致し方あるまい。

「はい、真木さん、真木洋介さんとのことです。あ、少々お待ちください……、あ、あの、真木さん、バングラデシュからいらした真木さんで間違いはないですか？」

「は、はい。先ほど羽田に着いたところです。これ、ご覧ください」

真木はパスポートの出国許可印が押されたページを差し出した。

「あの、今パスポートも拝見しまして、間違いございません。大丈夫ですか。ではご案内します」

受付の女性は丁寧に電話の受話器を置きながら、「真木様、大変お待たせ致しました。それでは突き当たり右手にあるエレベーターで17階にお昇りください。エレベーターを出て左手三室目1703号室が宮津様のお部屋となっております。御家族がお部屋におられますのでお声掛けしてお入りくださいませ」

部屋番号をメモした紙を真木は受け取ると、エレベーターに向かった。約一年ぶりの宮津との再会がこんな形になるとは当時思いもよらなかった。

エレベーターが高度を上げ、次第にスピードを緩めると目的階で停まった。今こうしてひとり宮津の部屋に向かうことに違和感や抵抗感がないではなかったが、もはやそんなことは言っていない。事は急を要するのだ。

「エレベーターを降りて三室目……」

そこに「宮津隆一郎」と書かれたネームプレートの貼られた部屋があった。呼び鈴らしきものがあったが押すのが躊躇われ、声を掛けるにも重厚長大なドアで内部まで届かないと思われた。

そこへ年の頃なら30代後半くらいに見える美しい女性が姿を現した。

「あの、真木さんですか？」

いきなり自分の名前を言い当てられ戸惑いを隠せなかった真木だったが、おそらく宮津の娘さんだろうと気を取り直し、「はい、そうです」と答えた。

「この度は遠くからお見舞いいただきありがとうございます。宮津の家内でございます」

内心、「宮津さんの奥様！？ 見た感じ、俺とそんなに年齢変わらないじゃないか！」と思いつつ、「あーそう言えば宮津さんって離婚歴3回っていう噂があったもんな」などと余計なことを思い出し、自分で自分自身を納得させた。

「ご主人、宮津さんの御具合はいかがですか？」

「中へどうぞ。宮津に会ってやってください」

宮津の妻に促され、病室の中に入った。整然とした室内には誰が生けたのか美しい花が病室の目印であるかのように窓際に美しく飾られていた。宮津はその下のベッドで穏やかな表情で眠っていた。それは東洋テクノロジーの技術トップとして君臨していたかつての宮津とは似ても似つかぬ姿であった。

「あなた、真木さんがいらしたわよ。真木さんと話したいことがあるんでしょう。ほら、起きて。そろそろ眼を覚ましてよ！」

何の反応も示さず意識を失ったままにいる宮津に痺れを切らしたか、宮津の妻の口調はただの呼びかけから懇願へと変わっていた。眼に涙をいっぱいに湛えた宮津の妻は「会社では怖い顔ばかりしていたと思うんです。でも素顔の彼はこんな優しい顔立ちをしているんですよ。自宅ではまったく怒ったことがありません。でも愚痴をこぼすんです。『また会社で怒ってきた……』って。本当は憎まれ役になりたくなかったんでしょうね。『仕事だから……』が口癖でした」

意外だった。あの宮津がそんな風に思っていたとは。

「私のことも怒ったと仰っていませんでしたか？」

宮津の妻は笑顔を取り戻して、「はい、『能力があるのにPRしない、手柄は人のモノでいいという奴がいる。自分だけの人生ならいざ知らず、いずれ家族を支えていかねばならないのに、今時の若い奴の考えることはわからん』と。この間、西山さんがいらしたときにそのエピソードを話したら『今バングラデシュに赴任してる真木のことですね』と仰ってました。思い当たることは？」

「……ありますね……」

正直ビックリした。宮津がまさか自分のことをそんなに買ってくれていたとは……。自分は西山や丸田だけでなく、いろんな方々に可愛がってもらっていたのだなと真木は痛感した。

「もしかしたらあなたが来てくださったら意識を回復してくれるんじゃないかって期待していた

んですけどね、なかなかそううまくは行きませんね」

宮津の妻はそう言いながら、宮津が眠るベッドの脇に置いていた手帳を手に取った。

「まだ意識があった頃、彼が話す言葉を書き留めていたんです。ちょうど5日前は随分饒舌で、気になる方々に一言ずつ語ってました。今思えば、これが『遺言』だったんですかね、私宛にはなかったのですが……」

宮津の妻は涙をハンカチで拭って続けた。

「西山さんには『技術の東洋はお前に任せた』と。そして、真木さんには……」

「私宛のメッセージがあるんですか!？」

「はい、もちろん。ですから病室までお招きしたんです。『泥はなくなるのか?』と」

真木の日からも涙がつーと伝った。真木が入社以来注いできた情熱を宮津は決して袖にしてきた訳ではなかったのだ。真木は横たわる宮津に寄り添うと、「宮津さん、泥はなくなりません。が、私が必ず減らせてみせます」と誓った。

そこへ病室のコールが鳴って、宮津の妻が西山を呼び入れた。

「西山さん、これ」と、メモ書きされた宮津の妻の手帳を見せると西山は無言で頷いた。

「宮津さんの意識は？」

宮津の妻が首を振った。

「真木くんが来れば奇跡が起きるかと思ったのですが……」

三人は宮津の穏やかな笑顔に見入った。戦場から解放された宮津は観音様のような柔和な笑みを湛えていた。

「なんだか別人みたいですね。幸せそうな表情に見えます」

「本当だな。俺達は宮津さんのことがわかっているようで何もわかっていなかったのかもな」

西山と真木は宮津の妻に礼を言い、何か変化があれば連絡してくれるよう頼んで病室を後にした。

「真木くん、事業が佳境のこんな時期に緊急帰国申し訳ないな」

「いえ、こればかりは。誰が悪い訳でもありませんし、やはり帰国して正解でした」

真木は西山に酌をしながら、帰国後の病院での出来事を反芻していた。

「なあ、真木くん。『泥をなくして』みないか？」

西山が箸を止めて真顔で切り出した。

「宮津さんの提案で、東京都下水道局との共同研究を申し入れている。既に実証プラントの資機材は準備していて、後は設置してデータを取得するだけだ」

「しかしフェライト化物の回収率の件が……」

「梅田グループが平均70～85%の数値を叩き出してくれている。技術的に疑わしい部分はもうどこにもない。安心してくれ。後は誰がこの試験をリードするかだけだ。真木くん、何とかならないか！」

「しかし、バングラデシュのJICAプロジェクトもようやくスタートしたばかりですし……」

「機器設置・試運転に一週間、その後二・三週間もあれば傾向が見えてくるだろう。後はバングラデシュからオペレーターに指示してくれればいいんだ。この1箇月何とかならないか？この試験の成否は君にかかっている。宮津さんに吉報を届けたいんだ！」

バングラデシュのJICAプロジェクトの総指揮を今山口が執っている。自分が日本に留まるとしたら、国内企業の取り纏めを自分が引き受けるといった役割分担しかないだろう。何か他によい方法はないか。その時思いがけないアイデアが真木の頭に浮かんだ。

「西山さん、本件お受けします。私の手で業界のパラダイムシフトを是非！ ただし、ひとつだけ条件があります」

翌朝、東洋テクノロジーの研究所を久々に訪れた真木はフェライト化研究グループの梅田に挨拶し、東京都との共同研究のプロジェクトリーダーを務めることを伝えた。

「よく帰ってきてくれた。技術は嘘をつかない。フェライト化の精度は十分に高めた。一昨年は新日本製鋼にお茶を濁された形になったが、今回こそは東京都も目の色を変えるだろう。そこから全国展開だ。頼むぞ、真木くん！」

続いて、実験グループの日野リーダーに試験装置を案内してもらった。

「そっちの10トントラックに積み込んでいるのが葛西清掃工場に設置するフェライト化試験装置、そっちは消化促進試験装置だ」

「フェライト化用のロータリーキルンは内径1,000mmφですか。福岡的那珂川下水処理場でやったときより遥かに規模が大きいですね。浄化槽も3m³タンクが二基。本気度を感じます」

「消化槽を見てやってくれよ、ウチの柴田が『今度こそ！』ってな、気流攪拌装置までつくっちゃった。皆本気だぜ。宮津さんも西山さんもお前も俺達も」

想像を超える皆の努力の結晶がそこにあった。今度こそは何としても成功させる。

「じゃ、消化促進のほうのトラックに乗ります。辰巳下水処理場へ出してください」

「ちーっす。じゃ、ボクはフェライト化のほうで」

「お、落合！」

「真木さん、今度はボクに手伝わせてください。あのときの借りを今返します。倍返しだ！」

落合と真木は二手に分かれて、それぞれ都市ゴミ焼却飛灰のフェライト化装置と磁気ーフェライト処理による消化促進試験装置を搬入設置した。

落合が加わったフェライト化グループは葛西清掃工場の焼却炉の排ガス処理ラインに設置されたバグフィルターで捕集された飛灰をホッパーに貯留した。これに、フェライト化促進用の添加剤を加え、スクリーフィーダーでロータリーキルンに切り出し、650℃、2時間じっくりと焼成して、磁性化物のみを磁選機で集める。この段階で概ね60%の飛灰がフェライト化されるが、未反応の飛灰を「戻し灰」として原灰に加え複数回処理することで70～80パーセントにフェライト化率を高めることが可能となることがわかった。

一方、真木が率いる辰巳下水処理場での消化促進では、下水処理で採用されている活性汚泥法

で発生する余剰汚泥を消化槽に送泥するラインに3m³タンクを二基設置し、まず双方無処理として一週間ほどメタン発酵の安定化に費やした。双方のガス発生量などが同等と確認した上で、片方の消化槽に葛西清掃工場で試験作製したフェライト化物を投入し、汚泥の可溶化効果が最も高くなるように磁石を設置する。結果は思いの外早く出た。磁気―フェライト処理槽の汚泥が無処理系と比較して2, 3℃高くなったのだ。

「フェライト粒子と汚泥の衝突で熱を発生していますね。これなら相当の消化促進効果を期待できます！」

真木は右拳でガッツポーズを決めた。その後も磁気―フェライト処理による汚泥の可溶化は順調に進み、真木が日本国内で実証試験をリードした3週間だけでも1.6～1.7倍の消化促進効果を確認した。

真木がバン格拉デシュへ再び発つ前日、丸田、西山、真木の3人は聖路加病院を訪れた。いまだ意識を回復することのない宮津は一進一退の病状で、依然として会話することも儘^{まま}ならなかった。

「奥さん、お疲れでしょう。我々にはお気遣い無用ですからね」

丸田がやつれ気味の宮津の妻に配慮し、声をかけた。宮津はかつての精悍な表情を失い、まるで^{なきがら}亡骸のように痩せ切った姿であった。

「宮津さん、泥を減らしてみせましたよ！」

真木が敢えて明るい雰囲気^で宮津に声をかけた。そのときだった。

「あ、目、目が開いた！」

この一箇月間、意識を失ったままだった宮津の両眼が確かに開き、虚空をしっかりと見据えた。

「あ、口、口も！」

「私に見せてください！」

宮津の妻が意識を回復したかに見える宮津に飛び付いた。

「何か言ってます。せ・め・ろ？『攻めろ』でしょうか？」

「ここが攻めどきだと仰るのですか？」

西山が宮津に問い質すと、宮津は西山に向かってニヤリと笑った後、また両眼と口を閉じ、微動だにしなくなった。

病院を後にした3人は行きつけの居酒屋で真木の再壮行会を行っていた。

「まだ試験は途上だが、とりあえず乾杯！」

西山の音頭で、3人は真木の最後の夜に酒を酌み交わした。

「宮津さん、『攻めろ』ってね」

「確かに技術的にはこれ以上試験期間を延ばしても、良くなることはあっても悪くなることはないんです。PRするなら今がチャンスかもしれません」

「技術企画部的にも、この辺りで おおだま 大弾 をぶち込みたいところだよ」

「営業部にも相談した上で経営会議マターですね。この単品だけでなく、乾燥機、焼却炉、溶融炉を含めた全社戦略を描く必要がありますからね」

「そこは技術企画部が引き取るとして、……、そういえば、今ウチの部には元気印がないんだった。真木がよくわからない条件出すからよ……」

「いえいえ、ボクが何故あの条件を出したか、よくわかったでしょ。なんか『持ってる』んですよ、あの人」

その後、3人はバングラデシュ談義に華を咲かせた。技術企画部が構想しているBOPビジネスの仕込みも新たに真木のミッションとして組み入れられた。

「あ、山口さん、真木です。すみません、長らく留守にしました。万事うまく行って明日の便で戻ります。どうですか、そちらは？」

「何とか2人で回してますよ。ボク一人じゃ正直危なかったですが、遅い相棒をつけてもらいましたからね」

「戦力になりました？」

「もちろん。交渉事はほとんど彼女に任せました。真木さんも早く戻ってこないと居場所がなくなりますよ」

「いくら何でもそれは褒め過ぎですよ。また調子に乗るから勘弁してください」

「ハハハ、とにかく明日お待ちしております。” Have a niceflight!”」

山口への電話が終わると古瀬からLINEが入った。

『おーい、まだか～。待ちくたびれたぞ～』

『気が向いたら帰ります。くれぐれも山口さんの仕事の邪魔をしないように』

真木はわざと^{とぼ}惚けた返事を送るとスマホをホテルのベッド脇に放り投げ、ベッドに仰向けに寝そべった。そして、「さあ、いよいよバングラデシュ帰任だ！」と気合いを入れ直した。

その後、消化促進試験の完了を待たずして、東洋は営業攻勢に転じた。中小規模下水処理場向けには脱焼却、大規模下水処理場には焼却・溶融から嫌気性消化への段階的移行を促すよう、プロモーション戦略を行った。前触れのない共同試験途中での東洋の大攻勢に業界最大手の新日本製鋼、三友重工は慌て、対応策を至急検討するも、技術に裏打ちされた東洋の圧倒的優位は揺るがず、東洋勢の思惑通り、都市ゴミ処理と下水汚泥処理を組み合わせた磁気一フェライト処理による汚泥消化促進は業界のデファクトスタンダードになっていった。

「ただいま！」

真木はわざと皆を驚かすようにオフィスまで抜き足忍び足で近付き、一気に扉を開けて言い放ったが、「おう、帰ったか。どうだった、久々の日本は？」と古瀬のリアクションは至って普通のものだった。

「なんだよ、少しくらい喜んでくれたっていいのに」

「アンタの行動なんかお見通しなんだよ。つーか素直に言えよ、帰って来るなら帰るって」

普段ならそんな二人の掛け合いを見て微笑んでいるはずの山口の姿が見当たらない。

「あれ、山口さんは？」

「打合せか何かかなあ。そういえば、もし真木が帰ってきたらデスクの引き出しの中の書類に目を通すように、って託けられたな、そういえば」

真木は何か嫌な予感がして、デスクの引き出しをすぐにあさり始めた。

「古瀬さん、それいつ言ってましたか、山口さん？」

「確か一昨日かその前か、割と最近だよ」

引き出しに入れておいたJICAプロジェクトのプロポーザルドキュメントに挟む形で「真木さんへ」と書かれた封書を見つけた。真木はその中にある手紙を慌てて取り出すと、書かれている文字に目を通し、愕然とした。

「どうした真木？」

「どうしたもこうしたも……」

手紙を古瀬に差し出すと、「あー、アタシはいいよ。もう読んだから」と表情ひとつ変えず言う古瀬に「えっ、勝手に読んだんすか！？」と真木は食ってかかった。手紙にはこう書かれていた。

真木さん、わずか半年の間でしたがエキサイティングな日々をありがとうございました。

突然ですが、私は再び旅に出ます。探さないでくださいね。

生きている限り、また再び会うこともあるかもしれませんね。

このバングラデシュに来て5年目になります。

その間いろんな方々に会いましたが、同国の経済発展に合わせ金儲け目当てで出入りする連中に嫌気が刺しました。

それはジャパンエンジニアリングも東洋テクノロジーも同じです。

最初はこの国の為になるのならそれでもいいと自分に言い聞かせてきましたが、この国の課題は解決するどころか、余計いびつな発展を遂げつつあります。

貧富の差の拡大、環境衛生問題の深刻化、人口集中などなど。

こんなことならこの国は私が初めて訪れたあのときのままでよかった……。

この国をこうしてしまった諸悪の根源を断つべく私は立ち上がります。

今進めているJICAプロジェクトについては、アシスタントとして必要なことは古瀬さんにすべて身に付けてもらいました。

真木さんのプロジェクトマネジメント力で乗り切ってください。

大丈夫です。真木さんの成功を心から応援しています。

そして真木さんにはこの国の持続的発展に向け、単なる金儲けではない事業を牽引していただきたいのです。

この国の民に幸せを、この豊かな自然の保全を！

「ここ1週間くらい病んでたよ、彼」

「え！？ 病んでたって？」

「何か思い悩んでるようだった。何かあったんじゃないかな、これ女の直感ね」

古瀬はそう言って約1週間前の新聞紙を差し出した。

「これを読んだ頃から難しい顔をするようになったような気がする。英語だからアタシには読めないんだけどさあ……」

折り畳まれた新聞記事の露出した部分には、イスラム過激派組織が64県中63県で犯した同時多発爆弾テロ事件の記事があった。

「ああ、この間のテロ事件ですね。日本でも取り上げられていました。私も渡航できるかどうか直前まで分からず迂闊に連絡できなかつたんです。古瀬さん、大丈夫でした？」

「大丈夫も何も、大使館から外出禁止令が出たからアパートでじっとしてたけど、まあアタシは大丈夫だよ。何も失うものはないし、この国の水が合ってるようだしね」

「そんなこと言わずに気を付けてくださいよ。不要不急の出歩きは控え目に、移動は極力Shohagをお願いして……」

「へえー、真木もアタシのこと心配してくれるんだあ、意外～」

「当たり前じゃないですか！」

「なんだよ、ムキになるなよ、急に」

古瀬にそう言われて冷静を取り戻し、新聞紙面を見るとSADAの名前が目に留まった。

「SADAって、山口さんが所属している国際NGOじゃないか。えーと、SADAがイスラム過激派組織と内通してるって！？」

もしかして、……。真木は嫌な予感を抱きながら、SADAの日本オフィスに電話した。

「すみません、バングラデシュに住んでいる者なのですが、貴団体に所属している山口亮一さんの行方が分からなくなっています。何か情報はないでしょうか」

「貴方と山口さんとの御関係は？」

「ビジネスパートナーです。彼とは半年間に亘り一緒に事業を進めてきました。その彼が忽然と姿を消したんです」

「一週間前にバングラデシュで起きた同時多発テロはご存知ですか？」

「はい、日本でもニュースや新聞で見っていましたし、こちらの新聞にも大々的に取り上げられています」

「それで当団体にお電話なされたんですね」

「はい、何か手がかりが得られるかと……」

電話の対応者は逡巡した様子だったが、しばらく間を置いて滔滔と語り始めた。

「彼は勇敢な男性でした。今回の同時多発テロにはSADA本部の元幹部が関与していたことが分かっています。SADAは彼らを事件後すぐさま罷免しましたが、山口さんはそんな組織に協力してきた自分自身を責めているようでした。SADAジャパンとしても山口さんの主張には精一杯耳を傾けましたが、具体的な提案をできぬまま、『それなら自分で行く！』と、つい一昨日の話です……」

「イスラム過激派組織と繋がっている元SADA幹部のところに行ったというんですか！？」

「もしいなくなったとしたら、その理由しか私どもには考えられません」

「彼を救出する、見つけ出す方法はないのでしょうか？」

「おそらく時既に遅しかと。真木さん、インターネットを今見ることができますか。トップ記事にまたしてもテロが起きたと報じられています。ダッカ郊外で日本人男性一名が銃撃されたと。真木さん達も不用意にその場を離れないでください。一旦この電話は切ります。くれぐれもお気を付けて！」

古瀬にも電話の声は聞こえていたようだ。

「山口さんがテロに遭ったって！？」

「その可能性があるそうです。悪の巣窟に立ち向かったと思われます。しかし、そんなバカな……」

山口のあまりにも真っ直ぐな行動に「何故？」という思いを巡らせていると、一発の銃弾がオフィスの窓ガラスを打ち抜いた。「ここまで狙うか!？」と思って振り向いたところに、側頭部を打ち抜かれ崩れ落ちる古瀬の姿があった。

「古瀬さん、しっかりしてください！ 古瀬さん！！」

抱きかかえる真木の膝元がみる間に真っ赤に染まっていく。吹き飛ばされた左側頭部は耳がそぎ落とされ頭蓋骨も一部砕け散っている。ポカンと見開いた両眼は瞬きもせず、あれだけ饒舌だった口もまったく動かない。

「古瀬さん、古瀬さん！！」

真木は喉元に手を遣るがもちろん既に脈は打っていない。そんな中、二発目の銃弾がオフィスに打ち込まれ、デスクに載った書類が吹き飛ばされ宙を舞った。そこへ机の上に置いた携帯が鳴った。助けを求めようと古瀬を抱きかかえたまま差し出した真木の左手を一発の銃弾が打ち抜いた。左手首から先を失った真木は抱いていた古瀬もろとも床に倒れ込むと激痛に悶絶した。携帯はまだ鳴り響いている。気絶しそうな痛みの中、今度は右手を伸ばし、携帯をそろりと取り上げた。

“Help me!”

“Hi, see the door of your office. Bye.”

真木は言われるままオフィスのドアを振り向くとマスクを被った3人の男がドアを蹴破って入ってきた。

“Where Mr.Yamaguchi is?”

“He is out. Maybe your organization killed him.”

“Hahaha, ^{バカめ}idiot. Yamaguchi killed our boss. We are searching for him. Where he is?”

——山口さんがイスラム過激派組織のボスを殺した？ ははは、それは笑える。まだ彼は生きているのか。思う存分やればいい。俺にはもう古瀬さんもいない。自分の左手もない。失うものなど何もない。

“I know where he is, but I’ ll never tell that.”

“Shoot him!”

三人の中で先頭に立った男が小脇に抱えた散弾銃を容赦なく真木の身体に打ち込んだ。真木はその銃弾を受け、全身から血を流しながら遂に背後に崩れ落ちた。屍となった真木と古瀬はお互い顔を寄せ合い、何かをお互いに話しかけているようにも見えた。血の海の中に男女二人の遺体を残し、” ^{くず野郎}bastard!” と吐き捨て3人は姿を消した。

底知れぬ魅力を感じ、生涯をここで終えようと誓ったバングラデシュで真木、そして古瀬は命を落とした。真木が銃弾に崩れ落ちながら古瀬に向き合い、口にしようとした言葉が何なのかは分からない。その夜、二人の遺体を前に合掌し、すぐさま消えた人物がいた。それが誰だったのか誰も知らない。

翌日、東洋テクノロジーでは緊急経営会議が開かれ、BOPビジネスを志向していた海外路線に『待った』がかかった。バングラデシュ駐在事務所の閉鎖も同日決まり、その夜には「真木、古瀬を偲ぶ会」が開かれた。悲しみに暮れる社員に丸田も西山もかける言葉がなかった。二人の生前の功績を称えるとともに、テロ行為の断固たる阻止を掲げ、日本政府にも断固アピールしていくこととした。

真木と古瀬の命を奪ったテロから半年が経過し、東洋テクノロジーを取り巻く事態も平穏を取り戻す中、一人の男性が聖路加病院を訪れた。数箇月前から意識を取り戻し、言葉もある程度話せるようになるなどゆっくりと回復の兆しを見せてきた宮津を訪ねたが、真木を名乗るその男性は受付で面会を謝絶された。

「部屋番号なら知っています。断られても勝手に行きます」

受付の女性が慌てて部屋を飛び出し、後を追ったがピストルで右足の脛を打ち抜かれた。

「バカめ」

エレベータが17階に上がった。左手に3番目の部屋が宮津の部屋だ。そろり、そろりと1701号室、1702号室と順に部屋番号と氏名を確認し、「1703号室 宮津隆一郎」の名前を見てフツと笑った。やや重い引き戸をグイと引き開けたその先にはライフル銃を抱えた特殊急襲部隊SAT10名が銃口を山口に向けていた。山口はそれを見て薄ら笑いを浮かべながら、「誰がバングラデシュのテロをあそこで食い止めたと思ってるんだ。そもそも平和ボケしたお前ら日本人が金儲けばかり考えるのが悪いんじゃないか。上等だ。やれるものならやってみろ！」とまくし立てた。その直後にSATの狙撃隊が山口を目掛けて発砲し、一瞬にして山口の姿は血みどろの屍と化した。その時、山口はISILバングラデシュの一員として国際指名手配を受けていた。

別室に隔離されていた宮津とその妻はマスコミの取材に対し、「山口とは面識がない」とだけ答えた。すぐさま現地に駆け付けた西山と丸田は嚴重に内部を見せぬよう包囲された現場を遠巻きに見つめながら、「まさか彼がISILのメンバーだったとは……」と嘆息を漏らした。

その後の調べにより、「危険思想を持つ者」との理由で山口は2年前にジャパンエンジニアリングを解雇されていたことがわかった。また、国際NGOであるSADAは一部の指導者がイスラム過激派組織と深く関与していたことを公式に認め、組織解散を表明した。山口を嘱託社員として受け入れていた東洋テクノロジーも過失を認め、バングラデシュ政府に対して謝罪するとともに、JICAプロジェクトは辞退するものの治安が回復次第、同国の発展に資する何らかの措置を講じることを表明した。

その後、奇跡的に病状が回復し職場復帰を果たした宮津の命によって、東洋テクノロジー本社ビル1階駐車場の片隅に「鎮魂碑」が建てられた。真木が懇願したバングラデシュ駐在を真っ先に承認し、事務所設置後わずか半年間で二人の部下を亡くした丸田と西山は自分自身を深く責めた。二人は毎日の出勤時と退社時に必ず鎮魂碑に出向き、両手を合わせた。他の社員も海外事業への

参画が決まった際などにはその石碑に社員の安全を祈願するのが同社の慣わしになった。そして、その石碑の脇には一对の男女の石像が添えられた。その姿はお互いを守り、優しく対話するような姿に映った。彼らが遥か異国の地で愛の言葉を口にしたか否か、今やもう誰も知る由がない

。

そう遠くない未来に

<http://p.booklog.jp/book/110319>

著者：小杉 匠

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/cosgy/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110319>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/110319>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ